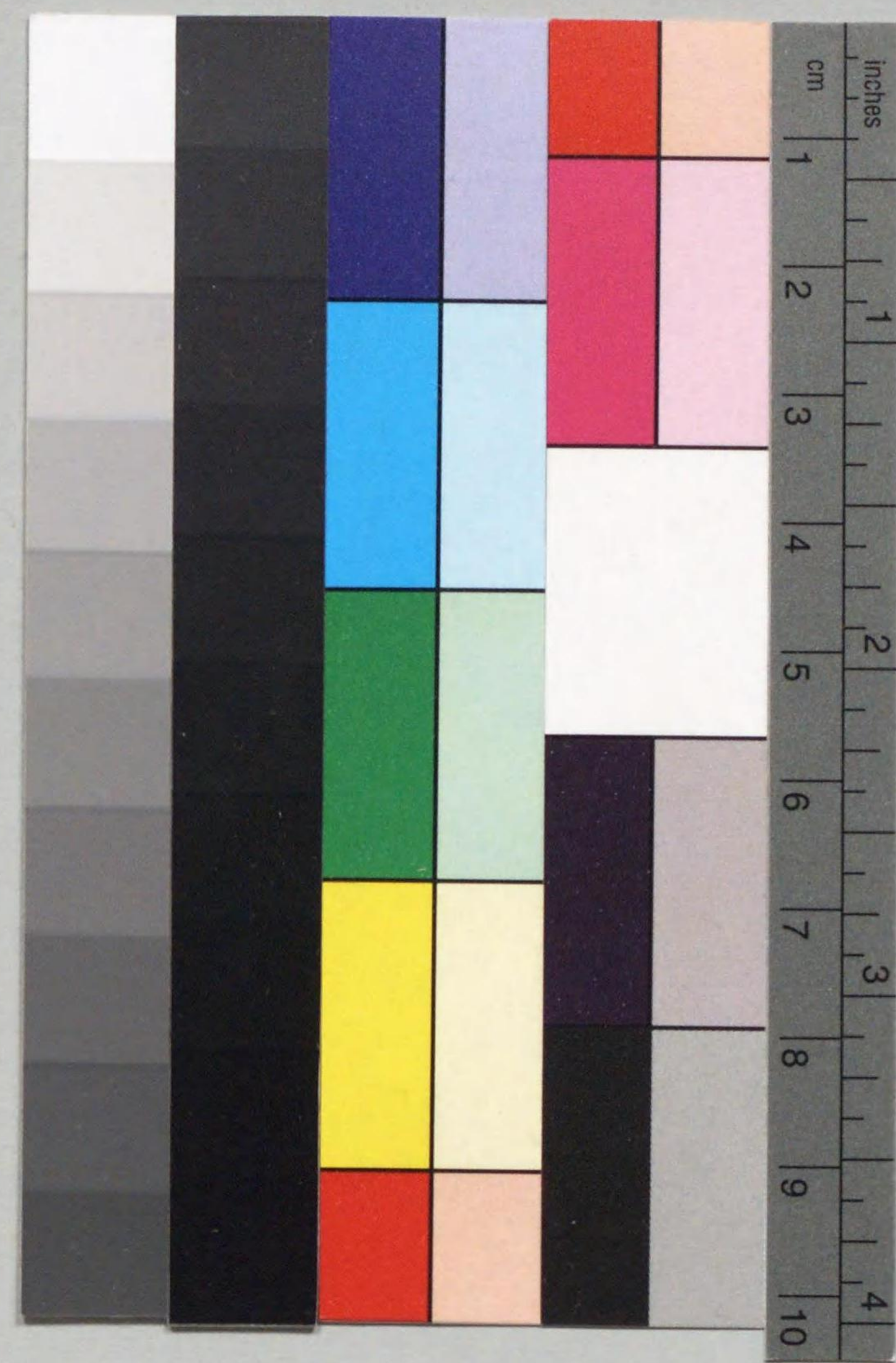
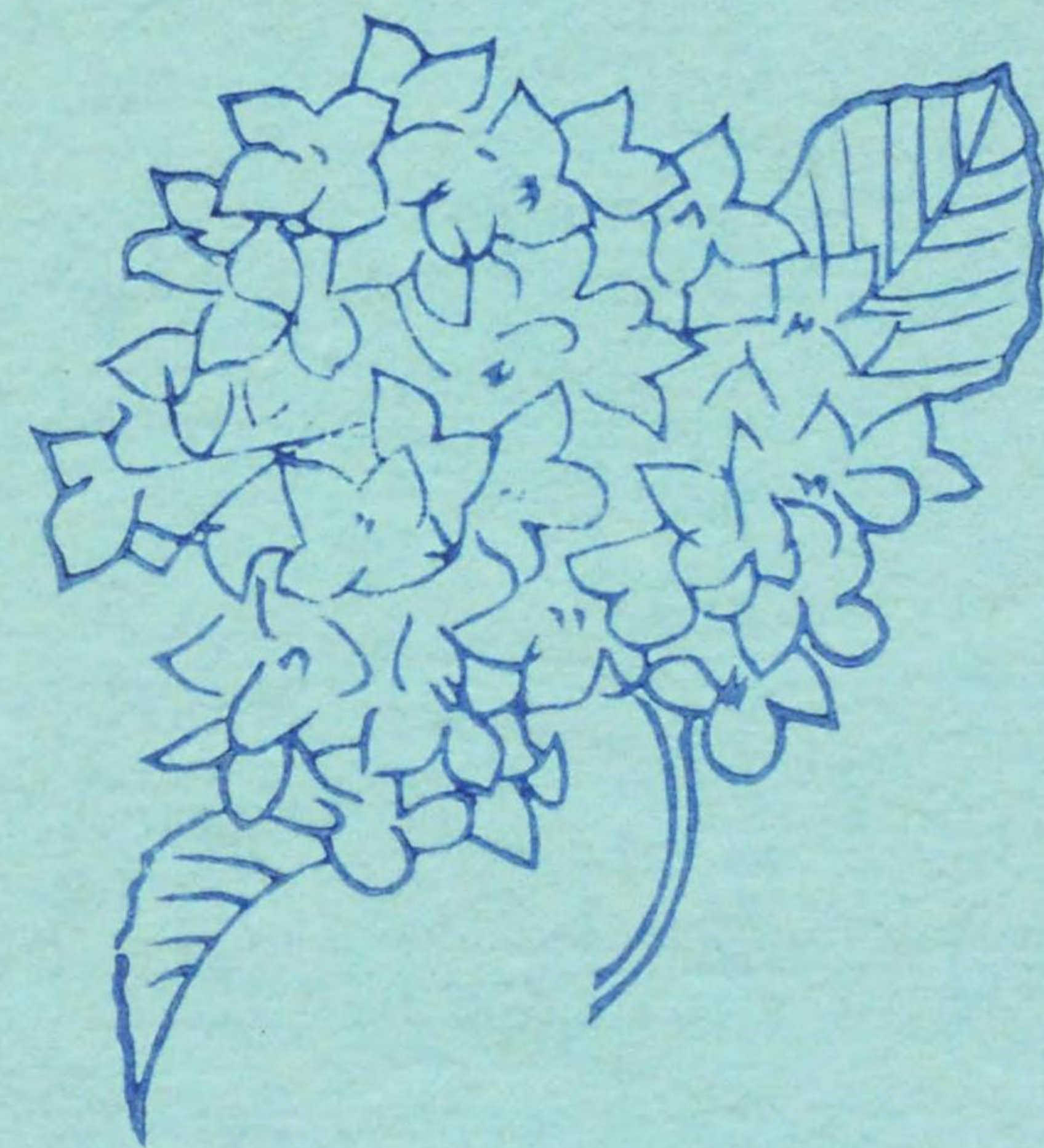
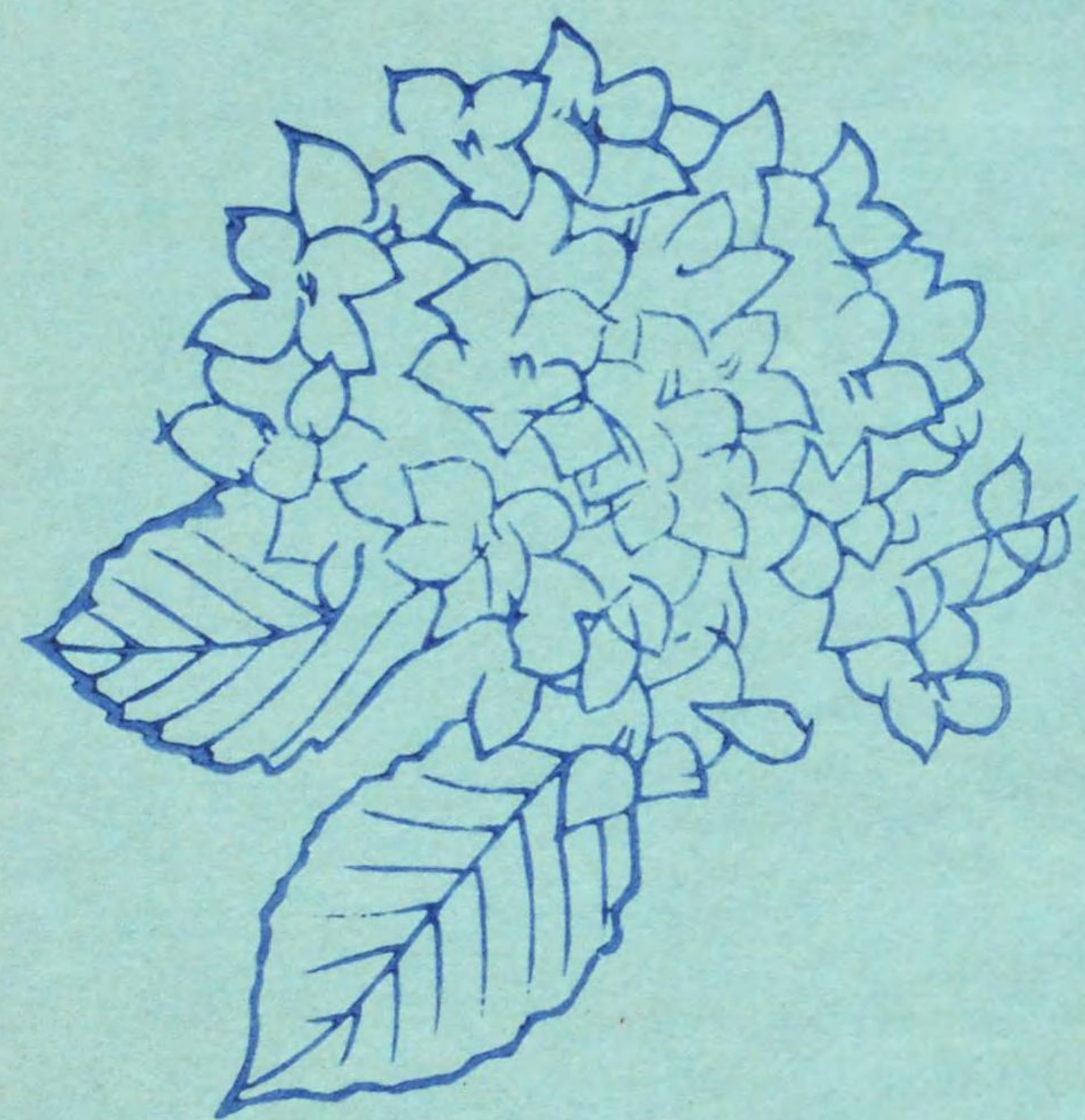


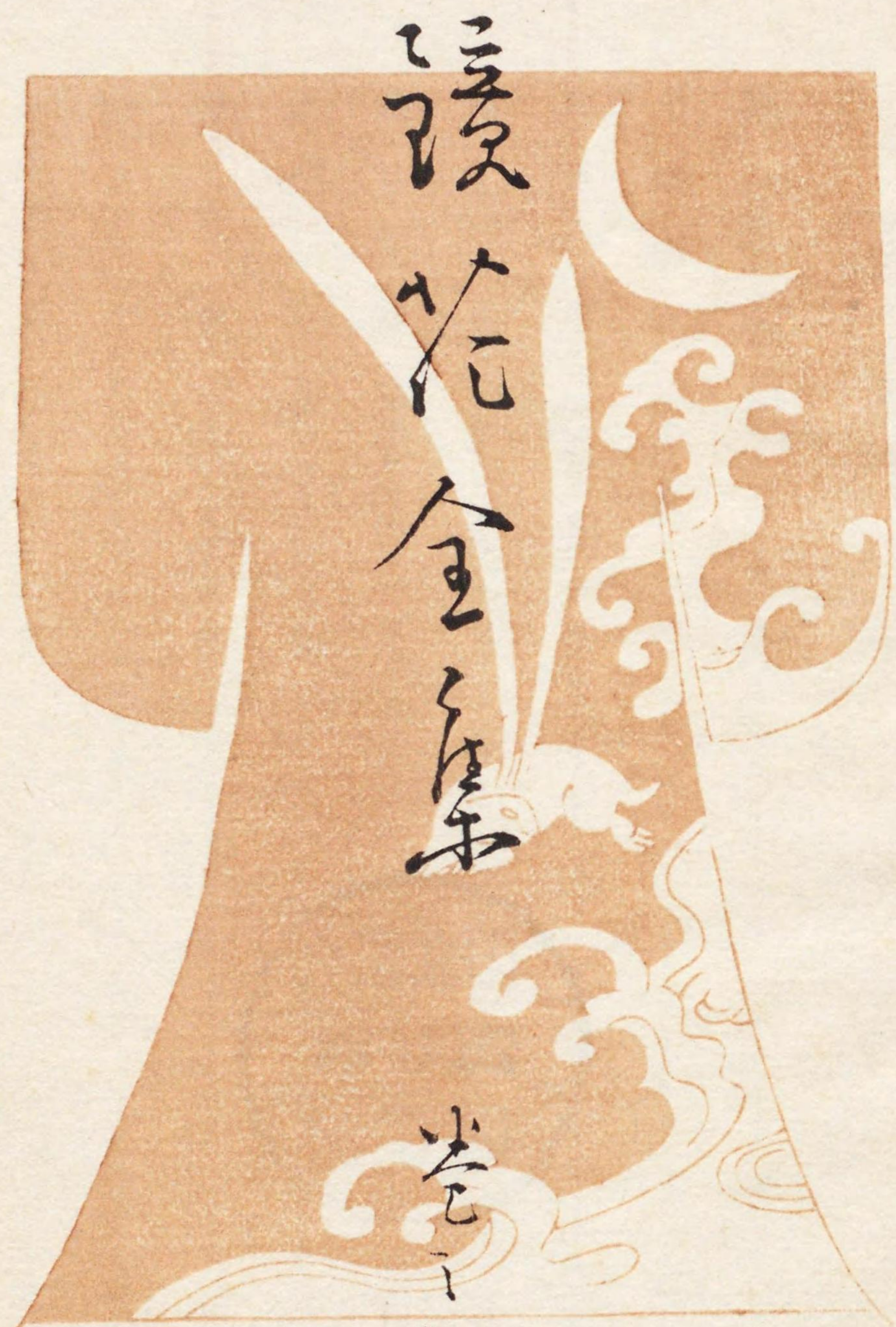
918.6
1989k



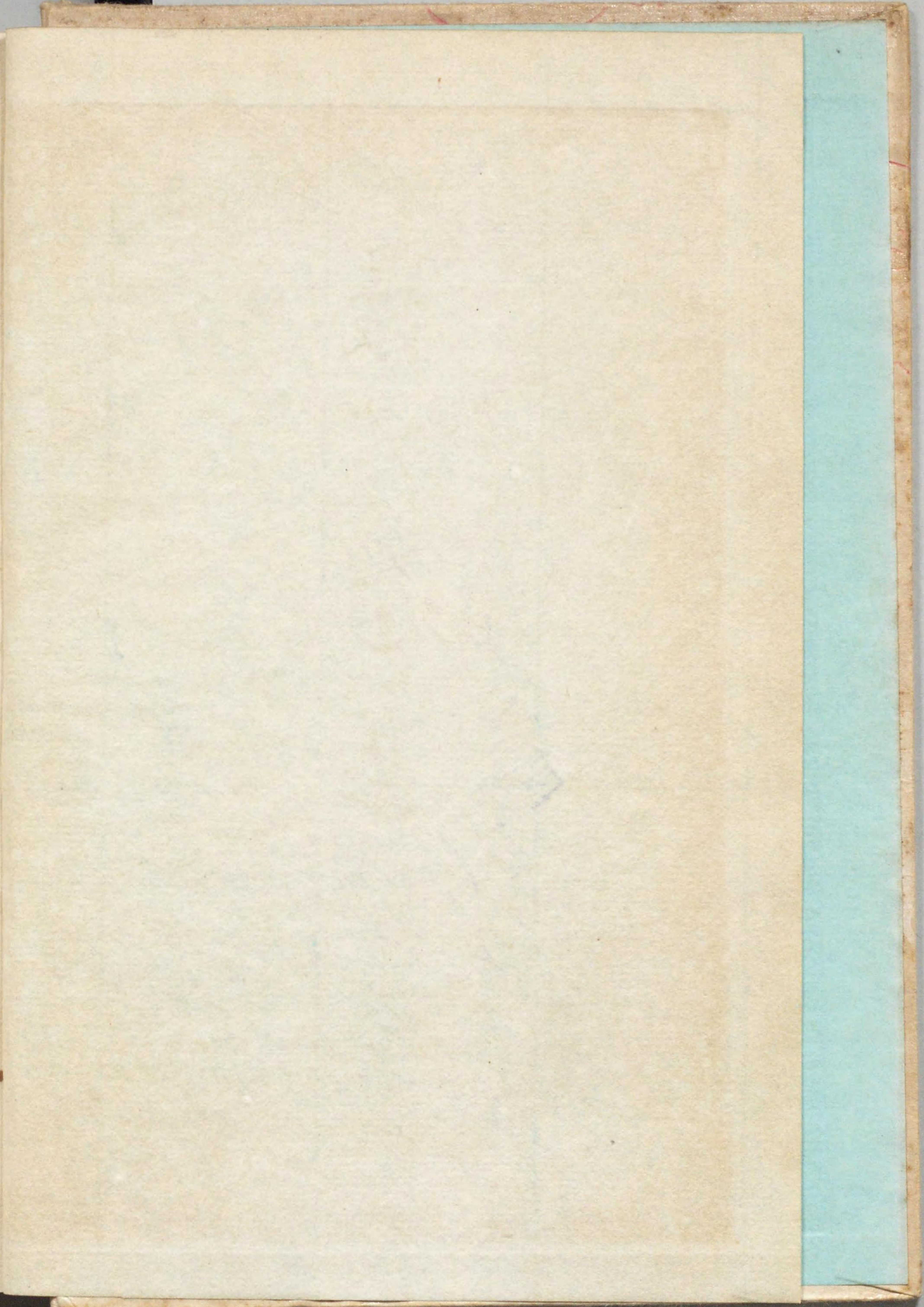
00252000







七





Handwritten vertical text, possibly a signature or title, in dark ink.



252000

目次

袖屏風	(明治三十四年十一月)	一
女仙前記	(明治三十五年一月)	八九
きぬく川	(明治三十五年五月)	一九
妖僧記	(明治三十五年一月)	二七
祝杯	(明治三十五年一月)	一八五
波がしら	(明治三十五年二月)	三〇一
青切符	(明治三十五年五月)	三三九
やどり木	(明治三十五年八月)	三七七
お留守さま	(明治三十五年九月)	三六三

親子 そば	三人客	(明治三十五年十月)	二七九
起	誓文	(明治三十五年十一月)	二九三
舞	の袖	(明治三十六年四月)	三九五
二世	の契	(明治三十六年一月)	四八五
千歳	の鉢	(明治三十六年一月)	五三五
置	炬燵	(明治三十六年三月)	五三七
伊勢	之卷	(明治三十六年五月)	五四九
樂	草取	(明治三十六年五月)	五八九
狭	言	(明治三十六年五月)	六二九
鷺	の灯	(明治三十六年九月)	六四五
留守	見舞	(明治三十七年三月)	六八三

袖
屏
風

一彩先生 巳年十八 A—A 境内 尼興行 露草 朧富士
通り魔 長夜 一村雨

一彩先生



「當家一流人相家相、望事、願事、旅立、縁談の吉凶、方位、方角、失物の判断、」
當今は知らず一しきり仲見世の右側、金龍山淺草餅の手前の角を曲らうとする邊に、烏帽子を冠り、素袍を着て、反齒隠と俗にいふ手巾を巻いた美人の賣卜が顯れて、夜々通行の者を驚かした。

其とは趣を異にするが、爰に又異様な賣卜者、靴を穿き、釦のきらびやかな、學校の制服で、目廂の附いた帽を頂いた年若な人物、武州多摩郡五宿を良過ぎて駒返村に至る、甲州街道に沿うて左の方、南に三町ばかり、並木から直ぐに其一叢の樹立も見える、土地の鎮守の秋の祭、夜宮といふのに、奥の院の裏手に當る田圃の細道、小流の際なる薄原を背後に、往來に向うて、杉の切株の頃あひなのに腰を懸けて控へたのがある。

風屏袖

先生、家を九曜軒、號を一彩と云ふ、即ち九曜軒一彩、日頃九星の術を修し、易學に達した秀才、本性萩原、名は要介、好こそものはと諺にもいふ、分けて慾氣がないのだから、狙ふ的は違ふけれども、百歩柳葉を射て、當を外さぬ妙あり。

去年の菊月、同多摩郡櫻木村の知合の許から、近年にない庭の木の實の出来、玉川縁の散策をかねて泊掛に秋の色を味へ、池の鯉も肥つたといふ招を受けたので、勇をなし、木登も爲よう氣、野山も駈る氣、袖、裾の足手纏、身のこなしまゝならずと、そこで制服。

但しいつも膚身を放さぬ、御存じの竹といふ情婦を、恭しく袱紗に包んで持つて出たのが、事の起因となつた。

土曜の午過、志した櫻木村、知合の家に着くと、待設の饗應あり、悉しくはこゝに贅せず。恰も當夜鎮守の祭禮、小さな社で、附屬の村數は多くもないから、土地自慢の口からも街道隨一とは申さぬが、此の祭の夜に限り、役人の黙許、内證でも大目に見て、五宿中の遊女屋が抱妓共に外出を許し、參詣をさせる例、御女郎衆の道中見ると、いや出ます、出ます、意外の賑。話の種類に見物を、と勧められて、要介が弗と思付いた、洒落が嵩じた悪戯、戀人の許に忍ぶより一段胸轟くと期しながら、上手に任せて耐へ切れず、東京ではまさかと思つた、恰も可し、筮竹は携へたり、五里でも八里でも踏出して居れば、旅の恥と度胸も極つて、一番周易速斷の看板を出し

て遊ばうと謂ふ。

然うすると、要介が話對手の當家の小旦那は、固より一名九曜軒一彩を心得て居るので異議のあらう筈なく、一所について居て判断を聞いても見たいが、折悪く免れぬ客來、人をつけて社まで送らせる事になり、然るほどにさても其時人やあると召さるれば、ほうと返事、猪を追ふ聲をして、作男の半六爺、庭から廻つて來て、御前に。

汝呼出す、別のことでない、東京のお客様、鎮守の夜宮に占の店を出さるゝ思召、大儀ながら供をして參れとあると、皮の厚い横手を打つて面白がり、先づ支度をと物置から、兩方の脚にする籠を兩個、張物板を運び出し、之に毛氈をかけるとして、行燈ではをかしなもの、洋燈では間に合ず、提灯では張合なし、はて、何をがなと、一同四邊を詢したが、一段のものをこそあれ、内の坊やが手遊にしては大形の萬燈、直ぐに引剝がして半六が手細工で張換へる、要介はお手のもので、それに乾坤の卦を認めた、些と紅を入れて墨黒く、周易判断。

二

籠は二ツ層ねたるを背に負ひ、板を小脇にして半六、片手には件の看板に灯を點したのを直ぐに提灯のかはり。

「路々弘めになんびあ」と、大乘氣で早や出たが、昔々、板間ヶ原の合戦に勝手方敗北して落人といふ扮装である。

「新造の御客がありましたら、先生、念入に占つて遣つて下さいまし。」と縁の敷居越に片膝を突いて小旦那は見送つた。

廣間には臺洋燈が三個、黒い天井の見ゆるまで明く照して、祭の客が五七人、丁度杯が禮に始まつた處、未だ座が亂れず、灰吹の音もトン／＼と聞え、

「行つて入らつしやいまし、
「お静に。」

と田舎人の律儀さ、慇懃に挨拶されて、縁に腰、片足を膝にかけ、左の靴の踵を填めて居た要介は、恚う改まつて出られては大人氣なさの極悪く、急いで穿いて、衝と立直ると、ものをも言はず、莞爾しながら、すたく／＼と中庭を横に、半六にすれ違ひざまにすつと出る。

「待たつせえ、私が先へ行きますべい」と爺は看板の灯を差騷したが、構内の樹の蔭になつて座敷の灯も届かぬ暗がり、小兒が腕白の木馬にばつたり。

「や！」といつたが要介横さまにたじ／＼。
「危え、もし、だから言はねえこつちやあねえ、占者身の上知らずかい。はて、然やうなら若

旦那様行つて参じます。」

「ぢやあ、御苦勞だが、爺や、お氣をつけ申して、と身を起して小旦那は眞面目である。

「はい、此の九曜軒を背負つてもものともしない、半六はしやつきりと足を構へて、

「待たつせえ、先生、然うせか／＼するもんでねえ。」

要介は早や門の前、藪と藪との中を通ずる、狭くは無いが眞暗な路傍に待ちうけた。

「さあ、何か持つて行かう、した、かな荷物だ、お氣の毒な。」

「何、お前様。」

「いや、大變だ、板はあるし、籠はあるし、其上兩手に持ものがあつては、歩行かれるもんぢやない、貸し給へ、其の板を持つから、

「御心配は御無用だよ、

「然うでない、そんなに御苦勞をかけては、私が氣が濟まないから、いゝや最う、あゝ、知つた人に見て居られちやあ、洒落でも極が悪いけれど、これから先は田圃道だ、よ、持つから半分此方へおくれ。」

「それまでに言はつしやるものだ、そんなら、はい、之を持たつせえまし、此の看板と、毛布でがさあ。あとは恚うやつて、がかいは大きうがすけれど、軽いもんだ、罷り違へば馬でも引擔ぐ

親仁だに、さあ、毛布を、

「よし、と取つて真中を摺んで要介は肩に乗せたが、續いて渡す、周易判断を描いた、萬燈を右見左見て、

「こりや消して行かうぢやあないか、些と道中が爲難いやうだ。

「はれ、駄目い言ふもんでねえ、弘めになるだよ。畦道をお前様これを提げて歩行いて見させえ、馴れつこになつて人魂の飛ぶのには驚かねえ徒も、不審の打つて目いつけるだ。そこで鎮守様で店開、直ぐに大當、何うでござります。お前様、然うばにかんではいけましねえさ、と呵々と笑ふ氣輕さに、要介もつい其の氣。

三

「先生、お前様、小錢の些と持つて居さつしやらぬか、

「あ、澤山はないが、幾千ばかり、」と其ま、手巾と一所に突込んで置く衣兜の紙入を探つて、これは心付かなんだ、幾千ばかりと問ふまでもあるまい、親仁が骨折賃の催促と合點した、要介は、鎮守の背後なる畦道に、早や其の賣卜の新店を開いたのである。
渠は軍鶏籠を兩脚に、板を渡し、毛布を掛け、之へ彼の萬燈の看板を差置いたのを、前に控へ

て、杉の切株に腰を掛け、鎮守の森と、此の畦道とを劃つて流る、用水の小川の岸に、むらくと茂つた薄から、其の半身を顯したのが、店の蔭に蹲んで居る半六を些いと瞰下して、骨折賃の請求に應じようとする、親仁は何事も思はぬ狀で、

「幾千ばかりで無いや、お前様持つてるだけ出さつせえ、私も青錢を交せてありつたけ足しませうべし。」

「お爺さん、然うして又五宿をひやかさうぢやあないか、不可いよ、不可いよ、お前お祭酒に酔つてるから、」要介は苦笑する。

「は、は、は、いや、」

「申戯ぢやない、先の内は何か人前に煽り立てて置きながら、途中まで來ると酔が出て、自分で剛情を張つて持つて來た荷物を田圃道へ抛り出すつて、お前、弱らせ切つたぜ。酷い道だな、泥濘で驚いた、亂暴な、今の若さに賣卜でもあるまい、宿場を冷かさうなんて、幾歳になるんです。」

「九紫の午でがす、」

「え、と六十二か。」

「當りました、はあ、魂消た、豪えもんだ。」

「馬鹿にすらあ、」と笑つたが、急に斜に構へてしやんと身繕をする、店の前を二人連の壯俊。まばらな星の下に立つた、畦の榛の樹の中から出て来て、通りかゝつたが、二人とも頰冠、遊びに心が急くと見えて、振向きもしないでぶらりと行き過ぎる。

鎮守の境内は動揺めく物音、千筋百筋に入亂れて脚を交へ、袂を搦む、雑踏のほども思はるゝ、露店の裸火はこんもりとある森の中の、一際暗い處に赫と映つて、後にした背も暖いばかり、五宿をかけて街道筋から、群集の波が一分毎に、境内さして寄せ来る氣勢。

裏田圃は寂りして、風も冷いが熱する祭の氣を籠めれば、今朝から晴れた空も半ば暗いやう、玉川の流れは大廻りに、却つて、前の方から幽に響いて来て、三鷹村、深大寺あたりにト、ントと絶えては續く鼓の調、耳を澄すと冴え切つて、遙に囃子が聞えるのである。

「評判々々！」

要助は、唐突に脚下から叫ばれたので吃驚した、鎮守の方でも人混の中に評判、評判。

「あ、評判、評判」と半六は酒の醒際、氣疎い聲して、度外れな噓一ツ。

「ほう、先生又今のも素通りだあ、それだから、我、何でも鎮守様の鳥居際あたりで店を出さつしやいといふのに、お前様ありやうは含差んだだ、口ぢやあ恁麼商賣は寂しい處でなければなんねえとツて、こゝらへお神輿のウ据ゑるもので、見さつせえ、人通せえ、ろくそつばうありは

しねえ。むかう前のおん女郎さ目的だで村の者なんざ、田圃道は鐵砲玉で飛ぶでがす、足の溜りやうはありましねえ。どんな賑な舞臺でも裏手へ廻ると、村芝居ぢやあないが忽ち暗討。」

と貧乏のるぎ一ツして、

「此の風の寒いことは、南無阿彌陀佛々々。」

然矣、爰にありて祭を聞くは、恰も大入の劇場を裏木戸から見る趣。

四

萩原要介は喟然として、

「爺さん、御生だから其の念佛だけは御免蒙る。評判々々にも驚いたが、お前様から一杯機嫌で、通りかゝる者を見ると、さあ〜占ちや、占ちやツて大聲を出したぢやあないか、何のことです。」と微笑みながら屹と睨む。

「九紫の午だよ。」

要介はチヨツと舌打、

「爲様がないな、交ツ返しが濟むと小さい錢はないかツて宿場の非望だ、やがてお祭の評判々々ね、忽ちお念佛となります、からもう、神祇、釋教、戀、無常、一時だから可思しい。」

可いよ、幾干か差上げるから一杯飲んで来たまへ、天地玄妙の奥を探る術者の前に、お前のやうな、アイヤ親方然やうでございが居た日にやあ、これでもお客が来た時に、甚麼交ツ返しが始まらうも知れない、勿論、人通りも少いんだけれども、お前が鳥を散らすんです、宛然案山子見たやうだ、と態と眞面目らしいう呟きながら、二ツ三ツ小粒なのを、

「さあ、添水へ御報捨、お布施ですよ。」と握らせた。

「これは、」
と親仁は額を撫でて、

「早や、これは何うも、曩細いと言ひましたは、慥麼ことぢやありませんねえ、私も足すだから、お前様も一握出さつせえ、然して、豪え先生で、澤山見て貰ひ人のあるやうに、机の上へ並べて置くといふ謀計ださ、もし、早繼の粉でも、見切賣の瀬戸物でも、見さつせえ皆積んである、あれだよお前様。」と正直に辭退する。

「解つたく、何、そんな人寄をするにも及ぶまいけれど、これはこれさ、私も些と薄ら寒くなつた位、お前一杯飲んで来ておくれ、歸りには又手傳つて貰はなかりやならないから、

「いんえ、しかしお前様、これは困ります。」と尙後込。
要介は心付いて、

「其に、蠟燭を買つて来て貰ひたしさ。」

「成程、」といつて親仁は頂いた手を曳いて、中腰になつて、

「お、然うくつい浮かれ出して繼交に氣が付きませなんだ。」

「又あの森の下ン處は何うして酷い泥濘だつた、暗くつては歩行かれない。」

「いや、其の時分にやあ、お月様がござらつしやるべいが、とがツさりいはせて薄の中から、空を仰ぎながら半六はヌイと出て、

「しかし些と行つて参りましょかい。」

「何うぞ、」

半六は、やつとなど伸をして、ひよいと頭を下げ、

「御免なさりまし。」

と直ぐに、てくく。

「爺さん、」

「ひやあ、」

「お前買物は蠟燭だ、可いかね。」

「ひやあ、」

「油、元結に遣ひなさんなよ。」

「九紫の午でござりますわ、」

兩人

「は、は、は、は、」

「何うして食へるんぢやあない、いづれ勘當ものだらう。」と要介は獨言、四邊を眊すと誰も居ない、祭の物音は聞馴れて、弗と身に着くは、薄の中に細く蟋蟀の鳴くのである。

「秋だな。」と思はず呟いたが、何か物足りず寂しさう。

曩から手巾を廻して徽章を隠した、帽子を脱いで、机の上に差置いたが、形が目立つから、取直して、薄の穂に預けると、頷くやうに靡いて、一寸請取り申候。

巳年十八

五

要介は徒然に、巻蓆入から一本抜いて、毛布の上に片手をつき、看板の上へ伸出して蠟燭の灯を取らうとすると、滿地秋冷に、蓆の露けさ、容易くは煙が來ず、強くすれば消えむとする。

時にさらりと風が通つた、颯々といふ。

是に連れて祭禮の群集は其の一角を殺がれるのであらう、境内から街道の方を差して汐が退いて行くやうであつた。

唯寂したので、身に染みて、吸ひかけた蓆も黠けず、切株に腰を下すと、薄が又靡く。

九曜軒の店を、一間ばかり放れた處に、フトイみたるものこそありけれ。

薄に映る影も幽に、廣場を、唯蠟燭、然も八卦を描いた紙を隔てた灯であるから、つい目の前の姿も判然とはしないけれども、思做しか、年紀も未だ若い婦人。

小造な可憐らしい、衣紋も、帯も恁る處に珍しい優形だと、要介が心付いた時、此方を見て居たのが些と顔を背けたが、透すつくツきりと色が白かつた。

婦人はしとやかな其の立姿を、向へ開いて舊來た路、西の方に二足ばかり、駒下駄の音を移したが、立停つて何か考へる。

やがて要介の店を見て、從々と進んで來て、再びあと退に一足退つた。

諸は占ふに難からぬ、此の娘、周易に用事あり、宵から倦み果てた新店の一番客、ござんなれと胸は躍るが、婦人だけに抄々しくもの言はず。

聲を懸けるも異なるものと、要介も猶豫つて黙つて瞠めると、娘は然も物言ひたげな素振で居た

が、思ひ切つたか、引返さうとするのである。

「姉さん、」

耐りかねて呼んで見た、一彩先生、押賣の恥辱を顧みるに違なかりし也。

「占て上げませうか。何うです、」

「はい、」と沈んだ優しい聲して、娘は渡に船のいそぐと店に來たが、小さく疊んで美しく持つた手拭を、帯のあたりで爪さぐりながら、

「一つ願はれますのでございませうか、」

先生は鷹揚に、

「はあ、宜うございませう。」

「貴方御申戯ではございませんの、」と一寸斜に俯向いて莞爾した美しさ。

要介は、自分の服装と、店の狀に今更ながら氣が付いたが、をかしさを耐へて熟と眞顔で、

「申戯！ 何ういたして、何でもおつしやい、能く占つて上げませう。」

「あの、……」と娘は言ひ懸けたが、手拭を指の尖で又一寸。

「矢張お鳥目を差上げまして、而してあの願ひまして宜うございませぬの。」

「え、お鳥目、お鳥目、何、そんなものは入りませぬ、」と要介は少しまごつく。

「それでも、あの何ですから、……」と工合の悪さう、要するに先生の容貌と風采を推して、孔方を以て左右すべからずとなし、憚る所あるに似たり。

右左して此の珍客を通しては妙ならずと、要介は一議に及ばず、

「え、見料は二錢頂きます。」

娘は何か可愧さうに、帯の間に手を入れながら、少し傍を向いて、

「それでは、何うぞ。濟みませんねえ、」

「はい、いえ何ういたしまして。」

六

其ま、言葉が途絶えたので、要介はうつかり椅子の意で、前に摺らして寄らうとすると、刻下腰をかけて居るのは生拔の木の端であつた、一個これ樹下石上の人。

手持なければ衣紋を繕ひ、

「それから何を卜ひませうね、縁談ですか、失物ですか、何か商賣をなさらうと謂ふんですか、どんな事です。」

「はい、あの、」と下目になり、折つた手拭の端を撫で、俯向いて暫時。

「願事でございますわ。」

「願事。解りました、姉さん、ぢやあ年紀だけ聞かして下さい、幾歳です。」

呼吸の下で、

「十八になります、」と答へた。

「月は、お生れなすつた、」といひかけて要介はざくりと筮竹を取ると、心自ら正しく、眉引緊り、唇固く、半ば眼を閉づるのであつた。

繰返すまでもないが、要介は其の易に於て、自ら怪しむばかり妙を得て居るけれども、對手が婦人なり特に妙齡の美人、願事と言出すにさへ、どんなに極の悪い思をしたらうと察するにつけても、其の所謂願事なるものに對して、神の如き豫言を與へようと念じたのであるから。

「九月うまれでございます。」

と此時いつたのを聞き澄して、忘るゝばかり額にあてて、乾坤亨利、九月生、十八歳五黄巳年の女、天地間に圓滿なれと、颯と碎くと祕密は破れた。

「呀！」

敢て體裁を造つて、算木を並べて見るまでもない、豫て胸中に記憶する此卦、異數の大凶である。

思はず片腕を岸破と机に、灯の所爲かと怪しむまで、眉字の間、頬のかゝりに曇のある女の顔をじつと瞷めた、要介は良慌しげに、

「十八だといひましたね。」

先刻から、彼の疊んだ手拭を口にあてて、恍惚して、未來を指す竹の行方を、傍目も觸らず瞷めて居たのが、

「はい、」といふ。

「そして九月のお生れですな、」といひかけて、要介は答を待つ間も心忙しく、衣兜の中から取出した鉛筆を手に、手帳を開いて白い處を二つに開いた、要介が易の奥儀は數を以て算するのである。

豫て此の術に馴れたれば、平常は、豫言の問題を解くに、決して斯の手數を用ゐないのが、餘のことに自ら我が術を怪しんで、願くは其の誤ならむことを密に心に希ひ、トを再びする事は嘗て其の術に長けてより數へて此時たゞ三度目であつた。

最初は嘗て、要介が下宿をした家の、年若な女房で、二晩續けて悪い夢を見たといふのを、トふと、此の卦が出たので驚いて數へ直すと、二々が四で動きが取れず、其となく注意をしたが、三日目の夜縁日が更けて歸りがけ、無縁坂を上つて、醫科大學の裏手にかゝる時、意趣斬で助か

らす。

次は出役の少尉であつたが、其は名譽の討死をした、命なし。

南無三寶、此の女に、乾坤氏の命する處正に齊く其である。

不思議に魚の獲物がなく、最後の網にかゝるのは縁に繋る水死の婦、其は二番目と草双紙で生命の助る法もあれと、要介は胸を静めて、鉛筆の尖や、顫へながら、先づ問題Xとす、女をAとす。

A—A

七

「お待ちなさい、お待ちなさいよ、」

要介は彼の萬燈の灯に額を寄せ、頬を手帳に押當てるやうにして凡そ二枚半ばかり、解いては結び、減いては加へ、かつこを抜き二乗を削つて、サラ／＼と五分時ばかりの間、恰も鬼ありて命する如くに明に顯れた答は「A—A」であつた。

佛者の所謂本來空、空即是色、色即是空、恁の如くにして人生零也。

要介は期したる事ながら、掌中の珠を奪はれたるやう、はたと鉛筆を取落して、思はず手を放つと、押へた重みが失せ、ほろりと表紙が躍つて、閉ぢようとする手帳を片手で又押へて、「A—A」とあるのを、見直してほつと溜息。

「貴方、恐入りますこと、」と娘は謝して頭を下げた、九曜軒要介の風采は又唯大道に於ける易者の如きものでない、容姿謹嚴今其の代敷を算した風采、譬へば學士會員が論文を草する如き態度があつて存したのである。

「はあ、」とやがて再び吐息とともに返事をしたが、幾度も顔のみ見られて、頓に言葉も出なかつた。之を委しくすれば凶は逾凶、娘が身は今夜の内。

「姉さん、家は遠いんですか。」

方角でも聞かると、娘は何の氣も付かない様子で、

「つい、駒返といふ處でございます、」

「直、近い？」

「否、些とばかり離れて居ります。」

要介は始終手帳の中を差覗いて、

「十五六町離れて居ませう。」

「然うでございますよ。」

「其で、祭禮を見物に、そりや何トの方でなくツても解つて居ますが、」と寂しげに打微笑み、
「内から入つしやる時はこりや二人ばかりお連がありましたね、おはぐれなすつたか、應、然う。
否、姉さんの願事は、何も連の人にかゝつたことぢやありませんが、」と言懸けて、同じ代敷の運
算中A+B-Cとある處を、指の尖で一才障つて見た。

「姉さん、今居る處は此の邊でも、お前さんは遠方から來て居ますね。何、東京ですか、然うで
せう。而して願事といふのは、矢張東京に居る人の事で、那樣に久しい以前ぢやあ無い、去年春、
お待ちなさい。」

と一ツ鉛筆でかつこを足して見て、

「一昨年の、然やう……一昨年の暮あたりから知己になつた方でせう、年紀は二十……三四位か
も知れませんか。」

「はい、」と顔を背けたれども、愠くまでに能く中る、早くあとを聞きたさうに、前へ出て差俯向
いて、

「はい、はい。」

「しかし、其の間に種々こりや譯があつて、其で當時別れてお在なさる、而し男の方も今得意の

場合、」

解るまいと思つたから、

「今の處物事が思ふやうに行かない、然う、まゝにならぬ身の上になつてます。一體目上の方が
居るんだ、兩人とも主人がありません、姉さんの方は婦人の御主人。」

「え、駒返しの庵室に御新造様が在らつしやいます。」

「へい、御新造様、」駒返しの庵室、——胸に疊んで、餘事を問ふべき場合でないから、

「其處で男の方の主人の方でも丁と様子は解つて居ることだけれども、人の義理といふやうなこ
とで故とお二人を遠ざけてあるやうなんです、其處で、願事は、」

「あの、叶ひませうか、」と最う案じ過して耐りかねたか、娘は色を染めながら。

八

可愧しさうに、然もいそぐして、聞かれたのに九曜軒一彩先生、膽先がキヤリとした、此方
も素より正直な人物、あまり白々しい喜ばせも言ひかねて、

「少々其が些と工合が悪いんです。」

といつて慌しく、

「何そりや、何ですけれど、まあ何うも叶ひ難い。」
「え、！」

「此處だ此處だ、さあ此處だ、おう、皆來う、喜助、正平、」

折から吹來る風とともに、ばら／＼と三四人、木の葉の吹溜つたやうに机に集つた、いつれも微醉で、かけ構のない、野良調子！

「やあ、東京新下りの、トの先生様此處でがせうね。」

「こりや先客様がござらつしやる。」

と一人が娘に摺寄る。

「へい、もし、差向で、はあ、お邪魔な處ちやあござりましたねえか。」

「先生、」

「何うぞ一つやつておくんなされまし、」

「我等直其處で、櫻井村の小旦那が家の、半六爺に聞いて参りやしたよ。」

「正平、正平」と一個が一人の顔を熟と瞞め、不遠慮に店に手をついて、

「汝何をトて貰ふだね。」

「矢張縁談だよ。」

「もし、先生、うっかり此の野郎に取合つてはなりません、いけえ、おどけものだに、屹度は

あ、深大寺に大きな蟒蛇が居るちうが、本當だか、嘘だか、考へてくれさつせえと打出すでがさ

あ、

「何、しと、全く縁邊のことに相違ござりましたねえさ。」

「やあ、東京の先生、」と背から前の二人の肩に手をかけて、ひよろ長い男の、格外に小さな顔を

差出して、

「此の縁談は叶ひつこねえでござります、何、此の野郎のなんざ、先生様にトて頂くほどのこと

もねえだ、さきの阿魔が不承知でがすよ、喃、これ、對手が不承知な位確のことはねえだからね、

それよりか、私一ツ願事があるが、叶ふか叶はねえか、判断のウしてくれさつせえ、」

「此奴め、新左衛門が處の香典返を待つてやあがる、」と大警句を吐くものあり、押合つて居た連

中、はらりと解けて、一時に哄と笑ふ。

「何、何、四の五のアねえだ、私一ツ今爰に居た姉と、出来るか出来ねえか見て貰ふべい。」

「や、ほんに居なくなつた、」

と四邊を眺してきよろ／＼する、御百姓、口々に、

「何處の箱入だ、」

「つひぞ見かけぬ。」
「牧家が娼妓の妹でねえか、はあ、此間四ッ谷の大番町の親許から来て居るちうが、汝見たか、」
「見ねえよ。」

「それぢやああんめえかと思ふ、然うでなうて那麼綺麗な粹なのがあるもんでねえ、本場だよ。」
「おい、お言葉中とやらだが、四ッ谷の大番町が何で粹の本場だね。」

「然うか、本場でないか、」とまじりく。
「待ちねえ、駒返し彼の邸にやあ大變な女が居るといふぜ、誰も未だ見ないかい。」
「はあて、其か、」

「聞いて見させ、其のための先生様だ、先生、」
と言つて見ても返事がなし。いづれも手前勝手な身じろぎ、然も酒の上で夢中な連中、氣が着

くと灯が消えて居る。
「賣卜の先生、」
「おや、居ねえ。」

はツと隔り、縦横に入違ひ、背合せに、彼方此方、とぼんとして昫すと、些とも氣のつかかなかつた月夜になつて、寂寞として畦道に人々の影法師。

境 内

九

社の前を通つた時、開擴げた拜殿には、颯と夜嵐が吹通して、何も見えず、階の上の廻廊に二枚ばかり敷いた新筵に蹲うて、神主が一人、烏帽子を被り、白衣を着けたまゝ、賽錢のこぼれであらう、瘠せた手で拾うて居た。こゝを過るとて黙拜して、木の鳥居を潛り抜けながら、先刻の今で之は又餘り早く寂しくなつたと怪しんだ。

要介は心弱く、易の表を打附けには言出されず、障のないことを遠廻しに二ツ三ツ言葉を交へ、機會もあらば注意も與へよう、一目見て棄難い哀を感じた女を、路傍の人として差置かれず思ふ處へ、半六が附景氣に寄越したといふ村の壯俊どもに隔てられて、彼の脊高が連の肩から此方を見越す、其の格外に小さな顔を左右に除けながら、殘多さうに店を離れる女の後影を見送つて、あの弱々しい、體一ツに恐しいことのあるたけを背負つて立つかと、自分の業を信するだけに氣もそゞろ。縁談一ツ易を以て纏めた位で、謝金二銅の此の媒介人、宵の口を開けさうな様子もないので、とつおいつ、心を急る内灯が消えたのを機にして、濁酒の氣焰の中を搔潜つて密と抜け

た。三藏熟柿嶺を超えてほつと息。心あてに娘の行方を慕うて、小川の土橋の、昨日の雨で、粘土のやうになつたのを、渡つて、これから杉の樹立を一叢、眞暗な中から境内に出たのである。其の森の下道で透した時、眞先にちら／＼としたのはこれであらう、鳥居の際に、葎蕒で張つた、繩からげの、急拵と見える神樂堂があつて、顔の長い、鼻筋の通つた男が、社袴を着たまゝ、手にした裸火、跡片附をするのが見えた。

社は、御手洗にからんだ蔦の葉も末枯れて、石燈籠の根は最う枯尾花である、其處に、カンテラは早や消して、鬼灯賣の親仁が茫乎と立つて居る。

要介は二ツ目の石の鳥居を潛つた、路は街道の方へ前途に三町ばかり、一筋、眞直に出外れると五宿で、淀橋、堀内……東新井、などから續き、これから調布の里多摩川に沿うて府中となる、多摩川の流は正面に聞えて來た。

丁度街道から此の一筋道だけ、社まで、入組んで居るので、後の方、彼の杉の樹立を抜けて、土橋を渡れば裏田圃、其處に九曜軒の新店と置去りした壯俊とが未だ其のまゝにあるのであらう、其の道は深大寺三鷹村などに續いて、一面の稻田は、十八、九日頃の此の月でも、恰も眞晝のやうであらうと、要介は願みて思つた。

月は丁度、社の屋根を打蔽ふ、杉の梢にかゝつたのである。

唯見返る時、ぎいと片扉を閉して、神官の姿は消えた、狐格子が薄赤く見えて、急に背後の方に遠ざかつたやうに感ぜらるゝ。

四邊に人の影も見えない。

固より三人或は二人、擦違つたのもあり、遙に後影を見たのもあり、又行違つたのもあつたけれども、或は裏田圃の方へ、或は街道の方へ、ちり／＼に祭から歸る見物ばかり、足の留るのはなかつたので。

要介は唯一人兎も角も前に進んだ。

尼興行

十

春は然ぞ、行手の路の兩側には飛々に梅、櫻、柳の枝も組交ぜたが、月下に唯白き骨となんぬ。右は桑、左は前栽島、いづれも社領である。兩側に小屋がけの、觀世物したりと思はるゝのが三五軒、板圍の隙間を洩れる灯の光が弱いので、却つて射し入る月あかりに、姿は見えないが、陰に籠つて未だ寝ぬ人の打語らふ聲がした、恠る人のものいふ聲は、我々が耳馴れた鶯、山雀など

とは違ひ、譬へば怪しいものでなくても、梟の鳴く音の如く、異様に感ぜらるゝ習である。大方
明る日の祭禮をかけて爰に徹夜するのであらう。

それも寂し、路傍の樹の根の處々に藁を置いて、薄の木菟、小さな旗、裸のおかめ、操三番が
明るく見えて、風に踊つて、小さな影を月に投げた。

「希代だな。」

夜も慥くまで遅からうとは思はなかつた、田舎の所爲か、野の寂か、祭もこんなに早く淋しく
なる法はない、野分があつたとも思はぬのに、あれほどの人群集、足許に竹の皮一ツ落ちて居ず、
柿の核もない、綺麗に掃除をしたやうな、宛然無人の境と謂つても可い。

然まで遅れたとは見えない女の、肖た影もないのは何うしたらう。

要介は四邊を眇したが、一層引返さうかと足を停めた。

けれども弗と其の駒返といつたのに心付いたから一先、五宿を出て様子をと、考へた。

同一筋道を街道の方へ眞直に辿つて、扱て一町ばかり、宿に近づくと、右手の前裁ものの奥に、
思はざりき、月影の墨繪の中に、一枚彩色したやうに描き出されたものがあつた。

カンテラの灯が三ツばかり、一列に宙に點されて、正面に小屋が一個、遠見に五六人、人影が
ちらつて、中に何等のものか、花やかな女の姿が交つて見える、恰も縁臺を擧げて繩で柱に留

めて、戸を閉めた、葎蕒張の茶店の角から、田の中を通じて路が通つて居たので、要介は、小屋
の様子、觀世物であらうと見て取つたが、まさかこれを見物して居ようとは考へなかつたけれ
ども、人立がするから可懐しくなつて、急に踵を繞らした。

別に末社の稻荷でもあるらしい、中ほどから風情が變つて左右は一面蓮の池、洲のやうな突當
りに、夜を籠めて月に色硝子の如く隈をなすは、果せる哉、觀世物小屋。

唯見ると機械の目金でない、蟒蛇でない、角のある馬でない、蛇體因果の婦人でない、轆轤首
でない、安達ヶ原孤家の人形でない、猿芝居でない、手品でない、固より改良劍舞でない、看板
も鳴物もない、チャルメラも吹いては居ない、薄暗い陰氣な小屋の向う前は寂寞して、造方も手
輕なもので。

見附の軒に鼠色の幔幕を絞つて、背向に婦人が二人、丁度腰から上を戸外に見えるやうな詭に、
圓鬘のと島田のが並んで居る。

良島田のより脊の高い圓鬘は結立の艶かに、水が垂りさう、鼈甲の筭、些と幅廣の寸延、指物
のやうなのが、颯と吹く風、下火に蒼すんだカンテラの火に、月の光もさし添うて、てらくと
して輝いた。

婦人二人が、背を凭せた竹の埒には、襦であらう、夜目には定かならぬが縫模様の派手な衣の、紅絹裏を翻してはらりと脱ぎかけた、年上の方のは地が黒で、若き方は濃いお納戸。一人が身に纏うたのは縮緬か、水色の肌着一重、背向の其の耳許、襟筋の美しさ、霜に落葉の曇も非ず。

怒る大道の觀世物に、しどけない其の服装で、透通る膚を曝されながら、髪、容の品の好さ。人の姿はうしろつきとか、今一人の島田の風に目を注いだ時、要介は驚いて瞳を据ゑた。これは撫肩のすらりとして、紅の長襦袢は、芳紀十八の膚を蔽ひ果さず、脇あけを洩れて溢る、雪は、ちらめく灯に消えさうで、果敢げに哀である。

まさかに之を其の女とは思はぬけれども、世にも後姿の恁ばかりに肖たのはあるまい、特に薄暗い卜の店に、月か、花の、衣の薫、帯の色は芽えぬが、一むら薄に絡んで燃えたは、同襦袢の紅であつた。

「さ、御覽じまし、さ、御覽じまし、戀も無常も皆一ツぢや、世の中に類のない、美しい女の腹の中をお目にかけます。さ、御覽じまし、さ、早く見て迷を晴らさつしやれ、さ、御覽じて、悟ら

つしやれ。」

時に一種異様な 獣 嗅い臭がして、生ぬるい、濁つた、低い調子の、腹の底まで響く聲して、立合を呼ぶ者があつた。

要介は我にもあらず背に汗。一足退つて魂は奪はれたもののやうに見惚れて居る四五人の壯俊を小楯に見ると、一方口の木戸の處、汚れた鼠の戸帳を半ば巻いて、尻が口上を述べる。

年紀の頃六四五、脊の極めて低い、脚の短い、顔の平扁い口の大きな、目の細い、鼻の低い、下唇の反つて長い、舌なめずりをしたら小鼻をくるりと包みさうな、根ら顔、萎び切つては居るががんじようなのが焦茶の古びた被布を着て、恐しい抜衣紋、其所爲もあらう、頸長く、脊筋までも見えて、着物の様子身のまはり、臭はこの骸からと思はるゝのに、白茶の炫耀しい新しい大きな房を、其被布の胸と、棲の合目とに結び下げたのが、草履穿、手に一條の竹の鞭を取つて居る。此の尼顔を上げて人を見ず、誰にいふともない、恰も愚癡なるが如く、叱言の如く、思出した如く、詰らない如く、氣だるい如く、悟つた如く、咳く如く、嘲ける如く、

さ、御覽じ、さ、皆の衆御覽じ、

と言ひながら、馴れたと見えて、振向きもせず、俯向いたまゝ見當をつけると、件の竹の鞭の尖の處で、木戸に手近な圓鬚の婦人の、一重衣のはらくと、あはれに寒げに、戦く上から、些

い些い突く竹の尖は釣棹の震ふやう、夫につけても打揺ぐは、美しい筈である。

「さ、御覽じ、釋迦も阿彌陀も迷ふはこれぢや、國を亡ぼすのもこれぢや、可恐いはこれぢや、さ、御覽じ、外面如菩薩内心如夜叉、さ御覽じまし、」と又突く。

あはれにも一寸鞭が伸びて、次なる島田の身に觸れたら、要介は躍菟つて、尼の頭から一摺に拉いだであらう。

「外面如菩薩内心如夜叉、此の教廣大ぢや。あ、南無阿彌陀佛々々、」と尼は居睡るが如く、頷くが如く、いとど抜衣紋になつて、がツくりしていふ。

先刻から身に悪寒を感じて居た要介は、はツと背中に、熱を覺えて、弗と水淺葱も紅も血のな人形であることに漸々心付いたのである、夜嵐が颯と吹いた。

十二

要介は餘りに肖た髪かたちの、餘所ながら顔も見たし、顯はに小屋に入るのも晴がましいから、人目を避けるやうにして、觀世物の背後へ廻つた。

蓮池は月も宿るばかり、葉も破れ、莖もまばらである、汀に栽わつて、以前墓印でもあつたらしい一本の松の樹があつて、直ぐ其の枝に引つけて、圍の筵の風に煽るのを繩で結へた處に、

中を覗かれるほどの隙間があつたから、足場を極めて中腰になつた。

構内尋常、敢て何等の奇もない、穿物のまゝ、客を立てて見せる拵舞臺の前には竹の埒、床の左右は古障子で圍つてあるが、藝當をするのでは無いらしい、仕懸もなければ人も居ない、尼が一人持の興行と思はれたが、驚くべきは唯一目見たかつた其の人形の面である。

要介は此度櫻木村の知人の許に遊んだのも、漫に社の裏田圃に卜の店を出したのも、娘が來たのも、A-Aも、杉の下道を辿つたのも、祭が早く淋しくなつたのも、月夜の道が綺麗だつたのも、

風に木菟の躍つたのも、悉く皆何者か心あつて、斯の觀世物の顔を見せる爲に、豫め自分の目を馴らして置いたので、恐らくこれ前世の約束であらうと、あきらめて熟讀めた。

譬ひ人形とは謂へ、世に又恁ばかりの俤があるの歟。

言語道斷、島田に結つた女の顔は宛然犬の首を、べろり皮を剥いて緋の長襦袢に繼ぎ合せたものに外ならぬ、黄色を帯びた赤は口をぱくりと開けて、どろりとした白眼、鼻づら、上下の唇、

小鼻からかけて頤の窪、目ぶちだけは黒く毛を染めた、兩の頬は赭らんで、額際ばかり美しく、前髪をはらりと左右に分けて、咽喉のあたりから眞白に塗つたのを、紫の半襟で合せてある、前に並べたのは、兀ちよろの塗盆に、一本の銚子、杯が二ツ三ツ。

此れとしどけない長襦袢の膝を並べたのは、茶褐色の、嘴尖つて長く、鼻筋の處に太い眞鍮

の環を填め、胡麻鹽の眉迫り、額がしやくんで、生際ともいはず前髪、髻の處まで、鬢とともに
抜け上り、耳の赤いのが突立つて、金環で縛つた唇は堅く結んだが、耳のあたりまで裂けて、左
右の口許に肉を貫いた鬼齒が二本。白さもあまりに蒼ずんで、薄汚れた膚あらはに、乳のあたり
ふつくりと、前下りに葡萄色のめりんすの扱帯をつかねて、兩端を垂れて膝を割つて床の兩方に
捌いた、こゝに手附の眞盆、朱羅宇の長煙管を横へてある。
傍に手をついて茶碗を茶臺に、見物に差出して跪いた、女の童、戸外からは見えなかつた、榮
螺の殻を俯向けにしたやうな、又鯛の臍の偉大なるが一ツとぐるを巻いた顔の、芥子禿である。
舞臺二間、二坪ばかり筵圍の場内に、灯は行燈一ツであるが、看板に點けた戸外のかんてらの
灯は人形の頬を掠めて判然とさせる上に、ものの色の黒く其沈んだ中を、手足の白いのがちらち
らと、灯影に映つて、戸外から見た目より却つて生きて居るもののやう、星も洩るべき此の伏家
も、月影は避けてか射さず、絶えず面を打つ悪臭は宛然鼯の巢のやうであつた。

十三

「なむあみだぶ、なむあみだぶ、」
此處へ尼が先に立つて、あとからのそくと三四人、戸外に立つて居た村の壯俊、後姿を見て、

はずんだのであらう。

尼は見物の中に立交つて、例のいふべからざる異様な音調、
「さ御覽じ、外面如菩薩、内心如夜叉、」と鞭を揚げ圓鬚の婦の嘴の長い、鼻の尖を指しながら、
「一皮剥くとの、腹の中は此の通り、外面如菩薩内心如夜叉ぢや、さ、御覽じ、」と又鞭の尖をび
よいびよいと閃かしたが、誰が目にも同一思か、見物三人、一言も言ふものなし。

「さ、能く目を留めて御覽じ、人形や造物と思はつしやるな、活きて居るぞの。外面如菩薩、内
心如夜叉、さあ、目を留めて御覽じ、」と尼は被布を着た其の脊の低い身を返して草履べたく、
人を除けて古障子の處から青竹の埒の中に入つて、流眊に見物の方を顧みて、例の獨言のやうに、
「これだけでは愚癡無智の凡夫には解るまいぞ、さ、御覽じ、」

床の上に鞭をさし置き、汗點のある皺腕を差伸べ、兩手を年増の人形の葡萄色の扱帯の上、割
さばいて肝でも取るやう、胸の處を寛げると、一層蒼白い、黒ずんだ兩の乳房、ふつくりと水々
しいのも不氣味である。
「一皮剥くと此の通り。」

尼は行燈を引寄せて蓋を上へ、ふらくくと動いて射す煤ぼつた火影を人形の腹に差向けたが、
低い鼻を嘗めさうな件の下唇を、だらりと垂れて、にやりと笑み、

「皮が些と汚れをつたわ、もつと美しいのぢやで又来て見さい、今夜あたり行水をつかはせましよ、」
と呟き、呟き、前に控へた手附の眞盆にさした、朱羅宇の長煙管を取つて、芥子禿が突出した茶碗の中から、莖を捻つて、持直して、やがて、年増の鼻づらをぐい、馬の轡を取る如く、横ざまに引摺み、だるさうに腰を伸して、伸上りながら、煙管を人形の口に突込み、いかにも此の用にあてためであつた、眞鍮の環をがツちり扱いて、吸口を銜へさせると、行燈の灯を雁首の處にあてた。

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、さ、御覽じ、外面如菩薩内心如夜叉、一皮剥くと此の通り、さ、御覽じ。美しい婦人は可憐いぞよ、生命を取るぞよ、顔を見て迷ふでない、婦人は私がやうに醜うても、心の内が肝心でござるわいの。喃、私が皆の衆へ教のために見せますぢや、さ、御覽じ、教、戒ぢやわいの。」

噫、何事ぞ、恚る教に従ひ、戒を守りて、天下泰平、家内安全、壽命長久ならんより、如かず其の毒鳩の如きも、花の顔に我死なんと、要介は心密かに誓ふのであつた。

「目を留めて御覽じ、さ、よく御覽じ、一皮剥いた腹の中は此の通り、」
外面如菩薩内心如夜叉と高く宣ると見れば、両手の指で青白い鳩尾の處をぐいぐいと押すと、お化の姉さん機械と見えて、ぎやツぎやツと鳴く、安達ヶ原の闇を飛ぶ五位鷲の叫ぶが如く、吸口を銜へた處に、白い齒が顯れて、仕掛で火を吸付けると又ギヤツと鳴いた、煙を兩方へ吹出すのを、

「外面如菩薩内心如夜叉、外面如菩薩内心如夜叉、やれ可恐しや、」とせり上げて早口に疊みかける。

途端に今まで細く閉ぢて薄笑つたやうだつた年増の顔が、赫と金色の目を光らすと、矢張仕かけで耳が動いた。
「あれえ！」

露草

十四

「甚麼に私は驚いたでせう、直ぐ背後で、あれえ、といふ婦人の聲がしたんです。何うして目の前ぢやお化の姉さんが、かう、もう莖をばく／＼遣つて耳まで裂けた牙の處から兩方へ煙を吹いた處ぢやありませんか、それでなくツてさへ胸がどき／＼して居る處、なんですもの、吃驚し

て飛退ると何うです、まあ。

聲を上げた婦人といふのが、其ために彼處等を迂路ついた女でさ、一寸見たつて見違へッこは
ありません、お園さんとか謂ひましたね、そら此の姉さんです、と顧みる、廻縁の障子の内に、
島田の崩れたのをがツくり美しい木枕して、夜ものを深く、横に寝た頬のあたりまで引掛けた、
以前の女。

要介はこゝに火桶を隔てて品の高い御新造風の美人と語る、同一夜の十一時頃のことである。
今、女を見て掌で指したのを、要介は膝に置いて、

「聲をかけようとしたんですが、何しろ那樣場合でせう、急にものが言はれない、其の内にお園
さんは、あれ、といつて顔へ袖を當てたつ切、突飛ばされたやうに松の樹の處から小屋を廻つて
駈出します。血相を變へてといふ風ですからね、私は又驚いた。

はじめからの様子で見ると、何うも凶易の出た女の、生命でも取らうために、變な尼が不思議な
観世物の、其の何でさ。

襦袢の色だの、カンテラの明たの、眞赤な口だの、金の目だの、彩色のある網を張つて、獲物を
蓮池の岸で待構へて居て、島田に結つたお園さんが彼の服装で引きつけられて、手もなく引掛
つたやうな心持がしました。慥麼ことをいつちやあ悪いかも知れませんが、僕が既に人形とお園

さんと後姿を見違へて、大變な顔を見せられたんですものね。

聞く人は面を正して頷くので。

「更めて易の表を考へて居る追もないんです。通り魔にでも憑かれたらしい、やあ、駈出して何
處へ行く、あの娘、田圃で死神に誘はれないまでも野良犬に吠えられよう、可哀さうだと、何を
狼狽へたか、直ぐ其の松の枝を一本へし折つて、提げて、それから駈出したんです、大方取巻く
敵でもあつたら、其で叩き捲る意氣組だつたものと見えますね。

宮から來た處、觀世物小屋から出た處と恚う丁字形になつてます、角の葎簧張の茶店の前に突
立つて、透かすと、五宿の方へ駈けて行くのが見えるでせう。

遠くから呼留めでもすりや可うございましたけれど、人騒がせな、向ぢやあ顔を見た處で、縦
令ば識つて居たつて大道卜者と思ひますまい、どんなに變だか知れないと、遠慮をするから
聲も懸けられないし。

黙つて追かけて本街道へ出ますと、軒行燈かなんか點いて、遊女町のある些とは賑かな方へで
も行くことか、府中の方へ向いて寂しい通を半町ばかり、もう追着きさうになつて見失ひました。
此邊だと思ふ處は兩方藪がある中の眞暗な岐道でせう。
折よく頼冠をした素見の歸りらしいのが來懸りましたから、此處から駒返しの方へと聞きます

とね、はあ、と返事をするのを、よくは聞かないで、先刻も社の裏田圃から杉林の暗いのを抜けて出て、酷いものを見せられたが、又恁麼敷を潜つて、變なものでも見やしないかと、全くは二の足でありましたけれども、思ひ切つて飛込むと、何一呼吸でもう田圃へ出ました、良い月です、直き目の前をお園さんが、今度は茫然と歩行いて居ませう。」

十五

「四邊に人はなし、先づ引留めて置いて、それから事、恥も外聞も構ふにやあ當らない、怒つたら詫びようと、無法極まる。」

近づくと登音に心付いたか、振返つて見るや見ないに、又あれツてばたたく駈出しますから、馬鹿な！ 貴方。

餘計なお世話かも知れないが、恁麼に心配をして遣るものを、何も追剥抜ひにすることはないと、大上段の氣味になつて飛縱ると、石碓でも突かけたか、お園さんはバツタリ横倒れになりました。

既の事に捕へようとして差出した手が、宙を向うへ泳いだ、下を潜つて、すつくり立つと、最う跣足、體を亂暴にするもんだから、彼の美しい帯を泥濘へ引摺つて、蛻々する田圃道を彼方へ

よろけ、此方へよろけ、氣が上するか、頭ばかり先へ、前へ滑つて横飛といふもんです。

手が着けられませんか、追懸ける元氣も無くなつて塗下駄を引くり返して脱いであるのを見て、まあ緋の天鵝絨の鼻緒もこんなにしてさ、泥だらけだ、可哀さうによくく因縁の悪い女だ

な、と斷念めて、僕は歸らうと思ひましたが、弗と目が着くと其處等も田圃道、兩方に薄が茂つて、根の處にきら／＼するものがあるんです、

簪のやうだから、傍へ行つて見ると矢張、」
要介は衣兜を探つて、平たく包んだものを取出して、火桶の傍に差置いて、解くと平打の銀の

簪、皺にもならない鼻紙の上に、菊の花を透彫にしたのが青い。
「櫛なんざ何時の昔振飛ばしたか知れやしない、泥もつかないで此の小菊も落ツこちてませう、

未だ露しつとりともしないから娘のに違ひない、恁麼に夢中になつてるやうぢやあ、自分勝手と謂はれても爲方がない、好事の當推量ばかりぢやあない、眞物の身投げだ、さあ、打棄つちやあ

置けないから、」
要介は一息吐いて、

「又それから姿がなくなつた跡を、凡そ見當をつけて、ぐる／＼田圃道を、まるで以て稻田の上を漾つて歩行く形です。」

薄原を潛つたり、急に路が細くなつたり、然うかと思ふと處々、昨夜の雨でせう、廣い水溜が濁つて薄ぼんやり、一面に湖のやうに見えたり、やがて、桑の樹の枝の影が、びしよ濡の洋袴にうつたり、靴の尖にきら／＼したり、急に晴れたり、曇つたり、小山のやうな森が見えるかと思ふと河の音が聞えます、六十餘州遍歴したやうで、廣場一面の田で、瓜の影一ツ目を遮らない處に出た時には氣が遠くなるやうでした。ほんの半時ばかり前のことなんですが、怪うやつて貴女とお話をするのは三年ばかりたつたやうですよ。

ばたり／＼と、水車の音が心細い、遠くの方で聞えるかと思ふと、然うでもない砧を打つやうな音がする。熟と耳を澄して居ると、まあ、糸を繰るやうな氣勢もするぢやありませんか。餘り澄切つたと思つた月にも案の定薄雲はかゝつて來ますし。

稻田の色も灰になつて、沈んで消えて行きさうで。

大袈裟にいへば娑婆だか何だか解りますまい、手をつくばかりにして、頬邊を慍う地に押付けて、濡れた路を透して見ると、外に下駄のあととも何もないのに、一ツ二ツ土の色が曇つたやうになつて、尋常な跣足の足の跡がついて居ませう。

小菊と一所に持つて來た此の簪が何うぞ記念にならないやうと、衣兜へ突込んで最う一呼吸、直ぐにお宅の前の彼の小流の處へ出たんですが。

其處には杜若の返花かと怪まる、露草が、はら／＼と咲いて居た、要介はこゝに其の女を見出したのである。

十六

お園は鼻筋の通つた受口の顔を仰向けに、二の腕の露霜寒く、兩手を組んで、伏拜むが如くにした其手で汀の露草に縫つて、袂を水に洗はれた、水の色は白きこと玉川の玉の曇れる如く、幅五尺ばかりの流に半身。

横に倒れてすり落ちた扱帯の上に、淺き瀬はさら／＼とかゝつて、月は青く、黒髪は頬に纏れ纏れて、帯の端と共に流の隨意。

さてはと思ふ違も無く、要介は飛附いて片膝折敷き、露草の花と共に女の手を確乎と取つたが、(こんな水で死なれるものか)

心の内の嬉しさを、思はず罵るが如く呟きながら、

(誰だ、誰だ!?)と一喝した、要介は弗と向う岸に、朦朧と影の如くゝいで、身には海松布のやうなぼろを纏ひ、顔の色も、手足の色も、宛然月に泥龜の怪したるばかり薄暗い男の居て、散る花を袖に受けんとせせず、野田で尿する状態で腕組して、暢氣に突立つて居るのを見て、耐へかね

て叫んだのであつた。

(誰だ！)

其奴答へず、却てすらり音が響いて、間近な、松林の松の中に、ぱつと一道の灯影がさしたが、一軒家の雨戸を、内から開けたのであつた、こゝの氣勢を怪しむ如く。

要介は便を得て聲高く、

(手傳つて下さい、手傳つて下さい、人を、人を助けるんです)と明瞭に、然し慌しく口早に二度言つた。

同時に其の雨戸の處へ雪洞が一個、高く翳したのが顯れて、薄の穂が薄黄色に映つたと見ると、雪洞はやがて松の樹と、松の樹の間を、鼓の緒を責めるやうに、はらりと潜りく、暫くして足早に衝と林を出たが、其の人些とも猶豫はず、疾く傍に来て小川にかけた石橋の下に、庭下駄の音を礎と留めた。

唇の色は未だ變らなかつたが、要介に身を任せ、足の爪尖も地につかず、がっくり男の腕に頭をつけた、女の蒼ざめた顔を見ると、橋の上で出合頭、

(お園)といつて驚く様子、助ける人の近づくまゝ、此方も石橋を越して進んだ、要介は始めて、女の名を聞いたのである。

(お園さん?)

(貴方まあ、まあ、お前は)と屹といつて、要介の抱いて居る上から娘の肩に手をかけたが、燦然とする指環の光、留木の薰ぼつとして、媚かしい身を入違ひに、ひつたり寄つて、男の胸と、我胸に、濡れ情れたお園を挟んで雪洞を差寄せたが、蠟の火尖に要介は耳朶のほてるばかり、鬢水の香の、馥郁と、艶かに根上に結つた圓鬚のおくれ毛が頬に溢れて、白勝の清らかな浴衣を襲ねた襟細く、お納戸のよろけ縞のなえた袷、婀娜過ぎるばかりの寢衣姿、だけれども、口許に威あつて、鼻隆く、目にいふべからざる品があつて、すらりとして脊も高い、其の氣高き、美しさ。要介は恚る中にも、月が多摩川の水に映る夜は、恚る姿が世に顯るゝものかと思つた。

娘は雪洞を差寄せられると、うなされた夢から覺めたやうに、恍惚と目を開いて、

(あれ、御新造様)と幽にいふと、急に顛へ出したが、聲をのんでワツと泣いた。
略推したるに違ふことなく、娘の口から聞いた、御新造が其の婦人で、こゝに相對して語る處は、即ち駒返の庵室である。

隴富士

十七

「別に大して水を飲みましたのぢやあないのですから、落着さへしますれば、忘れたやうになりませう、可い鹽梅に寝ましたやうでございます、」

と御新造は先刻からお園の枕頭に附いて、要介の言ふ處を聞きながら、時々向うへ伸上るやうにして、娘の寝顔を覗いて居たが、膝を浮かせて立ちしな、藥を飲ませた自分の湯呑に水の未だ残つたのを、取つて、一寸立膝になり、最う一度顔を覗いて、靜に立つたが、要介が坐した背後の障子を一枚左へ開けると、廻縁、雨戸もすつかり開けてある、沓脱を挟んで、一面の薄、廂に届きさうな穂もあるのに、丁度一時晴れて月の影。

葉の上へざつと湯呑をあけながら、

「晝間ですと見晴しが可うございますよ、一寸御覽なさいまし、」

親しくいふので、要介は身を斜に、座のまゝ、後手に身を反して、御新造の立つてる袂の下から、指す松原の梢を見上げて、

「はあ、成るほど。」

「彼處へ富士の山が朧に見えます、夜分でも何うかすると判然拜まれますわ、明方お日の出の時などは、それは最う勿體ないほど可うございますよ。あれ、多摩川の上は雨の降つてますやうな霧ねえ、縁側は未だびつしよりです、」

脱がせて置いた娘の濡衣は、縁の上にしよんぼりと薄の影を宿して居る。

「あした此の松原で乾かしましたら、宛で羽衣のやうでございませう、もう天人のやうな女を既のこと臺なしにする處、お蔭様で助かりました。」

本當に罪の無いものを何だつて苛めるんでせう、

と蓮葉に獨言のやうにいつたが、一足二足縁側へ出た。

「貴方、今お話し其の觀世物を御覽なすつたといふお社のある處は彼處に當ります、」と南の方を、廂の下で屈むやうにして透したが、見る／＼すつくりと立つて、柔かに垂れて居た拳を握つた。沈んだ力のある聲で、

「貴方私の恚うやつた後姿は、あの、」といひかけて、湯呑を持ったなり、兩袖を合せて胸を圍ふ、肩も背も細りとなる。

「もし、何かに似て居やしませんか。」

「……………」

「いやなものに似て居やしませんか。」

聲の下に、呼吸が絶えて、凍てついて、血のない練ものになるだらうと思つた、其の衣の色、其の姿、襟脚細く、尤これ雪の如く、濃い黒髪の鬘の艶、身の半は部屋の灯に、半ば朦朧とある月影に、一目見るより、要介は天窓から氷を浴び、骨まで染みて悚然とした。

「をかしたものに見えませう、」といつて、

「はッ」と歎息したが、月に對し、富士に面し、憚る如く、恥づる如く、袖もて顔を蔽うて居たが、少時すると、

「お、少し寒いやうです、」とそつと障子を閉めて座にかへると、此方を向く時、要介は思はず二ツの目を閉ぢて、はら／＼前を過るにつれ、冷い風が通るとばかり、火桶の向うへしとやかに坐つたので、殺される覺悟で眼を開くと、天下の僥倖、敢て鼻頭に眞鍮の金環を填めて、牙から毒煙の吹く底の妖魔でない、花の顔香を籠め、近優りして却つて蕩けたものであつた。

我に返ると先刻から取紛れて忘れて居た、障子の際に雪洞は未だ點いたまゝであつたので、

「やあ、」とけたましく、要介は然もないことを仰山に吹消したのである。

御新造は坐りながら裳を引寄せ、

「まあ、更めて御挨拶をいたしますにも、こんな失禮な服装で御免下さいませよ、」といひかけて要介の顔を打まもり、得も謂はれず微笑んで、

「何も御心配はございません、いろ／＼なわけがあるんですよ。貴方飛だお引懸りでございませ、まあ何うぞ、お平に、」

と湯呑を下に、手を伸して、炭取を。其時、又お園を差覗いて、

「まあ、可い鹽梅にすやく／＼してさ。」

十八

「ほんとに冷／＼ございませぬ。」

御新姐は身に染むやうに胸を壓へ、又下襟を引合せ、

「恠うやつて介抱をしますには丁度可うございませぬが、私も最う寝ようと思つて床を取りましたものですから、否、何ですよ。」

（誰だ、）ツておつしやつた貴方のお聲を聞きます先から、何だか幽に呻くやうな聲がすると思ひまして、そんなに恐いとは思ひませぬ、こんなに母屋から離れて氣儘をいたして居る位でございませぬ、直ぐに出て見ようと存じましたけれども、寢衣ですし、帯をしめたり何かして其で遅くな

りました。

(手傳つておくれ、人を助ける)ッて有仰つたから、吃驚して出ましたの。

而してあの何でございますか、お園さんをお助けなさいます時に、傍に何ぞ居ましたのでござ
いますか、貴方、誰だ、誰だ、と二聲ばかりおつしやつた。

要介は聞きもあへず、

「え、然やう、」と四邊を見たが、急に心付き、

「然う、居ました。其が何でさ、勿論川中に倒れて居るお園さんより先に見付けたのです。

さつきもお話申します通、方角も分らず、滅茶歩行の折は私も大汗でありましてな、まあ、御免
下さい。」

要介は良心落着き、洋服の胡坐になり、釦二ツばかり外して、其とも謂はず話の次手に、今の
冷汗をぐいと拭く。

「おや、びツしよりなのをお抱きなすつて、貴方召物がお氣味が悪うございませう……殿方の召
すものはないのですが。」と艶麗に莞爾して、座を斜に立たうとする。

「大丈夫、何構やしません、千軍萬馬往來の代物でさ、坂東鍛冶の鐵位、撥飛す一張羅で、貴女
の方さへ差支へませんけりや、先生得意の鎧です。」と御新造の情らしい、涼しい品のある目の、

三ツにならないのを認めて、一彩先生色を直した。

「で、其奴が立つてますから、實は道の様子でも聞かうと思つて、水ん處へ行くとお園さんがあ
あでせう、私は驚きましたぜ。

獸め、ぬうと立つてお園さんの呻くのをぬうと見下して、ぬうと、恚う、何處までもぬうとし
てら、別に其奴が突倒したと考へられる様子もなかつたのですけれども、見殺しにして居やあが
ると、癩に障つたから、誰だツと喚きましたかね。

貴女が来て下すつたので嬉しくつて僕は夢中になつて、薩張其から氣が付きませんでした、
何處かへ去つちまつたものと見えますな、馬鹿な奴だ。いや、何うぞ最う夜分です。」

「まるで御覽の通、尼寺見たやうですから、何うすることも出来ません、前の彼の流は玉川ので
ございますから、澄んで居りますと、直ぐ私が此の鐵瓶に故ツと波んで来て、飯事のやうなこと
でもして、おもてなしぶりをしますけれども、雨で濁つて居りますから不可ません。番茶です、」

「最う何うぞ、」

此時御新造に顔を見られたので、

「本當に何だらう、彼奴何處へ行つたか知ら、」と茶碗を膝に目を反した。

御新造は湯呑から自分も一口、落着いたものいひで、

「何處へ参りますもんですか、矢張觀世物小屋へ歸つて行つたんでございますわ、」と投げて謂ふ。
ギョツとして、要介、無言、

「屹度然うだらうと思ひます、然うやつてまつはるんですもの。誰が今時恁麼處へ來て、可哀さうに水を飲まうといふ者を見殺しにして居りますもんですか、屹度觀世物小屋へ歸つたんです。」
「へ、觀世物小屋、」と思はず言つたが。

十九

「だつて觀世物をやつて居るのは婦人です、蜘蛛の雌のやうな比丘尼です、先刻立つて居たのは男です。」

「何んな風の、貴方、幾歳くらゐ、」
要介は小首を傾け、

「え、年紀も何も茫乎して能くは解りませんな、宛然以て唯もうぬうとした奴です。」

御新造は打領き、

「其は彼の觀世物の尼の眷屬です、眷屬だか何だか解りませんが、屹度其ですよ、何でも一人手傳つて床の下で人形を動かすものが居るんだつて謂ひますから、」

これを聞いた要介は先刻人形の後姿を推して、其の面を見て驚いたよりも、寧ろ案外な思ひをした。

「貴女、あの觀世物を御存じですか！」

「知つて居りますとも、」

と力を籠めて判然言つた、御新造は瞳をかへしてお園の寢姿を見ながら、

「先刻トを遊ばした時、此のお園さんを御覽なすつて綺麗な女だと思ひなすつたでせう、」

と仔細ありげ、要介何の氣も付かず、

「美人ですな。」

「容子が可うございましたでせう、」

「容子……可うございますな。」

「可愛らしいと思ひなさいましたでせう、」

「え、何、」と爰に於て項をおさへ、默言となる。

「其はね、何も伺ひますにも及びません、何とか思つてお遣なさいませんでは那麼御深切が出來はしません、ねえ、」と打微笑む。

「何、別に、」と、遺瀨がない。

「觀世物のことを申ますお話の順ですから、丁とおつしやいましな、何も女房にしようとお思ひなさいました譯ではないし、いゝではございせんか。ねえ、」
「ぢやあ何、綺麗で、容子が可くって、可愛らしい、然うぢやありませんか、」と漸々顔を上げたのである。

「本當？」

「何も那樣に、」

「まあおつしやいよ、」

「御免なさい、」といつて笑ひ出した。

一膝寄つて居た御新造は、身を退いて改まり、

「ぢやあ其の觀世物の婦人の後姿は、貴方が御覽なすつた目に、お園さんにそっくりだつたでせう、確かに然うおつしやいました。」

「全くなんです。」

「それからさつき石橋で、あの、はじめてお目に懸りました時、私を御覽なすつて、何とかお思ひなさいはしませんか、」と眞顔で聞く。

要介は古今の辟易。

「別に怪しいとも何ともおつしやりはしませんか、美しい女だとお思ひでせう、」と自若として言ふ。
要介は啞然として言はんと欲する處を知らず。

御新造は口輕に、

「貴方お氣に入りましたか。」

最早申戲處で無い、天下凡そ男に對して怒る警句を吐くものありや、餘のことに屹となつた。
要介は心から、玉火屋の臺洋燈も薄暗く、四隅から月の影もさし入るばかり、小夜嵐が颯と來たら、戸障子も壁も柱も女の姿も薄の中に骨ばかりのものとなつて、消え、咄嗟に自分の夢が覺めるのであらうと觀念して、今は恐れず、物凄くまで美しい婦人の顔を屹と見て、しや！妖怪と思ひ切つて言つた。

「惚れたんです、恐縮。」

「然う、」と言つて寂しげに笑つて、端然とすると、仇口の婀娜な嬌態は何處へやら、たゞこれ神の如き一個犯すべからざる品位を備へ、

「不可ません、外面如菩薩内心如夜叉ですから、私の後姿もいやなものに似て居ませう、」と再び言つた。

要介は斷念めながら悚然とする、縁側に人の歩行く氣勢のしたは、風が薄を渡るのである。

爾時取上げて飲まうとして居た長煙管をばつたり、御新造が取落すと、膝のなやかな衣を這つて、ばつたりと疊の上。

愁然として差俯向いて、

「煙草は止ませう、又、甚麽ものに見えてお心持を悪くなさると不可ません、」といったが、耐りかねたらしく、はら／＼と落涙した。

此の風情は怪しきよりも、凄きよりも、美しきよりも、最も人を動かすに足るものであつた。

「萩原要介、私は學生です、祕密なことでありますなら決して他言はしますまい、一體まあ何した事です、私は、實の處、今日が幾日、何年何月で、何處に居るんだか解りません。お差支がないなら話しませんか、事によつたらお力になりませう、といつた處で貴女は氣象も何も私より豪いんです、然し貴女は御婦人です、又貴女の身に協はない事で、私に分別のつくことがあるかも知れません、よ、おつしやい、眞心でいふんです。」

「はい、」

と前髪を垂れて居た、顔を上げて、

「私は心願がありました、貴方のやうな方のお力を待つて居りました。お身體に些とも御迷惑はかけません、何うぞお聞きなすつて下さいまし、」

要介は膝を進めて、

「承はりませう、何最う少々なら、生命をくれつたつて驚きません、度胸は据つてます、何だか譯は解りませんが、いづれあの觀世物小屋との關係でせう。」

先刻も思切つて言ひました通、私は貴女に迷ひました。」

「まあ、」

「い、え、然し私は迷はされたと言ひます、ト慙う極めて置くでさ、而して遠慮なく聞かして下さい、一體まあ何云ふことです、」

「貴方、貴方のお心は存じて居ります、私を何とか思つて下さいましたのですから、それで、私の後姿が、をかしな者に肖て居るとお思ひなすつたのですから。」

それにつきまして、あの觀世物の婦人は、殿方が御覽になると、屹度其の思つた人の姿に肖ますのですよ、實は私の良人は彼の觀世物に殺されたのでございませう、」

「何、觀世物に殺された、要介誓つたれば敢て驚かず、心を鎮めて聞く。」

「良人と申しまして一晩夫婦で語らつたこともないのでございませう、私は、あゝやつて、」

と寂しい横顔、振向いて指す次の四疊半には、押入の襖を半ば開いて、佛壇があつた。
「佛になりました後で、此のお園さんと、言交した中の、多吉といつて本家の番頭があります、其の母親。」

其も此の世には居りませんが、亡くなりました良人の乳母でございましてね、其の乳母の頼みで、私はお位牌に縁付きました。

本家は、貴方御存じはございますまい、京橋の柏屋といふ絲屋です、
要介は聞いて、始めて、此の婦人の様子と、寝衣にかゝる綺羅を纏うて、敢て憚らぬことを解した、柏屋は古來大名の如き豪商である。

「本家は兩親で捌いて居ります、はあ、私の舅姑たち。」

つい松原の向うに此の母屋があるのですが、僕衆と、女中ばかり、實は私の我儘で、其處へ隠居所を建てたのでございしますが、人が居ると、何の彼のと煩くつて不可ません。私のことを可哀さうだの何のツてね。そりや對手のない處へ嫁つたんですもの、可哀さうは知れて居ます。ですが、其は私が思切つて参りましたのですから、頼まない世話なんぞやかないで、自分たちの世話を焼かせないやうにすれば可いんですけれども、此のお園さんを、譯がありまして、本家から預つて私が氣が合つて可愛がるのを妬んで、何うでせう、一所にお祭に行つてはぐれたものを、打

棄つて、此方へも知らさない人達ですもの。それですから、恚うやつて、又ほんの掘立小屋のやうなものを拵へて、丁度女の蝸牛ですことね、」

通り魔

二十一

「此處は貴方御存じかも知れませんが、駒返しといふ處ですが、何ういふ譯ですか此の邊何でも四五町の間ですとさ、馬が竦んで歩行ませんから馬士があとへ引返すんだつて、其で然う云ひますさうで、別に人には何といふこともありませんけれど、誰も餘り参りません。」

好い景色の處でございしますのに、あの川の石橋も、私が此處へ移りましてから、架けさせました。貴方、丸木も渡してないのですもの。

はじめは良人が此多摩川へ鮎漁に來ましたのでございします。舅姑達と、亡くなりました乳母、良人の乳兄弟の多吉と、其れしか知つたものはありません、五代も八代も續きます柏屋の恥でございしますから、内證にしてありますが、今ツから丁度、と手を擴げ、少し仰向いて、うつとりして、恰も待戀の鐘の音、指を折つて一イニウ三イ四。

「五年前です、良人が居りますと今年三十になるのですから、二十五の年紀なんです、固い人で、婦人の連はなかつたさうですが、棟梁だの、仕事師だの、附添つて大勢、船を五艘、船頭衆にも絲巻の中形の揃の浴衣か何か景氣をつけて大層鮎が取れましたつて。」

然うすると、晩方のことださうですが、良人が、あゝ小金井は彼方かい、——と多摩川から此の方角に當ります。——「怨う眺めますとね。」

丁度此の松原の處に返咲でせう、桃がちらほら、これは珍しい船を着けておくれ、見て來ようと怨言ひました。

確かに怨ういつたことは同一船に居た棟梁も聞いて覚えて居りますさうですが、一人で此處へ來まして、二人連の婦人の通魔を見たことは、誰も知つたものはないのです。

此頃でさへ未だなく、返咲は小春でございませぬに、鮎漁に出ましたのは盆の十六日、日も悪うございませぬのね、内の人達の、宿下りも兼ねたんですつて。

其時分のことですもの、返り花がある譯はないぢやありませんか。誰が目にも見えません、若旦那赤い雲でせうツていひましたのを、何確だ、ツて態々船を着けさして、堤防から上つて、一人で、此の松林へ參りましたの。

然うしますと、何うでせう、松林の中に唯一本桃が充満に咲いて綺麗なこと、下に毛氈を敷い

て婦人が二人ね。

貴下、蒔繪の重箱を開けて、吸筒で酒事をいたして、猪口を受けて居りましたのが、

「……………」

「私。」

「……………」

「酌をして居たのが、お園さん。」

要介はズバと火桶の縁に両手をかけた。

「と、まあ、いゝ因縁事になつたのでございませぬが。私は何も其の時分駒返しなどいふ處を、つい聞いたこともなかつたのですよ。」と言懸けて有繋に歎息をするのであつた。

二十二

「何でも其の猪口を持つたのが、些と年上で、若いのが、之は島田で、吸筒から注いで居ましたつて。而して年上のが良人の參つた聲を聞つけましたが、振向いた拍子に、見ると、まあ其の美しいこと。其に何とも謂はれませぬ、品が好く高等で、傍へ行くのは勿體ないやうで、氣臆がして引返しました位。時ならぬに桃が咲いて居て、森として、明くツて、それは羽箒で掃き清め

たやうな松原、人ツ子の影もなかつたさうですが、遠く退いた處には、馬車……といふと當世過ぎます、先づまあお駕籠でも立つて居ようといふ古風な婦人だつたさうです。

其を見染めたといふのを、唯今お話いたしました此のお園さんには姑に當ります、乳母に密と明かしました、それまでは良人がぶらぶら病、何でも多摩川から歸つて様子が違つたといふ當をつけて、漸う言はせたんださうでございます、話にもよくありますが、戀病ねえ、尤も良人は極内氣な、而して纖弱い人でございましたさうで。

其ですから其の年紀になりましたものを、乳母が叱るやうにして尋ねましたのですつて。

死んでも言はないと極を悪がるのを、漸との思で聞出しました、可うございませうか、さあ、何處の誰とも解りません、其はともかくも困つたのは、良人が思ひつめたのは其の年紀上の方で、其が圓鬚で居たと謂ふのでせう。

高位のお方であらうとも、缺換のない柏屋の一人子のことですから、家は何うならうともとはすみました處で、半元服の人を何うしませう。

自分も因果と可懐い人が主のある花のことですから、一ツは其で煩ひもしたのでせうけれども、寄つて集つて、意見はしますし、乳母は神様佛様を信心する、當人もいくらかまあ日が経つと斷念もついたと見えて、其年の秋、冬、明くる年の春、暖になる頃から少しづつ、氣分がよくなつて、

五月、一度床上をしたのださうです。

でも未だ戸外へ出ないで、元氣なく引籠つてばかり居りましたが、丁度又盆の十五日、日は違ひますけれども宿下で店は明いて居りますし、久しぶりで帳場格子の中へ坐つて、珍しく戸外の人通を眺めて居りますと、蝙蝠が見え始めました暮合に。

綺麗に撒水のしてある戸外を弗ツと見ると又二人連で通りました。

お、と立つ、

若旦那様と、此時あの、珍しく良人が店へ出ましたのを、喜んで乳母が中の口に立つて居たの。乳母御覽と、店頭へ、今のが然うでございますか、ツて、一所に駈け出して、通り過ぎた方を見ましたけれども、最う八官町の角を曲つて見えなかつたと申します。

爾時一人が圓鬚、一人が島田で、衣服も返咲の時と同一色だつたといひますが、乳母もなるほどと思ひましたさうです、一目見て忘れられぬ、其顔を覚えて居て、又其翌る年の盆、谷中の天王寺で、私は先祖のお墓、乳母は一周忌の良人の墓と、慙う落合ました時に、私を見て、それから貴方、

御新造は此時。

「何うぞまあ、お聞き下さいまし、焦れ死をなすつた若旦那の嫁になつてくれろツて、乳母が狂

思つて居たのに、よくない狂言をしてくれた、お前を怨むと、笑つていひますと、此後とも、私の生命は、お嬢様に差上げますと、多吉が泣きましたんですよ。

些とも多吉に科はない、亡なつた乳母も氣の毒です、私は我まゝさへさしてくれればつて、進んで柏屋に参つたのでございますもの。

嫁いでからは、舅姑たちが、まるで主人のやうに大事にしますね、私も約束だから遠慮氣なく、亂暴な、我まゝ一杯。

それが何の面白うございませう、いつもくく氣になりますのは良人を殺しました其の通魔で、私をはじめから、皆にまつはる、目に見えぬ、悪魔が彩色した、切つても切れない、あの蜘蛛の巢のやうなものでせうと思つて居ます。

鮎漁の時の桃の花、平家の落人でもありますやうな古風な氣高い婦人、それから店頭を通つた二人連、それは私にしまして、其のあとで、宛然手を下さないばかりにして、良人を殺しましたのは同一ものの觀世物なんです。

盆、二度目に婦人が店頭を通りましてから、良人は大方東京中に居るものならば又逢へようと思つたのでせう、それから元氣づいて一人で外出ばかりして居りましたさうですが、二月ほど經つて矢張晩方戶外から歸りますと大熱で、正氣がなくなりましてね、あゝ、淺草の奥山で悪いも

のを見て戻つた。外面如菩薩内心如夜叉、と言つちやあ時々床の上へ飛び起きて、膝に手を憚う置いて、ちやんと坐ると、先刻の貴方が御覽なすつたお園も見た、狐のやうな、犬のやうな、猫のやうな、狸のやうな、鼬のやうな、其の顔で苜を喫む處まで委しく謔言に申しちやあ、私の女房は妖物だ、あゝ、悪いものを見たと言ふと直ぐに倒れるのでございませう、到頭五月ばかりの間に疲勞死に亡なりましたと申します。私が天王寺で乳母に見つけられましたのは、其の一周忌のことなんです。

大方良人が見ました時は、淺草に網をかけて居たのでせう、二度目には多吉が見ました。其は招魂社の祭禮の時。」

二十四

九段坂を上ると、濠端に觀世物が並んで出て居ませう、彼處です。取附から三ツ目の小屋、七十ばかりの爺さんが暗い處にしやがんで一人で出して居りました、今時八百屋お七の視からくりと、此方は陽氣な玉乗との間に挟まつた、觀世物の前を、多吉が通りかゝつて、弗と人に押されたので足が停りました。

其が其の觀世物だつたのです。一寸見た時は何の氣も着きませんで、唯圓鬚のと島田のと、淺

葱と、緋の襦袢を着たのが後向きになつて居ると思つたばかりだつたさうですが、直ぐ傍で小兒が泣出しましたので、振向きますとねえ。

木戸番と見える、蜘蛛のやうな、恐い、いやらしい顔をした、脊の低い、比丘尼が、七ツばかりの小兒をつかまへて、木戸錢を拂へ、と叱るのですつて。

直其處だよ、私直其處だよつて、何でも居廻りの小いには、たゞ見せるのでございませう、泣き泣き言ひますものを太え餓鬼だ、さあ代を寄越せ、盜賊猫め、宿なしめと、口汚い。

腕をつかまへて小突きまはすもんですから、多吉が見兼ねましたさうで、木戸を償つて、泣いてるのを、其の兒の家へ連れて行つて遣りましたの。

其が一寸した氷屋で、お園さんの家だつたのでございませう、縁なんでもございませう。

氷屋の姉さんと言ひますと何か浮氣らしいのに、多吉が貴方其晩は一寸休んだッ切歸りました、何だか可懐しくつて、二度目に又休みました時、前のお園さんの弟で、其が丁度學校から歸つて来た處、姉さん唯今と、丈より大きな、提鞆と一所にお園さんの前に畏つて、挨拶をいたしました行儀の好さ。

姉さんは白粉氣なし、洗晒しの浴衣で居ますのに、弟には可愛らしい洋服を着せて、赤い靴足袋、綺麗な靴を穿かせてありました。これぢやあ貴方氷屋の姉さんでも心意氣が見えませう。

氷屋は此の女の叔父さんが出させて居りましたつて、一體姉弟が孤兒なんでございましてね、叔父といつても縁續きぢやあないのです。亡つたお父さんの兄弟分とかいひます、お園さんは大人しいもんだから、可いやうにされて居たのです。其の悪が附いて居ました所爲で、多吉は大分お金子を使はされましたとさ、短刀を持つて私をつかまへた人にしちやあ大出来ぢやありませんか。

御新造は嫣然一笑、

「ですが、店も大勢の奉公人、可し、可しにしては置かれなかつて、舅が計らつて當分濱の支店詰、女の方は多吉の知らない分で、叔父といふものと手を切らせて、弟さんの方は中學に入れま

すもんですから、本郷の親類へ預けて、お園さんは此方へかくまつて置くのですが。最う其頃、柏屋では外に子供はなし、一人兒の宿がそれほど思つたものなら、血は違つて居ようが、魂は一つだ、柏屋の跡が絶えないやうに養子をしよう、婿を取れ、氣に入つたものなら何でも可い、人の一人や二人で、甚麽ことをしようとも、金子で潰れる家ではないからと、然う申して勧めますのも可煩し、私の顔を見ては、多吉が濟まないくつて陰で泣きますのも氣の毒ですから、矢張我ま、の一ヶ條にして、因縁のある此の駒返に引込んで居ましたから幸ひお園さんを引取りました。

此處へ参りましてから最う三年、舅が見えます、親類が参ります、重手代が來ますやら。兩親も取る年なり柏屋の屋敷あとが京橋で草の生えぬやう、東京へ歸つて拍子を取つてくれと、いひますけれども、私は最うく憊うやつて前世の約束だと思つて、此の松原に宿が見ました其の婦人になり濟して居るんですもの、そんなことは知りません。何うしてもかぶりを振るもんですから、到頭又忠臣を濱からお召し返して以て、短刀さんの多吉を其の使に寄越しました、然も貴方今日のことです。」

長夜

二十五

「東京から着きましたのは日が暮れて直ぐでございましてね、お園さんが女中達と鎮守のお祭に参りましたのと入違ひになりました。」

私の顔を見ると最う生命は要りませんで持切りで、折角のお見立で参りましたお使、東京へ來てくれないと、生きては歸らぬといふのですが、今度は又、私が憊うやつて居るのは世間を憚るので、養子を取つて世に出るのが、宜い事と思ひ違へて居ますから、火の手が強うございますわ。

まあく死ぬのはあとにして、まあ、お休みつて、母屋へ遣つて置いたのですから、祭禮からお園さんが歸つたら、……何うだらう、……屹度一演劇だよ、と然う思つて、此方は其を楽しみな夢に見ようと、寢衣になつた處へあなたのお聲がしましたのでございます。

私の心ちや柏屋でも何うせ養子をするものなら、乳母の兒だし、思合つて居るお園さんと夫婦にしてそつくり据ゑて遣ります意、其のお園さんに、又然う遣つて揃み着くのですもの、そんな觀世物は打棄つちや置かれませんが、私は些と考へますことがございます、最う三度目ですわ、今夜貴方からお話を聞きますと、これで。

もうく柏屋の一家一類を何うする意でせう、先に多吉が九段で小兒の手を曳いて氷屋へ連れて参りました時、お園さんが、まあ何だつて、そんな、觀世物になんぞ入つたんだつて、聞きましたら、其の人形が姉さんにそっくりだつたと、弟が申しましたさうです。多吉も可恐しく其を氣にして、あとで考へると何うも若旦那のと同じやうだと思ひましたさうですよ。何でも其の時分から此の女を狙つて、何うでせう、じりくよせに到頭死ぬやうな目に合せました。他の話は聞きませんけれども、貴方のお言葉でも解りますわ、弗とすると私たちが、貴方に限らず、誰が見ても其の婦人は皆後姿が背て居て、それから種々なことになつて、情ない目に逢はせるのかも知れませんが、而して貴方、觀世物を御覽なすつたのは、お宮の何の邊でございませぬ。」

我を忘れて酔へるが如く、話の道を迎れば迎るほど、次第に暗闇に引入られるやう、恍惚して聞いて居た要介は、急に問懸けた御新姐の聲に、はつと我に返つて夢から呼覺された心持、今更御新造の顔が見守られた。暫く黙つて、慌てたやうに、

「はあ、觀世物の。然うです、鳥居を抜けてから五宿へ出ようといふ細い道の間で、一寸傍へ引込んだ處があります、其處なんです、小屋の背後も兩傍も直ぐ蓮池なんですが、」

言葉を遮つて念を入れるやうに、
「蓮池、」といつた。

「何うも僕も何だか貴女が有仰る、怪しいものが張つた其の五色の蜘蛛の巢に遣られましたか知ら。いや、何處へ何う網を張つて置くんだか、色々なものが懸るんですな。まづ柏屋さんののはじまりで、こりや町家の若旦那だから縞の羽織だ、それから、島田に結つた氷屋の姉さん。其の多吉さんとかいふ方が前垂がけて引懸つて、からもう、それに木の葉だの、蝶々だの。就中私は恚うやつて洋服で巢の中へ入つたから一番をかしい、餘り突然だもんですから、何處を何う歩いて、お園さんが、那麽觀世物を覗いたらうと怪しんで居たんですが、こりや無理はありません、松原へ桃の花を咲かせた、其の術で引張り寄せたものでせう、驚く。貴方も又甚麽羽目で、いやなものを見せられるかも知れないから、本當に氣をつけなかりやなりません。」

「いゝえ、私は見たいと存じます、」

「見たい、」と要介は自分の耳を怪しむが如くにいつた。

「はあ、見たうございます、實はこれから貴方と御一所に。」と思入つた體でいつた。

二十六

要介は急込んで、其の大膽を斥くるが如く、

「怪しからん、貴女、馬鹿なことを！」

「否、今度もし私の目に入りますか、聞くことがありましたらと、思込んで居たのです。豫ての願なんでございます、丁度可い、恐れ入りますけれども貴方に連れて行つて頂きませう、少し思ふことがありますから、」

「そりや、何、私は何うせ歸道ぢやありませんし、」と要介は其の動かすべからざる狀を見て、先刻の約束、自分にも何等か用のあるといふことも忘れて、敢て押留める氣もなくなつたのである。

「然し、此の姉さんは、」

「お、然う。まあ、しかし能く寝て居りますこと、」
と、寢床に寄り添ひ、搔卷の袖に手を載せながら寢顔を見た。

要介も伸び出して差覗いて、

「や、此のまゝ持つて行かれても知らない様だ、何うでせう、朝になつたら目が覺めませうか。」
「多分まあ恐い夢を見た位で済ませう、別に怪我もして居りませんし、體を氣遣ふことはないでせうが、」

と暫く考へて、

「可うございます、譬ひ死んでも生かへるといふ藥があります。あの、そつと多吉を呼出して來て預けて介抱をさせませう、ね、」

「兎も角も然うなさいまし」と要介が座に復する時、

「あゝ、其が何より、」と御新造はいそゝ立ちかけて、

「御覽なさい、母屋へ行つて、一聲呼ぶと直ぐに参りますよ、あの人のことだから屹度今夜は寝られませんか。」

縁側の外に人の咳く聲。

「姫様、姫様。」

「あゝ」と婀娜な答して御新造は丁ど後さまに手をついて、くの字形、清しい目を睜つて、
「多吉。」

縁に畏つた人の氣勢し、旋て靜に障子を開いた。要介は此時自ら双紙に編んだ物語の中の人物であるやうに思つて、身を開いて、其間を通すが如くにして居直つて見た。

敷居越に手をついた美少年を、目禮して一目見ると、何となく胸が迫つたのは不思議である、要するに其の風采の總てが、人の心を動かす天性であるのであらう。

御新造も不意に來た人の顔を珍しさに瞻つたが、見るゝ何とかしたる、袖も形もきりゝと引緊つて端然として膝に置いた手が顫へ、口を堅く結んだと思ふと、頬のあたりが幽に動いて、はらゝと又一雫。何にも言はなかつた多吉は行儀正しく判然としたものいひで、

「姫様、御免下さいまし、私は何も聞きはいたしませぬ、」

と力を籠めていつたのである、要介はこれを聞いて其の人爲を推するに難からないのであつた。御新造は我を殺さんとしたる敵をも許すばかりの世にも情有る音調で、

「あゝ、可いとも。」

「母屋へ失禮をしましたが、何うしても寝られませんが、頻りとお身の上につきまして胸騒ぎがいたしますので、申譯のないことだと存じましたが、此方へ参りまして先刻から、ソツとお寢間の外を見廻つたのでございまして、はッ、お聲が洩れまして聞きましたのは、唯、多吉を呼びに、とおつしやつたのでございまして。而して縁側へお立出でにならうとしますから、却つて申上げま

した方が宜しからうと存じましてございます、實に失禮、お客様も、
と要介に平伏して、
「何うぞ御免下さいますやう。」

二十七

「あゝ、可いともね、構やしない、
と頷いて、心安げに莞爾したが、
「多吉、」

「は、」

「胸騒ぎの譯は未だ他にあるんですよ、御客様に御免被つて、まあ、お前此方へお入り、」

「さ、何うぞ、君。」

「はッ、」

「可いんだよ、」と言棄てて、うしろへ身を引いてすらりと立つのを、見上げる要介と、見合せた
目に笑を湛へ、身を返して次の室に入った。

多吉は後向の亂れた島田の寝姿を、一目見て、見直して、四邊を眇して、流眇にかけたが、黙

つて俯向く。

要介も無言なり。

次の間の隔の襖は、先刻から開けてあつた、此の庵は唯部屋二ツあるばり、正面の襖も半ばあ
いて、其處なる佛壇の戸を、御新造は先づ片扉開けたのである、きい、と響いて夜が深い。

それからぱつと附木を摺つて、燈明に火を移したが、花立の薄も燃ゆるかと思えて、金色の
輝見るばかり、佛壇はきらびやかなものであつた。

其前に暫く俯向いて、じつとして居た御新姐の姿は、やがて襖の蔭になると、かた／＼として
簞笥の引出を開けた音。

それからする／＼と帯を扱いた氣勢、程なく正面へ立姿で顯れたが、別に着更へもせず、唯袴
を上げたばかり、姿も風采も些とも變つてはるないけれども、其目許、其口つき、これが、心の
祕密を明けて、五分時前まで語らつた人とは思へなかつた位である。

衝と来て火桶の前に中腰になると、ものも言はず湯呑に、早や火も消えかゝつた鐵瓶の底を
打傾けるやうにして、一口にぐつと呑んだ、胸高な帯の間に、銀の目貫を打つた黒く瑩澤に細い
物、灯にきらりとする。

何とて多吉が見通すべき、眞蒼になつて、何かいはうとするのを、おさへるやうに、

「多吉、」

「姫様、」

「此のお方と一寸其處らまで、」

「あ、あなた、姫様、」

「直ぐ、あのお燈明の消えない中に歸りますから、さあ萩原さん、出掛けませう、」と言ひすてて衝と立つ。

「あれ、御新造様、」と小さな聲、今気が付いたか、其とも現か、或は先刻からうとくしながら、我身にかゝる多吉の話に、身動もしなかつたか、不意に白い手を枕について、長襦袢のまゝ、身を揉んで、半身を夜具から抜ける。

此時既に縁側に腰をかけて、庭下駄を突掛けて居た御新造は、一寸振向いて、

「気が付いたかい、お園さん、多吉に拵へて貰つたつてお前の大事な簪は、お客様が拾つて来て下すつたよ、あとで能く禮をおいひ、」

「何うぞ一寸、」と袖を取らぬばかりにする多吉を見返りもしないで、裳は早や薄の中、庭下駄の音は壇を三つばかり鳴り鳴して下りたが、一聲、

「來ちあ不可いよ。」

「身に代へまして、何なりと心得ます、旦那後生でございませう、御新造様を、」と胸倉を掴まぬばかり擦寄つて耳に語つた多吉の言葉に心に刻んで、前後も辨へず、跡に跟いて駈け出した、要介は松原を抜けた彼の石橋の處で、お園の泣く聲を聞いたのである。爾時空もどんよりして、足許なる水の流の行方も分かず。

一村雨

二十八

要介は調子も沈んで、

「まあ、何うなさる意なんです。」

「路々話ませう、さあ急いで、又消えて了ふと不可ません。」

「那樣ものに取合ないで、柏屋へお歸りなさい、よ、兎も角も。」

御新造は落着澄して、

「然うすりや、あなたが養子になつて下さいませう、」

「えゝ！」

「あれ、光りものが」とはツと寄添ふ。
黒雲立つた大空を環形に貫いて、ふはくと、松林の上から、乾の方角に渡り行く一條の青い光、二人の上を通つた瞬間、艶麗な婦人の凄味を帯びた片頬も明かに、岸の露草も佛に立つて、これをいつまでもつひに忘れぬ。要介は消えるまで屹と視詰めて、

「山鳥です、」

「あ、丁度那の方角です、其の觀世物のある處は、」

「然様、」といったが正に其邊と思ふにつけても、要介は戦かれた。

戦かれたのであるけれども、觀世物小屋に着いてからの、此人の振舞には、血氣の壯年、思はず快哉を叫んだのであつた。

途中から颯と村雨して、薄の露、榛の木の雫にも濡れたので、やがて逆着いた社の前の一條道、其の角の葎簀茶屋の蔭にゐんだ時、御新造は手拭で襟を拭き、おくれ毛を搔上げて、いざとて要介に渡したので、これも額を拭ふ中、御新造はしつとりとして、手に絡まる袖を捲いて、下じめをしめ直した、固より庭下駄は田圃道に脱ぎ棄てた、跣足のまゝ、蓮池の突當を窺ふと、暗の中に朦朧として、觀世物小屋は、其の筵戸も幕も見えるばかり、燵と火影がさして、焚火をして居るのが認められた。

窺ひ澄すと、御新造は些とも猶豫はず、跣足でするゝ、泥濘を踏んで向ひ進む、要介はあとに跟いて、やがて小屋の前に着いたが、正面は一杯に蔽物かしてあるので、内の様子は透し見られぬ。

こゝで要介が手招きして、顔で知らせて前に立つて、後に廻ると、松の樹を小楯に取つた、筵の合目を左右から、二人して差覗くと、例の悪臭が面を打つた、覺悟はしても恐るべき面である。島田の方と切禿はありのまゝ、行燈にも灯が點れて、箕盆も置いてある。

要介が忍んだ、左の方の圍の隅に、とろくと顯れ、ひらりと燃える炎があつて、刈集めた薄の穂を一捲つ、突込み突込み、焚火をして眞黒な手を翳したのは、果せるかな小川の岸に腕組して、のツそりお園が濁水を飲むのを見て居た纏纏を纏つた漢であつた。

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、と呟きながら、ぼちやと洗濯三昧、這はいかに、地に筵を敷いて、小盥に水を湛へて、尼は、圓鬚の婦人を襦袢のまゝ、筵の上へ仰向けに引摺出して、蒼白い肌腕に盥へ橋に乗せ渡して、宵に見物に語つた如く、白い布を水に浸しては其のふくらかなる乳房のあたりを洗ふのである。

炎は此處にも閃いて、圓鬚をがツくり仰向けに、腕は一ツ組立てた人形の體を抜けて筵の上、一ツはぶらりと地に垂れて、たよりなげに掌を開いたまゝ、彼の凄い顔の耳まで裂けた口許の牙

は、道芝を嚙んで、金色の目を睜いて居るのを映した。

耐へかねて要介が、つかまつた小松の枝を揺ぶつて、地踏鞆を踏むと殆ど同時。

筵をばっさり搔分けて、御新造は衝と小屋に入ると、一尺とは間あらず、突然裳を前に拂つて片足を上げると、盥の上なる白いものを確乎と踏まへ、斜に屹と瞰下して、蹲つて洗つて居る、尼と面を見合せたが、

「や、外面如菩薩内心如夜叉」と呻かせ果てず、盥を踏返し、足下に轉がる人形の圓鬚を無手と取つたが、右手に丁と抜持つ懐劍。

氷柱を裂くかとキラリとして、地盤を臺に、細首をガツキと切つて、すつくと立つ。

先刻から身構へして居た彼の泥龜の如き漢は、此時、横飛に飛懸ると、花菖蒲咲く池の水の、濁つて色のうつろふやう、御新造の姿は漢に揉まれて、袖も裳も亂る、中に、二三度懐劍の尖は閃いたのであるが、黒髪の根を無手と取られて、

「あれ」といふとたじくと踏躑けながら、

「さあ、来て！」と烈しい一聲。

「おう」といふもどかしや、要介一文字に躍込んで、矢庭に泥龜の腕を撲くと、振向く處を搦放して、両手で其咽喉を確乎と緊めて、竹の埒に押突けると、忽ちぐたりとなつて死んだものの

やう、對手を爲ようともしなかつた、要介は怒る場合にも、手が其の身内に觸れた時、ヒヤリと滑つて恰も蓴菜に觸れたやうだつたのを覺えて居る。

御新造は一揉に、黒髪も颯と亂れて、手に懐劍を提げたなり、切取つた怪しい首の鬚を掴んで熟と見たが、戦々と震ふと、礮と大地に投付けた。

「痛快」と要介は敵を取つて占めたのと、此の舉動に大得意。

「さあ、尼、尼、見ろ、畜生、外面如菩薩内心如夜叉が何うしたんだ、其、其の如菩薩に味方をして、お爲ごかしの面を打拂くぞ、様あ見ろ。

尼はビクともせず、動きもしないで、例の襟首を長く垂れた抜衣紋で、俯向いて、下唇を舌のごとく舐しながら、

「やれ迷ふな、迷ふな、なむあみだぶく、」

「この御恩は忘れません、」

衝と寄つて、手を柔かに、今要介が漢を占めて梓弓突張つた二の腕の處へかけ、其處に前髪を押し當てたが、振仰いで、

「もう些と然うやつて居て下さいよ。」

といふより早く、埒を越えて身輕に床の上に飛上ると、行燈を拂き倒し、切禿を蹴飛ばして、立ち

直つて、島田鬚の長襦袢の襟を掴んで、ずる／＼と引摺つて、舊の土間にひらりと下り、犬猫に
馳を合せたやうな佛の見えずなるまで、縦横散々に思ふさま懐劍で切崩した。

其を鞘に納めると、腕まくりして中央を引摺み、一枚圍の筵を剥がして、焚火と摺れ／＼に立
掛けたが、薄の束を一抱、すばと投入されると、下伏の煙、ぶす／＼といぶるや否や、黄に墨を混
じたのが、渦巻いて立つと思ふに、あなやと要介、捉へた奴を突飛ばした時、小屋に満みちた一
杯の煙の真中から燧と裂けて、土龍の眞赤な骸が、ちよろ／＼と這つたと見るや！

「もうこれで可うございます、お逃げなすつて下さいまし、御迷惑はかけません」と高く呼ぶの
も煙の紛れ、炎のあかりに手を取り合つて、小屋を二人で駈出した。確に水茶屋の處まで、一所
だつたと思つたのが、危急の折から心慌て、要介は唯一人茫然と社の道に彳んで居たのである。

「先生、先生、もし東京の先生」と背後から胴間聲。

はつと見返ると半六親仁、庵に木瓜の提灯を掲げ、雨傘を一本苞背負にして、手に菅笠、皺だ
らけな額の眉を寄せ、目を睜つて、ニヤ／＼、

「まあお前様何處へ行かつせえた、人に念のう入れて置きながら、油元結買にぢやな。はて、そ
れならば可うがすけれど、帽子は薄原へ置いたなり、家ぢやな案じてござらつしやる、其中雨に
なりますわ、雨具を持つて、お迎ひに、見當は此道へ眼けて参りやした、私が目は何うでがす、

うつとりしたのを右見左見て、

「女郎買に目堰笠、頬冠は聞えたが、お前様、其の後顛巻は何でがすね、

雨に濡れたを拭けよとて、葭簀の蔭で婦人がくれたを、討入の勢に我知らず要介は顛巻をした
のであつた。

物をも言はず、半六に手を曳かれるやうにして、要介は夜の二時半頃、櫻木村に歸つたが、臥
床は別室に設けたを幸ひ、何事もあくる日のことと誰にも逢はず、心消々になつて搔卷を引被ぎ、
前後も知らず。

夜が明けると今日は快晴、要介は冷汗を浴び、全身綿の如くになつて、とさまかうさま。

此ま、遁げては一分立たずと、庵の美人の可懐しいだけに、放火の罪も背負つて立つ氣、自首
して出る意で。

其となく様子を聞くと、小旦那の家は村の長で、堀の外には火の見の階子が立つて居るにもか
かはらず、北多摩にも南にも消炭が飛んだといふ沙汰も無い。

餘の不思議に恐る／＼、又、杉の下道を潛り鳥居を抜けると其日も祭禮、神樂堂も觀世物も笛
太鼓の音盛に、押返すやうな人出の賑。

角の掛茶屋と其の蓮池、洲のやうな其もあつたが、見るに塵葉一ツ落ちて居らず、但押返す雑

沓に其處のみは一本の松があるばかり、子供が遊んでも居なかつたのである。

直ぐに駒返へ行つて様子をおもつたけれども、さきは婦人なり、世を隔てて、普通枝折戸から音づれても、人に顔を見せさうには考へられぬから止めた。

東京の下宿に歸つて、茫乎して居ると、日が経つて、多吉とお園が櫻木村で聞いて、要介の住居が知れたといつて尋ねて来た。

此のとき持つて来た手蹟の見事な禮手紙が一通、それと彼の手拭とを記念にして、憚るから名はいふまい、然る陸軍中將の姫である、柏屋の御新造は、當夜以來、容易く人には逢はぬのと、但、其の情が通つて、少き二人は柏屋のあとをつぐことになつたのである。

要介は行ひ澄す庵を驚かさうとは、敢て思はぬけれども、怪しさにたへぬは尼の興行、得意の代數式で占つても答へは疑のXのみ。

女仙前記

「雪ぢや、雪ぢや、本場の雪ぢや。」

と呼聲。赤前垂の茶汲女が頂の立場で旅客を待遇すと謂ひ傳へた、湯の山が、遙か川上の中
空に、縁に朱の襷積の入つた横雲のやうに見える、後朝川の岸に沿ひ、此の川に架けた朝六ツ橋
の杖に榎の梢を少し下つた眞赤な夕陽に向つて、草履穿で徐々と、歩くのが静であるから、砂埃
も立てず、清い流なれば、晝も影の映すばかり、身にはつゞれをはぎ合せた古単衣こそ絡うたれ、
形はあざやかに一人。

此の邊は久しい以前、一廓の遊里であつた、後朝、朝六などいふ名は、蓋し浮川竹の稱であら
う、名残に一軒、柱に朱の漆を用ゐる、欄干も赤く塗つた、こはれ々々の、瓦葺の二階屋があるが、
明地の隅に生茂つた、草に半ば蔽はれて、殆ど立腐といふ形。

通過ぎると傍に姿の良い一本松、嚙廓の盛な頃は、簾を巻いて、櫺子をあけて、梢に月をかけ、
枝には雪をのせて、風情を盡したらうと思はるゝ、根の一丈ばかり上から、幹が颯と二ツに分れ

て、右は遠山を縦に切り、左は流を斜めに截つ、間から、向うに朝六ツ橋を眺むる處、路はたら
たらと爪先上り也。

「雪や、雪や、本場ぢや〜」
心持松の中ばあたりまで、上ると、立身のまゝ、足を浸し得さうな川は、稍目の下に遠ざかつて、
路は狭く、手の觸るゝばかりに石垣の一構。

「本場の雪ぢや、あゝ、雪や、雪や。」
と呼びながら傳うて行く、此の垣、長く續き、高く聳えて、大石小石の合せ目堅く、網の目に
組んだるが、坂下の松と齡を共にするか、苔蒸し、草茂つて、衝と顔の尖へ伸びたには花さへ
持つて居るのがある、此方の岸の高くなるに従うて、向う岸は見るゝ低くなるのであるから、
日は一杯に照し、光線斜めに、石は赫と色つき、風も快く當つて、つき草の咲きさうな影も留め
ぬは、かた〜此の城壁の内に住む人の、盛のほども思ひやらるゝ。

勿論市内唯一の豪家の搦手で、川と石垣の間の徑も、一家の者の彼の朝六ツを渡る近道に造ら
れた位のもの、人通といつてはないのに、あきうどの雪賣よ、あきなひをするに又何故こんな處
を通る。

「雪や、雪や、」

と言ふ聲弱るまで、老いたるものは、然も草臥れた様子で、たら／＼を今上り切つた、土手の草の上へ、肩をふりかへて荷を下した、熊笹の葉に雪を包んで、筵で巻いて、繩からげにしたのを片荷、こなたへおもりをつけて、天秤で擔いで居るのは、土地の風俗で、あらためていふまでもない氷屋である。

振返ると、湯の山は、頂を一本松の梢に並べて、さら／＼と其間を、川幅頓に廣く、こゝに町の兒の七八人、浮いつ沈みつ、擲み合ひ、上になり、下になり、泳ぎ戯れて居るのがあつた、夕立が不意に襲ふと、湯の山を絞つて一支もなく濁流を漲らすのであるから、今時分泳ぐのは、いづれも自慢の手練ばかり。

二

兒等が、帶を解いて置く蛇籠は向う岸なる柳の下に、水は白布を翻して、婦人が二人、洗濯に餘念なささう、橋の下には馬丁の黒い駒を洗ふのが居た。流は夜眼を浸すばかり、敢て深いほどではないが、水底の石は艶かに透かされても、然までには淺くない。

橋の上はちらほらと人通。
其處も夕陽に色づいて、柳の色は一際蒼く、衣あらふ婦人の黒髪に滴る葉末の澈も涼しい。

「雪屋さん、一寸。」

「やあ、」

背後から呼ばれて不意だといふ風で、振返ると十八九の綺麗な女。

「ござらつせえ、なんぼほど進めます、」と腰を捻つて、早や雪を包んだ筵に手をかけ、女の顔を眩しさうに見上げた。

女は中形の浴衣に白麻の汗襦袢、襟細く、大家の小間使と見える風俗、ものいひもしとやかに、
「否、雪ぢやあござんせぬ、お氣の毒さまですが、一寸見せて下さいな、」と賣物では無い方の、
も一ツの筵の中を差覗いて、

「お、」といひながら可愛らしい目、伸上つて、遙に石垣の上を仰いだが、

「奥さまは眞個にお目が早いよ。雪屋さん、兎ねえ、これ、」と筵に指をさして雪賣を又見返る。

親仁は皴だらけの顔に笑を湛へ、

「兎ぢや、兎ぢや、何處で見てござつた。」

雪の筵包と振分の、筵の中には、實に一羽の小兎が居て、圓く畏つて候。

柔な耳はふつと二ツ長く、全身一筋の黒毛を交へず、眞白で雪のやう、いたいけな姿かな、慥る夏の日に照されては堪へず消えるであらうと思ふに、丁度、天秤の端に吊してある二條の細繩

に、雪を包むのと同じ、熊笹を一束結つけ、日覆のやうにして、兎の肌を庇うてあつた、緑の笹の色を宿して、毛の艶は彌増しに美しいので、下に敷いたまぜくの秣も、見るもの目には錦の褥とも紛ふばかりである。

女はつくづく眺めて居たが、

「まあ、可愛いねえ、

更めて、

「雪屋さん、此の兎は賣るのぢやありませんか。」

親仁は天秤を前に蹲んだなり、

「いんや、賣物ではござりませぬ。」

「おや然う、」

「が、待たつせえよ、お前様が欲しいのか。」

「否、奥さまが、」

「奥さまが？ 何處の奥さまだの。」

「此のお邸の、」といつて、小間使は再び振仰ぐ、石垣も此邊は残りなく草が刈取られて、上には松の樹が根をそろへ、いづれも川の方に枝をさして、葉の彌榮えに榮える間に、此處、彼處、白

壁が洩れて、見えて、武者窓が二ツ三ツ。

「あれ、彼處から御覽なすつたんですよ。小兒のが、とんぼを切つたり、肩車で泳いだり、其を覗いて在らつしやつたのが、私達は遠くつて氣もつかないのに、何うして、お目に入つたのでござんせう、まあ、」

三

「はあ、其の方がお望みで、」

「お賣りのなら買ひたし、然うでなくつても、何うにかして譲つて欲しいと仰有いますわ、眞個に望んで在らつしやるんだがねえ、不可いんですか、」と懇である。

親仁は小首を傾けて、考へながら兎の方を見遣つたが、

「いや、今もいふ通り、こりや賣物でないのぢやが、品に寄つては、はあ、進ぜますめえものでもないが、ちよつくらとはいきましねえてね。」

「其處を何うにかして、ねえ。」

「何、また別に難かしいことでもねえて、私、其の人を見て、氣に入つたら進ぜませう、あねさん、望まつしやるお方様に、一寸お目に懸りませうかい。」

「お目に、奥さまに、」

「誰でも可えわさ、主ぢや、之を欲しいといふ人ぢや。」と落着きつた顔色。

「それは、さつきからいふやうに奥さまなだけども、はてな、」

使者は一存の思案に能はず、

「まあ、一番聞いて見ることにはいたしませう、」

「されば聞いて見させえ、」と雪うりはいかにも澄す。

「それぢやあねえ、御苦勞ですが、一所にともかくも彼處まで来て下さいな、え、あの裏口まで、」

「安いことぢや、」

「それでは。」

夕暮は淡く川づらを籠めたり、瀬は翻つて蒼白く、湯の山は更に縁を増して、涼風来り、小間使の單衣の袂は八口のあたりから、向うて行く方に逆に颯と靡いた。

親仁は荷をうむと捧げ、蚊脛を弓なりに、呼吸を入れる。

「氣をつけておいでなさいよ、道がせまいから危なうござんす。」

「あい、」と小間使についてたらくと、今度は搦手の要害、趣が違ひ、白の練堀になつて居

るが、水を隔つこと三間に不足、未だ二三人泳ぎ手は残つて、攀ぢれば攀ぢれる堤防だけれども、餘り此處には上らぬらしく、堀は古いが、落がきのあとも見えぬ。

堀の中ほどを丁字形に仕切つた、其が小間使の導いた當家の裏口に、今出て来たのも此處からであらう、銅の板で張詰めた、あけたてにつしんといふ、嚴しい堅固な一枚戸は、左へ半ば引いたまゝ。

半身を見せて一人、銀杏返しの年上なのが、西日はあたるが、山風の渡るのを涼しさうに、立つて居た。

待構へた風で、

「お巳代さん、何うして、」と聲を懸けると、お使者は一足さきへ小刻に駈け抜けて、

「あのね、」

「何てつたの、」

「賣物ぢやあないんですとさ、」

「不可いの、」

「其でね、」

と言はうとするのを、押被せて、

「お錢を遣るといやあ可いぢやあないか。」

「お聞きなさいよ、何うしてお金なんか欲しさうな顔もしませんものを、そしてね、何んな方だかお目にかゝつて、氣に入ればたゞくれるとさ。」

「たゞ、たゞは可いけれど、お目に懸りたいは亂暴ぢやあないか、何だと思つてるだらう、雪うりなんぞが何うしてお前、」と目を丸くする處へ、ひよっこりと來て、

「何うぢやの、相談は出來たか、」

「あゝ、今ね、伺はうといふ處です。」

「疾くさつせえ、いや日は長い又ゆつくりとやらつせえ、」

大口を開いて、

「はゝゝはゝゝ、」

四

親仁が餘りの無頓着さ、恠るお世辭氣のない者には、主人の威光で今までにつひぞ出あはぬ、年増の女中は癩だといふ顔で、若いのに入交り、

「おい爺さん、何も玉や黄金で拵へたものぢやあ無し、何處から捕へて來たんだか知らないけれ

ど、そんなに勿體をつけるには及ばないぢやあないかね。」

ぬうと立はだかつて居た雪賣は、荷を擔いだまゝぐるりと廻つて、年増の方に向きかはつて、

「私が兎を私が持つて、此處をすいと通越してしまへば、別なことはありましねえてね。高え處

から見つけさせたとやらで、これ、譲つてくんと其方で言はつしやるについて、ものは

だかりましたさ、玉ぢやろが黄金ぢやろが、はて土で拵えたものぢやろが、又生のものぢやろが、

お前さまが何も構つてくれさつしやる事あねえだ。」

「だがさ、」といつたばかりで年増は巳代と面を見合す。

「何と私がいふことが理合ぢやらうかの、何うでがす。」と立身上りになる。

「まあ、そりや然うだけれど、何もお前。」

「いんえ、原から賣物でねえことは斷つてあるだ、氣に入つた人なら進ぜましょがの、兎を欲

しいといはつしやるのは、姉えぢやああんめえね、」と雪賣は巳代を見返つて、

「の、私其の人を見たいといつた本人よ、奥様ぢやとかいはしつた、えゝ？これが又其の人な

ら、はあ當こともねえ話だ。」

と眉を寄せて苦笑。

「此の人ぢやあありませんとも。」

年増は目を圓うして、

「お巳代さん、何も（とも）と力を入れていふにはあたりません、いつ私が奥さまだといひました、はい、何うせ私は女中に生れついたんでございますよ。」と大きにむくれる。

「あれ、何です、ね、」

親仁は唯にやりく、雪といふものは段々解けるものとも思はぬらしく、泰悠なものである。

「何しろ一寸伺つて来ませうや、」

「あらためて聞くまでもないでせうよ。」

「なぜです。」

「だつてさ、こんな者をお庭口から入れられる譯ぢやあなし、奥さまが、何でお前お逢ひなさる氣遣はありはしないもの、出来ない相談ぢやあないか、ねえ爺さん、」

「あ、ん、」

「お金子の相談ならいくらでも出来るんだけれどね、」

「いや、」

「お顔を拜まうなんて、そんなことは思ひも寄らない、駄目だよ。」と凹まされた鬱憤を押へ切れず慳食にいつて退けると、けろりとして、

「止さつせえ、薩張と止さつせえ、何もこれ私等が方からいひ出したこつちやない、いや、餘計なことでも手間を取つた。」

「あれ、お前さん、」

と慌しく巳代が、

「まあ、そんな短氣なことをいふものぢやありません、一寸、ともかくも伺つて見なくつては、不可いといふのに、宛然お前宵闇にお月様を招き出すやうなもんぢやあないか、お話になりやしない。」

「それでも唯伺つて見る分には、お氣に入らなくつても粗相にはなりませんよ、此處で私たちの料簡で、此の人を遣つてしまつては、叱られた時に取返しがつかないぢやあないか。直ぐあの何ですからお前さん一寸待つて下さいませよ。」

親仁が素直に頷いたにもかゝらず、風向の悪い年上の女は何につけても平ならず。

「何うともするさ、」とツンとして木戸から引込む。

五

アーチ形の此の銅で張つた裏口の戸は半ば開いたまゝで、樹立の中を前後に、母屋の方に行く

路は叢ながら段のあるらしく、浴衣の姿は小くなつて上へ、上へ。

見送りも果てず、手間が取れさうに思つたか雪賣は又荷を下したが、左右の箆に天秤を載せかけて、其の上に腰をどつかり。

「あゝ、やれ〜。」と何等か大なる秘密のあるやうで、然も此くらゐ無意味なことはない獨言。

親仁は何事も思はぬ状、人を待つといふ色もなく、戸を背後にして、目の前に夕陽の彩つた、流と、未だ残つて泳ぐ兒等と、布を洗ふ女とをじつと眺めて居た、周囲には石垣の松の風、向うの岸には柳のそよぎ。

恠くて目に見ゆる暑さの色も薄れ〜に日は傾く。

四邊は靜に、ざぶ〜と流を搔攪す音も聞えて、親仁の姿は大きな掌を膝頭に据ゑたれば、髻として仙家の人の趣が見えた。

兎は箆の中に愛らしく蹲つて、動かす、不言、食べるものも食らず、恰も雪で拵へたものやうである。

「おゝ、此處に」といふ聲、樹立の中に媚しい氣勢がして、潑と薰る袖の留奇、木戸を溢れて、早や袂の端、爪はづれ、練扉を盾に衝と寄つて半ば顔を差出す、傍に引添うて、戸の正面を眞向に扣へたのは、再び以前の巳代であつた。

「お爺さん、よく待つて居てくれましたね、」と之は又案外な、年上の女中が如彼までに言つたにしては餘りに軽々しい物腰である。

「や、お前様でござりますか、」と親仁は中腰になつて、脊のすらりとした婦人の立姿を横から覗込むやうにして仰いで見る。

「あのね、然う申上げたら急いで出ておいでなすつたんですよ、お前さん、此の奥様です、」と令室を蔽ふやうにして居た身を開いて一足傍に寄つて、誰にするともなしに一寸頭をさげた。

「はい、これはもし奥様でござりますか、はい〜、」と親仁は腰を屈めて、揉手をし、身體を捻つて、向ひ合ふと、天秤は片端に繩を絡んだまゝ、箆の縁をすりと迂る。

「飛んだ無心をして濟みませんね、」と、氣高い人は、却て無造作、品ある身を卑下した會釋、鬼神の力もなゆべき、艶麗な顔に微笑を含んで言つたが、禮を享けて、薄衣のすなほな肩を斜に、打傾ける横顔へ、おくれ毛がはらく〜と。

其まゝ、くの字形に半ば姿を木戸口から、じつと箆の中を打瞻る。黒目勝の、瞼毛の濃い、涼しい、ぱつちりとした左右の瞳には、ありのまゝ、眞白な兎の形が二ツ、笹の葉の緑の影を宿しながら映りさう。

「まあ、綺麗な、可愛らしい、」

「お爺さん、何處からつかまへて来たんです、」
と巳代は此處に出て来る途次、令室と交へたらしい言葉を爰に問ひ出た。

其と是とを右見左見、

「こりや、はい、私がつかまへたのではござりませぬ、取つて十九になりました、私が娘が手飼にしたものでござります。」

出直つて、

「姉さんが、然う？」

六

令室は猶もの優しく、

「而して家は何處なんです、何處から憚うやつて商ひに出て來ます。」

「はい、私が里は、」

親仁は屈んだまゝ、背後さまに、遠く芥子の花の刻の如く、判然と其の頂を顯した、湯の山の方を指して、

「ずいと此の川上の、湯湧谷といふ山家でござりまして、」

「おや、湯湧谷から賣りに出るの、」と巳代は驚いたやうにいふ。

「遠い處かい。」

「三里足らずもござりますよ、ねえ、雪屋さん。」

「近い三里でござります。いゝえ、毎日出ますでもござりませぬ、それも町まで來ます間に、川岸に貴女さま、村が七ツばかりもござりますで、ぼつくと、彼方此方で賣れますが、今日は些と志すことがござりまして、商はつけたりで、町方へ出て参りました。え、實は此の兎を兒のやうに可愛がつて育てました娘の命日でござりまして、」と語りかけて愁然たり。

「まあ、お前、其の姉さんが亡くなつて、

「はい、祥月でござります。」

「それぢやあ大切な記念なんです、」と巳代が、今更のやうに又覗いて兎を眺めて頷く。
令室は寂しげに齊く頷き、

「それぢやあ無理はないのだよ、ねえ、巳代。」

「は、」と膝のあたりまで手をさげた。

「どんなに私が望んだつて姉さんの記念だとさ。それに通りかゝりの、知己でもない人をつかまへて、持つてるものを無遠慮な、直ぐに此方へ貰ひ受けようつて、我儘ッたらなかつたよ。本當

に身勝手な、お爺さん、堪忍しておくれ、つい他にねだりごとをした覺はないのに、何うしたわけか、其の兎は、盗みたいほど欲しかつた。外の事なら無理にもいふことを肯いて欲しいんだけれど、然ういふ因縁があるのなら、思切つて、お爺さん、大層お手間を取らした詫をしませう。」
といつたが、猶物足りなさうに、且つ極の悪さうに、

「それでも斷念められないやうな氣がしてならぬ、巳代、私は何うしたのだらう、」
優しきは言葉に溢れる、其の聲を聞くのを嬉しげに、又然ばかりの主人の思の届かぬのを悲しさうに、巳代は首を垂れて無言であつた。親仁は慌しげに口忙しく、

「あなた様、いえ、何うして／＼あなた様に、之を差上げませいで宜いものでござりますか、お問ひなされますに就いて在所のことをお話し申しましたばかり。其の所爲で、お断り申すでは決してござりませぬぢや、言ひ次第にお察しなされまして、其で御遠慮はお前様、餘り思遣が過ぎますでござりましょ。」

昔で御覽じまし、お見懸け申しました御大家の、こんな御身分の御方様ぢや、湯湧谷の百姓なぞは、はや直に口を利いたばかりでも無禮打になります分ぢや、こんな者一匹何が惜いものでござります。

ぢやが又、お望みなされますお方様が、あなたのやうなお女中でござりませぬば、理が非でも、

何お前様。

親仁が目の黒い内人手に渡すことではござりませぬ。」

力の籠る親仁の言分、強ひて望んだ我意が通つたかと、罪を造つたやうに思つて安からぬ令室より、小間使の方が然も嬉しさうである。

七

「したが、もし、あなた様。」

親仁は河岸の方に、身を開いて改り、

「お居室に飾物にさつしやる、瑪瑙の玉や、枝珊瑚樹などは違ひまして、生のあるものでござります、はじめは一も二もなしに可愛うございまして、何がこれ、仔細に寄つては我兒でも邪魔なことがないとはかりは言はれませぬで、随分勞つてやつて下さりまし。」

それに又、此の兎は、唯耳の長いばかりではござりませぬ、人のいふ言も聞分けまするやら、娘が呼吸を引取りますまで、友だちのやうにして、いや、あれこれと、頓とな、人と口を利くやうにして居りました。

あ、誰に見しよとて紅鐵漿つけよぞ、娘は叶ひ難い人を思つて焦れ死になくなりました。誰

を何う慕うたか分りませぬけれども、此の兎には思ふことを皆打明けてあると申して居りましたに因つて、お手許に飼つて置かつしやることなれば、永い中に、どんな夢枕に立つて、あなた様面白い、嬉しいか、それとも辛い、悲しいか、夢を御覧じまいものでもない、それでも大事ござりませぬか。」

何か意味のありさうなことをいつたのであるが、令室は今唯、最う目のないほど可愛いものを、くれるとあるが嬉しいので、謎のやうなことはよくも聞かなかつた、けれども愛しがつた主が、戀知だといふのが深く耳に響いたので、

「可愛さうに、まあ、姉さんといふのは、何、未だ御亭主はなかつたの。」

「其の事でござります、最うこれ六十の上を越しました親仁の娘なら、いゝ年紀の嬢のやうに思召しませうが、仔細がござりまして私の娘分、世間體だけのことでござりますから、私が娘と申しても、年紀は、

といひかけて見るもあでやかな令室の其の倅。

「あなた様より一ツ二ツ未だ若いのでござりましたが、お生も何も悉しうは存じませぬ、又そんな山家のものが、色戀と、嘸をかしく思召しませうがの、いや町の人はつひぞ來た事はないで、兎か狸、山女でも棲んで居るやうに謂ひますが、美しい冷い水も流れます、湯も湧きます、

高山の下でござりますから、いつも白い雲が行つたり來たり、彼方にも此方にも雪が消えずに居りますし、唯今頃は藤の花が、それはく見事に咲いて居ります。

笠は召さいでも、舊の通、お色も黒くはなりません、手足のきめもあれませいで、や、其のお美しかつたこと。

御慮外ではござりまするが、あなた様にそっくり生うつし。

小間使は事ふる人の、氣をかねたか、はつと耳の邊に色を染めたが、令室は我身を譬へられたのではあるけれども、思ひやらるゝ其の娘の、餘りの美しさに我知らず慄然とした。

少しあなた様より瘦せて在らつしやつたやうに思ひます。御氣象も然うでございました。爺や、と其の方に呼ばれますると、はつというて私は何となく尊きに頭が下りました。あなた様がおつしやりまする聲のお優しさ、勿體ないが怒うやつて、しみゝお顔も拜まれまする、あなた様でござりまするから、私が目金で此の兎を差上げまするで、何うぞおいたはり下さりまするやう。

結構なお城のやうな中にお住居でも、町は町だけ、夏は暑うござりまする、なるたけ涼しい處でお育て下さりまし、馴れればでござりまするけれども、唯今まで居りましたは其の雪のある、藤の咲いたといふ折から、キリくくと大空へ釣瓶を捲くやうな蛸の聲。

「おゝ、彼が鳴きますると、湯湧谷はもう寒うござりまする。」

又一聲、此處の樹立の梢に應じて遙に聞ゆる山のあたり。

終日ひた鳴きに鳴き騒いで、ちりちりと唯暑さの長に天地に染込むやうだつた蟬の聲も、二三ツあわたしく明かに響いて静まる。

向う岸の柳の蔭から、金ちやん——おつかさんが御飯だよ。

泳ぐ兒は纜に残つた。

令室の袂はひらりと木戸口に、風は其處からも吹き起るか、荷の中の雪も解けて流れて土手の草に冷い濡色。

「いや、もう斷つてお望とありますに因つて、附上り、大勿體をつけました、は、は、は、賣物に花でござります、此の上はたゞ田舎ものが持つて來た山兎一つ、貰つて遣つたと思召しまし。何の彼のと申しても全くの處は亡くなりました娘分の、其の嬢様が御遺言、可愛らしい兎が見たら怯えさうな、こんなむくつけない親仁の手で育てさすは可哀相ぢや、町へ出て、お優しい、美しい女中を見立てて、其の人にははつて貰つてくれと、くれぐれも言ひ置きましたで、あなた様のお望は、はや、全くの處渡りに舟でござりました、最う、いやぢやとおつしやりまし

ても、私が方から頼みまする。

唯一ツ念のために申し上げますが、あなた様、此の兎を、お手許にお蓄ひなされますと、弗とすると其の、もの、でござりますわ、男戀しうならつしやらうも知れませぬが、

皆まで聞かないで令室は然も心安げに、

「私には良人がありますよ。」

「いかさまな！ は、は、は、いや、これは心付きませなんだ。」

と又笑つて、

「然やうなれば、しゃんくくと、話はこれでグイ極り。どれ、奴をそれへ」と親仁は繼接の單衣ながら、惜氣もなく地に膝をついて、腰を浮すと前屈みに箆の方。

「雪よ、雪よ」と呼ぶと、圓くなつて居た小さな動物の耳は、胴とともに、すらりと伸び、短い前足を縁にかけて、水晶のやうな目でくるくると親仁を見た。

「雪よ」と又呼んで、大きな掌を礎と打つと、其の掌の放れぬうち、一片の雪空に躍ると見えて、衝と來て膝に抱かれたのである。

「よく、馴れて居りますこと、」

「お爺さん」と令室は弗と思ふ處あるらしく、更めていつた。

「お爺さん、あの、今呼んだのは其の兎の名なの。」
巳代ははじめて気が付いて、思はず、口の中で、

「お雪さま、……おや。」

「はい、何、雪は娘の名でござります。」

「お、姉さんの」と令室の目には心が籠つた。小間使は計りかねて密と其の顔を打守る、一場の光景、察するに難からず。

親仁も窪んだ目を活々とさして、

「あなた様、おなじお名前です。」

「何うもねえ、然うなんですよ。」と巳代引取つていふ。

「お爺さん、其の姉さんは、まあ、何ういふお方なの」と令室は取出でて然も不思議さうに聞いた。

「もし」と遮つて、「其はお聞きなされますな、何處の方か知りませぬが、湯湧谷が錦葉の時分、流の岸でお出あひ申したのが初のお目もじでござります。世を捨てた者ぢや、お前を見かけて頼むに因つて世話してくれ、と打つけにおつしやつたが、一目見ると、其の御様子、唯もう神様がいひつけさつしやるやうでござりましたで、はッというて畏りましたのでござりますが。」

九

「其の時から兎を抱いて被在つしやりました、何も問ふなとおつしやいますから問ひませぬ、又素性を問うてお世話する位なら、はじめから断りまするわ。」

私が目で此のお方ならばと思ひましたら、何とならうと構はぬでござります。まづ、あなた様がわけもなく、此の兎が欲しいとおつしやるのも同一道理でござりましたよかい。」

令室は聞きつゝ、胸に手を置いて、何となく打傾かれるばかりであつたが、やがて吻と呼吸をついて、

「あゝ、ぞつとしたよ何うも」といひながら、恍惚と、斜に湯の山の方を、葉越の日影に打仰ぎ、雪があつて、藤の花が咲いて、空にいつでも白い雲が、

と口の裡。やがて花やかに、「あゝ、お爺さん、其處が湯湧谷といふのですか、私ははじめて聞いたやうな気がしませんよ。何だか一度行つた事があるやうに思ふのねえ。何時だか知ら、幼な時分か知ら、それとも昨夜あたり見た夢を遠いむかしの事のやうに思ひ出したのでもあるのか知ら」と遙に湯の山のあるあたり、眉も口も、一際判然とする黄昏の色ながら、夢見るやうな目ざしでいつた。

「は、あ、いや、それとも、あなた様、宿世の事も知れませぬ、又何ういふことで、後の世の事を今悟らつしやつたのかも分りませぬ、もしもあなた様が、此の兎を抱いて、湯湧谷の流の岸へさまよつてお出なされ、私が其處で出あひますかい、今の夕陽を宛然の錦葉があつて、御覽じまし、其のお雪様はあなた様で、あなた様はお雪様でござりまするわ。」

「お、其の兎を、さあ、此方へ」と令室は蘇生つて、我にかへつたやうなものいひ。

碯と腰骨のあたりを叩いて、左の手で、膝なる其の兎を、じつと見ながら、掬ひ上げるが如くにする。

ト脱兎とさへいふ譬、翩然と飛んで、令室の乳のあたり、不意だから、はつと身を引くと、兎は後足でこたへた帯の上を這つて、するりと落ちようとする處を、兩方の袖でさすがに支へた。

其の項に頬をあてて、

「何かの因縁かも知れないねえ。」

「はい、其はしかし存じませぬ。」

「奥様々々！」

と此時、小高い背後の樹立の中から甲走つた女の呼ぶ聲。

「旦那様が」と又叫んだ。

「あゝ！ 巳代や、」

「はい、」と驚いたやうに返事をして、目をぐる／＼やつて、既に兎が令室の手にあるのを見たが、恰も魂が抜出したらしう、巳代は茫然として居たのである。

「これ、」と兎を捧げるが如くにして見せ、

「御覽、貰つて了つたよ、巳代や、旦那様がお呼びだから、私に行く。」

「奥様！」

「うるさい！ あの後でねえお前、お禮の相談をしておくれ、可いかい、それぢやお爺さん、」と會釋をして、

「御免なさいよ。」といひすてて、活々とした風采、活潑に背後になり、袖で抱いて肩細う、恰も兎を庇ふやうに、しをらしく、俯向いたなりで、衝と歩行き出しながら、

「可いかい、屹度だよ。」とすら／＼と歩み去る、令室は幹にかくれ、枝に遮られ、葉蔭になり、裾が見え、帯が見え、肩が見え、又裾が見えて、高い處に小さくなつた。

後姿を見る目も楽しく、寝る間も傍を離れるのが、殘惜いばかり主思ひの巳代は、然も可憐さうに見送り果てたが、人氣勢が背後を蔽ひ、踞んで居た親仁も伸上つて見て居るやうな氣がしたのが、やがて、令室に言ひつけられた、兎のかへしの禮のことを、ト振返つて見ると影もな

い。

「お爺さん、おや！ お爺さん、」

思はず衝と木戸を出て、右瞻ると、居ない、左瞻てもちらとも見えぬ。

折から橋の上に入亂れた、八九人、左右に忙しい行交、扱は其の中にと、前かゞみに瞳を据ゑる

たが、脚ばかり目まぐるしく、人顔も定てないので、我にもあらず、引かるゝやう、五六歩橋の

方へ駈下りたが、其と思ふものもない。

又走せ返つて木戸口を此方に駈抜け、土手の高みから、長く流に沿つた水上凡そ五六町駈下る

されるのを、件の一本松の兩岐の中から透したけれども、薄れ行く影もなかつたのである。

兩方の岸は、樹となく、屋根となく、柳となく、草となく一様にぼんやりと、目に近きものは

姿黒く、遠きものは灰色になつて、湯の山には靄の幕、流は高く音を投げた。

「まあ」とばかり呆れ顔して巳代はうしろすりにいつか木戸に来て、なほ去りやらず、夢の如

く、親仁の行方を心に描いて、捕へ處もなしに眺めて居ると、若柳がさつと鳴り、向うの橋の袂

から、丁度人脚の途絶えた橋の中ほどまで、裸の兒が矢を射るばかり、ちよこくと駈けて来て、

泳上手の未だ遊び足らず早やくらくなつた水の面へ、もんどりを打つて、どぶり、眞倒！

女は驚いてフィと木戸の内へ、別なる人の手が待つて居たやうに、其トタンにハタと彼の銅

張龜甲形の扉を鎖した、さて獺の暗の宵。

きぬぐ川

午飯の支度は鮎の鹽焼に鮎の汁、古風な塗膳の元げたのに、椀も皿も侘しいけれども、川魚は泳ぐのを其の儘で料つたやう、鮎は聞えた名品である上に、きぬく川も此の邊は、市から川沿の村の數、六つを越えて七ツめのはづれ、湯の山に手の届きさうな上流であるから、其の丈疊の目十二、十三と算するのが、反を打つて、箸にはツと薰るのを、鶉香に舌鼓を打つて、軍曹と、
 巡査と、最う一人、緞の紋着に袴を穿いた、三名濛い酒を早や五六本。

「あ、可い心持だ、川風が又そよ／＼して、てんと極樂、東下りと見える、此の姉さんの唐紅の安繪具が、ちらつく工合といふのはない」と巡査は後さまに手をついて、打仰向きながら、壁貼の石版繪の端を吹いた。

「は、あ、大分草臥れた美人ですな、こりや餘程雨漏に遣られたやうだが、我々は何うも照りつけられて草臥れ切つた、道程は大したことぢやあないが、棒端から此方、分けて此の二つさきの、何とかいひました、彼の村から此の劍までの石碓澤山の太でこぼこと來たら、何うです。ひよろ

ひよろ歩行くうちは宛然大波に揺られる形だ、尤も昔から、一本齒の足駄で、此の先の媛神社までお参詣をすりや、大願成就としてあるんだからね、いや、驚かざるを得ませんよ」と紋着はぐツたりの形。

軍曹は、大胡坐で、

「執事君、君、まづ其の袴を取らんか、査公も、草鞋穿ぢやつたが、肴を見ると上り込んだといふもんぢや、緩りやらう、うむ、壯に飲まう。何うぢや、次手に別嬪のお酌があると言分なし、遣らせようではないか、何うせ傍に控へて居るもんぢや、うむ別嬪、一番酌をしてくれんかね、と濁聲をかけて、無遠慮にじろりと見返る、簀の子の縁の端近う、座を下つて、暑さに消え入りさうに悄然と、葡萄棚を小楯にして、薄い膝に手をかさね、差俯向いた面ざしの、涙ぐむまで愁はしげなるは、小間使のお巳代、單衣の衣の汗ばんだのも、弱々しい状には重さうな、其れのみか、些と幅を廣く、紅の扱帯を胸高に、乳の下のくびる、ばかり、確乎と結んだ色の、塵も留めず鮮かなのが、風情に添うて花やかならず、霜を染めたかと其の果敢なさ。

もの言はれても答もせず、袂の端を取上げて、爪探りながら口を結ぶ。

「氣輕に謂ふことを畏まつて、はいと酌をするやうな婦人なら、何も恚うやつて御苦勞千萬な、此處等下りまで出向いて來るには當りませんや、優しい顔をして居る癖に、恐しく強情で、から、

すね切つて居るんですからな、命じたつて駄目ですよ。」と執事は冷かに言つて、開け擴げた窓越に、流の方へ顔を向けた。

軍曹は朱の如き目を睨り、

「また十ばかり引ばたくか、うむ、姉さん温順にせんと昨日のやうに、ぎうと取ちめるが何ないぢやい。」と厚い唇で舌なめずりす。

巡査は杯をつゝと獻して、

「いや、夫婦松のお邸の中とは違つて、邊鄙でも往來です、無法なことは出来ません、其にさ、血の涙で徳利を持たれて御覽じろ、此の悪酒だもの、立處に毒と變じま、ねえ、執事さん。」

「然やう、まあ、我慢してお重ねなさい。」と酌をしながら、紹の羽織は向き直つて、

「おい、巳代、せいゝ呼吸を切つて居ながら、こんな處まで引張り出すにや當らんぢやないか。眞前に圖星をさゝれる、實家へお隠し申したわけぢやあるまいが、令室の在らつしやる處を、き様の知らんことがあるものか、又さ、今時や、雪靴を穿いて出たつて、お邸の庭でさへ踵の剝けさうな姫様育ちが、兎に乗つて飛びやしまし、湯湧谷なんぞへ遁げるものかい。」

二

「何うだ考へて見る、私たちだつて恐れる路だ。然も炎天に、き様、迎も女の足で、歩行かれやせんぞ、雪賣の親仁とやら、炭賣の婆とやらに、聞いたことがあると言つて、令室は川上の湯湧谷へお隠れなされたばかり、吐すもんだから此の騒だ。」

今もいふ通り、迷兒の兎が負をして駈けたら知らず、お雪様の身體で、何うして此の湯の山道を、一足だつて歩行けるものか、何うです。君、

「全くさ。」と巡査は立膝の上に猪口を据ゑる。

「は、あ、何でも可え、撲つて白せろ。」と軍曹は、早やとろんこの目を瞑つて、大口に鮎を横くはへ。

「困つちまふ！ 何かといへば、殺せの死ぬの、活きると、手古摺らせること夥しいや、今も此の飯屋の奴等に聞いたけれども、四五日の暑さで、飛脚も通らぬと言ふではないか。」

白いものと、赤いものは、人間の身體には着かぬものと思つてらい、此處等ぢやあ。

上の方になればなるほど、流は急だし、外に通る處はないのに、奥様が彼の容色で、あの姿で歩行いて見ろ、的切片輪車に上臈が乗つて通つた位の噂をすら、お邸に大切なお客があつて、園遊會を遊ばした、其場から行方が知れぬのぢやないか。

巳代、き様だつて、何なに目立つと思ふ、巡査が居るから恐いと見えて、近くへは寄つて來な

いが、戸外はワツ／＼といふ人ばかりだ。」

「呀！ 笹園の野雪隠の前へ、どしこと集りやあがつたな。おやく、此家の内の夫婦に、子供まで顯れてら、何も自分の内を外から覗かなくツても可さうなものだ。お、石碓の上へ腰をかけたのがあります。炎天に驚いた、暢氣なもんです。」と巡査は苦笑をしながら、膳のふちを箸でこつ／＼。

「可い加減にいつちまへ、」と執事は荒らかにいつた。

「巳代、」

「は……い、」

「湯湧谷なんざ嘘の皮だらう、うむ、」と呻つて、軍曹も斜に睨みながら、軍服の肩を聳かした。

巳代はものおぢして、膝に置いた手を其のまゝ、上前の襟を押へながら、竦めた身をあとへ退いて、

「全く、あの、私は何にも存じはいたしません。何でございます、此の山の中へお入り遊ばしたと申しますのさへ、うろんな位でございます、而して、奥様がおいで遊ばした先を申上げて悪い、と思ひますりや、ねえ、皆さん、」と口惜しさうな顔を上げたが、唇の厚いのと、目の細いのと、一寸髯が、三方から瞳を集めたので、又俯向き、

「私や、私や、打たれましたつて、」といひさして、震ふ袖口を目にあてる。

「心柄だな。」と執事は投げたやうにいふのである。

下ぶくれな頬が見え、袂の中で頭を振り、

「否、どんな目に逢ひましたつて、令室のお爲に悪いことを、殺されたつて言ひはしません。御前様や皆さんがお尋ね遊ばすより、奥様をお懐しくつて私の方がお顔が見たいのでございますもの、お在遊ばす處を知つて居て、言はないわけはないぢやありませんか。何うぞ最う、いろんなことをおつしやるのは堪忍して下さいまし、私や眞個に何うすれば可いか、途方に暮れて居りますものを、」と聲も切々に打怨する。

「いや、事實でせう。大都會とはわけが違ふ、此の市中のことです。地圖を開いて見るよりも確かな警察で、僕をはじめ彼の位探したが、何處の物置にも、押入にも、況や蚊帳の中などにです、お邸の奥様が隠してあらうとは思はれん。」

のみならずです、奥様が見えなくなつたと同時に、お邸の裏口だ、朝六ツ橋の向うに居た除隊の騎兵が一名と、本人の身に着いたもので、鐵砲が一挺と、これだけ見えなくなつたといふことまで、探索が届いて居るのですから、巳代がいふ、其の山へ隠れたのが嘘ぢやありませんまい。」

「巡查は尻上りの言葉を継ぎ、

「事實あの晩、全體の市に移動のあつたのは、第一奥様、其の騎兵と、鐵砲一挺です。其の外には警察へ、煙草入の遺失届一つ出ないんです。僕たちの方で其だけ行届いて居りや、目こぼしなし、別に他に見當のつけやうもないんですから、兎も角巳代のいふことを信ずるより仕方がありません、幾度もいふことなんです、と言ひながら、腕の底に残つた二尾ばかりの鮎と一所に汗を飯の上へぶつかけたが、傍見をしいく、饒舌つて居たので、其のこぼれかゝつた指を嘗めて、

「何うです飯にしちや、日は長いが、まだ大分にありますから、」

「飯にするかな、否、何の路此處まで繰出したもんだから、突留めるまで行つて見るにや、見るとんだがね、此の通りだ。」と執事は伸び上る身で窓を見越す、ぶツかいたやうな大岩が、目の前に蟠り、流に押冠さつて、連つて、土塀を築いた土も留めず、草も置かず、日の光でキラ／＼して、唯見ると大なる炎の礎。

「何うです、此の上を何處までも傳はつて行くんだと言ふぢやありませんか。未だまあ流があるだけに、何うか慥うか別條はないやうなもの、野中でもあつて御覽なさい、如何なる英雄も

「忽ち卒倒だからね。媛神社の前から戶外通の本道を行けば、ずつと廻つて此の先田舎道三里は手酷しさ。」

「尤も些と位苦しくつたつて、河べりの間道を行くのです、軍曹、軍曹も矢張吶喊に御同意でせう。」

「然ればぢや、」と何を見るときもなく、顔を眞正面に据ゑて、軍曹は肩を揺つた。

「思ひがけず巳代が屹と面を上げた。活々としたものいひで、

「何うぞ近道に遊ばして下さいましな。」

「無論だよ。」と巡查は直に應じたが、執事は黙然として不言、窓ある方に傾けた髯の尖が、もう些と長くツて岩に觸れたら、ぢり／＼とでもいひさうに、頬を押へて大いに痺む。

「軍曹も生欠伸をして、諸臈をぐいと伸し、

「私も吶喊より、此の場で潔く討死ぢや。」

「飲足りますまい、」と執事は掌を下へ廻して、頤を空さまに搔撫でる。

二人の状を、巳代は手をついたまゝ、涼い目を睜つて見て居た。

「は、あ、戦は凡て輜重の如何にありぢやね。」

「何うだ、」

「何うだつて、仕様がありませんな、二人とも最う歩くのが、厭になつたんでせう、可い加減に草臥れた處へ、此の溫氣で、おまけに惡酒を呷つちや堪りつこはありやせんです。」
「いや、何うも全くあくみ切つた、大頭痛、戸外へ一寸顔を向けても焼灰をかぶるやうだ、恐しいこつた。」

「萬端私は最う討死ぢやよ。」と軍曹は蛇が落ちたやうにどたり仰向、臀と肩でどたくと、其の長蟲の涎る如く、頭押に巳代の方に擦り寄つて、

「酔うては枕すかい、蠅除に蚊帳を釣つて、此處へごろ寝は何うぢや。」

「敗軍となりましたな、私もこりや野武士に鎧を剥がれたくなつて來た。」

「巡査は茶を注ぎながら又苦笑。」

「手も着けられん、だから酒を飲むのはお止しなさいといつたのに、第一軍曹なんざ買つて出た役ではないんですか。」

「あの、皆さんに眞に濟みません、何でございますなら私一人で参りまして可いのでございます。」

「馬鹿なことを、き様に通げられて堪るもんか、一人で遣つて可いくらるなら、はじめから誰もついちやあ來んわ。詰らぬことを……ちよッ口だけでも餘計に利かすない。」と取つても附けない。

「いや、慙うしませう、此處等あとで又何して頂くとして、宜しいですか、いつもお世話になつ

てる僕だ。お二人で此處に休んでおいでなさるが可い、僕は何うせ其の用意をして來た位ですから、構ひません、一人で行きます、何うです、晝寝でもして、宜しいですか、緩り待つて居て貰ひませう。」

四

「巳代、き様飯を食はんのか。」

此處で一呼吸吐いた執事は、事が晝寝に極ると色を直して、良物優しく聲をかけた。

「私は澤山でございます。」

「澤山ぢやあない、食へ。あ、飯を食はんきや不可ん、此間から碌に頂かんぢやないか、途中で打倒れると、大變だ。」

「はい、否、氣が張つて居りますから、大丈夫でございますよ。」

「お茶漬にでもして、遣れるなら遣つたら可からう、話が極りや何でも疾いが可い。」

と巡查の、木偶が操られるやう差上げた手に、脱いで置いた上衣の袖を通すのを見て、巳代は早や身を起して、片膝を浮かしたが、指のさきを疊について一寸猶豫ふ。

「可いかな、と執事は顔を突出して、上目に見て念を入れる。」

「はい、」

と上の空で返事をしながら、巳代は淺葱の板じめ縮緬、黒緇子と打合せの帯の間から、懷紙を取出して、殆ど無意識であるかのやう、膝の上に差置くと、崩折れて坐つて歎息した。

巡査は其の肩のあたりに、丈高く突立つたが、跪いたる如き、可憐な姿を瞰下し、

「便所か、」といつて件の人だかりの、向う側の筵戸に屹と目をつけると、ごろた石に腰をかけて居た、一番近いのが逸疾く氣取つて、ついと何食はぬ顔して退る。

「おい、」

「い、え、冷水を少し頂かして下さいまし。」

「あ、水か、」

執事引取つて高らかに、

「水を持つて来い。」と呼んだ。

軒に吊した草鞋を楯に、朽ちた柱につかまつて、巳代の姿と座の状を、及腰に覗いて居た壯俊が、思はず、

「應、」と言ふと、ちやつと退つて、石高道を横飛びに、

「水ぢやとい、水ぢやとい、」と續ざまに傳へながら、筵戸の前なる八九人の中へ揉込むと、しば

らくして、何處をこつそり廻つたか、庭口から茶呑茶碗を、盆にも乗せず、亭主が未だ霽する濡手に据ゑて、ひよつこり土間へ出てお辭儀をして、

「ひやあ、水といはつせえて、ござりやすうでござりやすうか。」と密と出し、差置いて茫乎立つ。執事が横柄に、

「置いて行け。」

「ひやあ、」

「おい、水が來たぜ。」

「何うも、」といった巳代は、二つに開いた懷紙の中なる、女持の紙入を、じつと覗めて居るのであつた。

巡査は上から差覗いて、

「奥方から拜領のものに見えるね。」

これには答へず、

「眞個に何う遊ばしたんでせうねえ。」

ほろりとして、巳代は獨言のやうに言ひながら、小さな錫の蓋を開けて見た、器は錆びもせず、白く新しく、綺麗なのに、紫雪がもう些とばかりになつて居たから、白齒にかちりと當てて、口

に含んで、目を瞑つて仰向けに、島田の根をがつくりと、身に染むやうに半ば其の冷水を干して、扱帯の結目を押へながら、帯の間へ紙入を、鳩尾のあたりを掌で斜に壓したが、身を開いて立構へ、巡査の顔を見上げて待つ。

「可いか、」

「それでは執事さん、」

「心柄だ仕方がないわ。」

「危険なもんぢや、猫に鯉節ぢやからの、路で何をしよるか分らんが、と先に薬の薫つた時、フイと寝返りして匍匐になつて、頬杖をしてじろくくと巳代を購めて居た軍曹。

「君ぢやあるまいし。ふん、」

「何ぢやね、氣をつけんとな、其の騎兵が、令室について居るとすると、鐵砲の一件だがね、」と執事は立つて、送出して、眞面目である。

「敢て恐れんです。」といひながら、巡査は早や草履を結へつけて、土間に悄乎と立つて居る巳代を見て、眦を返して其の蝙蝠傘の、立かけてあるのに目をつけたが、
「そら、」といつて草鞋の爪先にかけて、ポンと蹴つた。

五

「翳したら可からう、おい、其の蝙蝠傘を擴げたら何うだ、そしてどんく歩行かんきや可かん。」と巡査は岩角を踏んで足踏をして、

「泣いてぢや困るぢやないか、何も人前があるから遣つたことを、僕が蹴つたものだからつて、翳せんことは無ささうなもんだな。」

追立てられて迎る巳代は、前に立つたまま、振向きもしないで、

「私や、私や何うせ罪人扱にされるんですから、持物や何か何うなすつたつて、些ともあの其を厭ひはしませんけれども、何も繩をつけなくつても可いぢやありませんか、ねえ。」と口惜しさうに足許に支かつた蝙蝠傘の象牙の柄に、乳の下を押當てるばかり、差俯向いて身を顫はす。弱腰にきり、と結んだ、黒縹子の帯の艶も、日に赤く見ゆるまで、日當りに、引添ふ巡査の身體だけ蔭になつた腰を屈めて、二筋の捕繩を、端短に取られて居る。

「誰も見ぢやあ居らんから構やせん。」と巡査は澄していつて、背後を振り返りながら玉なす額際の汗を拂つた。

日の稍傾く西の方に、人里は早や遙、劍村を出でしより、歩を移す二間に一尺、三間に五尺、

険しい路は次第高で、次から次の、岩から岩に攀づる都度、其の形怪に、其の状奇に、かよわい
巳代の疲れた姿の、顔蒼く、唇白く、全身に汗を被つたのが、高く岩の上に顯るゝに從うて、戸
は隠れ、扉は落ち、屋根は沈んで、やがて村を圍ふ樹の梢も低くなつて、既に半道ばかりを來た。
途すがら岩また岩、其の或者は灰色に、或は淡く赤く、或は薄く黄に、また綠に、樺に、紺青
に、ともすれば踵のあとを印するまで、灰を吹き出したるがあり、岸破と缺けて刻々に、眼を刺
す如き光を射出すのもあつた。此の色すべて墨を以て一刷はいたやうに沈んだのが、大崩に水に
落ち、飛々に流に散つて、倒にかへる泡白く、唯見る雪の塊を投げたやう、躍り起し、潛り抜け
て、岩と岩との間を狂奔して、低きに落つる水上の水は、恰も絶壁斷崖の飛瀑を足許に横たへた
るやう、流は唯一所に、凄しく、冷く、蒼く沸立つて、兩岸二筋の岩山が、碎けて流るゝかとあ
やまたるゝ。

腰繩の無慚な巳代は、現世のこととも思はぬけれども、年少き女の身、

「人が見ませんでしたつて、私やこんなにな爲れましたは、死ぬより辛うございますもの。」
巡查も太息を吐きながら、

「だからよ、一寸したことが死ぬより辛いんだ。き様、死ぬのを何とも思つて居ないから、それ
だから、縛つて附着いて行くんぢやあないか、人質にでもとられた氣で居るかして、今も何うだ、

申戲ではない、こんな所で、き様、ひどく倒れたつて尖がつた岩で胸をつくの、水中へなん
か飛込まれて堪るもんかい。」

「だつたつても、あなたが申戲ばかりなさるんですもの。」

「申戲ぢやないといふに分らない女だな。え、眞個なんだ、僕は、だから然うすりや可いぢや
ないか。」

巳代が遁げました、飛だことをした、ちえゝ！ 抜つたか何かで、空ッ惚けて歸つてさ、僕さ
へ承知なら憚ることはない、工合の可い所へお前さん隠れて居りや、當分の内だけで、後は何と
でもごまかせませさ。

然うすりやお前、奥様の在所が知れようが、知れまいが、僕の構つたこつちやない。地體ね、
巡查なんかして居るけれど、そりや時代といふもので、僕だつて譬ひ職掌であらうと、些あ懐工
合があらうと、人の細君のあとを探しに出るな役不足なんだぜ。

それもお巳代さんといふあてがあるから、此の難行ださ、察し給へ、おもだつた執事だの、汝
が好でやつて來た軍曹の奴が、劍村まででへだぶれて、恚う二人ばかりになるといふのが、既に
早や約束事と思ふがね。」

「や〜と氣取つて笑ひ、

「何うだね、誰が又こんな所へ来るもんか、大丈夫だよ。おい、」と背中をぐいと突く。

巳代は身を揉んで、

「存じませんよ。」

「ちよッ、凡そ其の強情だから、き様事こはしだ、別に然う敵役あつかひにせんでも可からう。

然う言つてるんぢやあないか、好んで奥様のあとを搜索するんではないッて、分らないな。え、お巳代さん、もと〜お邸の御門内に詰めて居る僕だから、豫て氣象も知つて居ようし、平生からだつて、何のことは分つてらあね。然もお前さんは伶俐だしさ。まあ、二人で氣の利いた二階でも借りようぢやないか、よ、おい、黙つて居ちや分らんよ、こら。」といきり立つて權柄づく。

唯最う口惜いから、

「厭ですよ！」

「うむ、勝手にしろ。」と礮と突くと、足も溜らず、巳代はうつむけに轉ぼうとして、危く支へた、胸の押に、白い柄が、つけもとからポキと折れて、蝙蝠傘は弓なりに曲つて岩へ、堪へず倒れよ

うとする身を、巡查は、綱を衝と張つて取留めた。

巳代は屹と振向いて、

「あなた、餘り非道だわ。」と呼吸の下で判然といふ。

「歩行け、恚なりや、ぼッ立てるばかりだからな。」と半ば威しつけて又薄笑す。

巳代は其の顔の筋の弛んだのをじつと見て居たが、うつとりした面に情なう微笑んで、

「關さん、」

「え、」と案外な形で、黙つて居て、しばらくして、

「關さんは大いに嬉しい、近頃にないね、凡て旦那だの、あなただから怨んで居たがね、」

「そりや何ですわ、人を懲役扱ひになさるからですよ。」

「君の心から萬やむを得んからさ、何か、其處で、其の何か關さんなるものに御用かね。」

「あの私は眞個のことを申しますがね、今のやうな無理なことをなさるのなら、殺されても厭で

ございますけれど、」

ほッと切ない呼吸して、

「あの何ですよ、私もお願ひがござんす、」

「へ、」

「否、何ですがね、それを聞いて下さいますか。」
「勿論」と稍激して言つた。

「外のことぢやありません、後生ですから。私は屹度此の前へ参りましたら、令室にお目に懸るでせうと思ひますよ。」

「何うも然うらしいよ。其處で、」

「私は最うくお懐しくつて、一目お顔を見ません内は、死んでも死切れませんやうな気がします。それでですから、恚やつてひどい路を行いますのも、些とも苦にはしませんけれど、もし彼方へ着いて奥様がおいで遊ばしても、あなたお役目でせうけれど、ひよつとしてお邸へ歸りたくないとおつしやつたら、何うぞ、大目に見てあげて下さいな。然うすりや私は何なにでもなりませわ。」と其の涼しい目をぱつちりと、いつはりなき心の中の、瞳を通して見透さるゝやうに、目を睜つていつた。よし其は兎も角も、恚る手弱女の身ひとつを、活殺乃公の手裡にありと、巡査は一呑にした色見えて、

「其の時の事さ、先づ承知だから、奥様の事は心配しないでも可い、しかしお巳代さん、お前の心意氣一つだからね。」

「はい。」

「最う一のしだ、あゝ、遣切れない。」

「殿方の癖に何でございますね、私さへそんなぢやないのですもの、」巳代は前途の崖を仰ぎ見つつ、ものの勇ましげに立直つたが、フト見廻して便なささう。

「や、氣の毒なことをした。何またいくらも僕が杖のかはりになるよ。」

「何うぞそれよりか、ひよつとかして蛇が出ましたら助けて下さいまし、私はたゞそれが思ひでございます。」

「蛇か、うむ、蛇はうざく居る處だ、然も媛神社の女神様のつかはしめだと言つて、色の眞白なのがすらくさ、向う岸から一目見た日にや、お前さんの立つて居る其の岩だつて、根の方には繋つてるんだ。」

「えゝ！」と思はず寄添ふ。

「おつと、其心意氣、」と巡査は早速に手を取つたが、猶且つ繩尻を放さうとはせぬ。

七

やがて蛇紋岩といふのであらう、層状をなして大いなる暗綠色の丘の上に、先づ巳代の、疲れてなえたやうな單衣のひだが、岩に映つて、色蒼く、雪なす爪先に血さへ染んで、蹠踉いて顯れ

た、續いて巡查。

時に、途すがらものに遮られて見えなかつた。朝まだきから正午をかけて、過り来た沿岸の村又村は其の森ばかりちらほらと、數も七ツ、遠き方は一面に荒海の浪を描いて、起伏凹凸里餘に渡る、湯の山の引いた幕の裾に、海松房の如き隈をなして、迎れば村はづれと、村はづれと、嘖と、又嘖と嘖と劍村まで縦に、眞直に連つて居るやうであつたのが、今は七角に角立つてギツクりと七處。

後朝川の流の末、朝六ツ橋を架けたるあたりは、市の南の端から第一着の、懸村のさきに當るのであるから、舊來た路は爰に於て、恰も前途なる、湯の山の背後へ廻る姿になるので、環を描いて最も遠い、其の懸村が目の下に最も近く、近き程の劍村が、最も遠い處に瞰下さる。

岩角に継り、此の間道を攀づる者の、ひらぎの枝を渡るが如き一條の險路は、谷川ともにも足許を低きに流れて、じりりと蟬の聲の、焦げつくやうな氣勢のする、見ゆる限りの市も村も、コンパスの軸のくるりと廻つて、人は唯これ居ながらにして、湯の山の入口といふ千枚岩に近づき寄るやう、一連の地盤は山を乗せて、次第に目前に來るのである。

俗に青鬼と名づけて恐る、此の蛇紋岩の頂にイんで、土地の變化の凄じさに、見る、くるめいて、ふらふらとした巳代は、あはれ令室も憊る道をと、一度は思つたが、殆ど我を忘れ

た後は、自ら足の運ぶとも覺えず。

遠景を點じた村々の七ツの森は、一步を前に運ぶに連れて、直ちに灰色の屏風に隠れた。流の面は忽ち低く、岩は益々大いに、山は愈々高く、島田のびんのほつれたま、爪尖に血を染めたま、巳代の姿は小さく、日除の白布横ざまに、繩尻を取つたま、脊の高い巡查の身も、岩の破目に吸はる、ばかり、細く且つ微なるものになると、八ツ半なるべし、白日輪、崎嶇たる對岸の頂に落ちて、一山颯と火の如く、岩々は色鮮かに、緑と黄と相交り、朱と青と相混じ、灰

なる墨なると、水に宿つて倒也。蓋し色彩を施したる又これ山門の如きもの、迎り抜けると、路稍低くなだらかに、水も練絹のすらくとして、一町ばかり、物靜に、兩岸左右に廣く開いて、山懐に楕圓形の谷一ツ縦に抱ける姿、頂は兩方より特に天高く相接して、日の光も遮らず、冷い風も颯と吹く、此の突あたりの山の狭間、見る目には人一人身を横に通る位、纜に明く開いたのが、築き成せる巖の城門、湯の山の入口の千枚岩といふのである。

いま潛り抜けた眩きばかりの岩の木戸と、前途を塞いだ千枚岩と、ものの靜かに安かなるは、纜に此の谷間ばかり。

石火矢幾門つるべ打つ、大叫喚の水の聲は、千枚岩の背後に聞えて、おどろくと虚空に響き、

そもいかなる岩、いかなる瀧、いかなる瀬とも計り知られず。
冷かに水氣を含んだ、風また一陣吹添ふ折から、裾袂打磨く、巳代を背後から追立てて、此の谷の半ばを過ぎた、湯の山の門に近く、針よりも細く小さき巡査は、山のあまりの厳しさを、仰いで、退つて、茫然として歩を留めた。巳代は人心地もなく首低れたるのみ。

八

「あゝ、姉さん一寸、」

一寸お待ちと清しい聲、岩清水の點滴を湛へた、路傍の石の窪に、我にもあらず跪ついで、口先づ自然の靈藥を飲まうとして、地に兩手を絶つた巳代、

「はい」といつたがうろ／＼して、今呼んだのは若い婦人、と心付くと、つむりから氷を浴びたやうに悚然とした。

怒る言を此處に聞くべき數でない。

身を緊めて、小さくなつて、竦むと又聲をかけて、

「其を飲んぢやあ不可いよ。」といふはしに、裳の音すら／＼と、廻つて左手に亘む様子に、巳代は恐る／＼顔を上げて一目見てハツとした、けれども尋ぬる令室より、心ばかり小造りで、年紀

も二ツ三ツ敷へて少ない、然もおもかげの稍圓いのが、目立つて少く、目のぱつちりと大きい、眉の鮮かな、鼻筋の通つた、頬の薄い、撫肩の背後へ、黒髪を颯と流したのが、紫の襟を、深く合せ、黄昏に見る藤の花を、さながらの單の衣、同一色の稍薄い無地の扱帯を無造作に纏うたが、其の爪はづれの尋常さ、手を懷中に差入れた、右手の膨らかな、雪の腕の、二の腕あたり惜氣もなう、斜めに片頬にかけて半面の眉、其半ば隠る、まで、しなやかにかざした手に、洗髪の艶の映る、そらだきの薫を籠めて、眞白な手拭で、岩のひだに碎けて射返す、まばゆき夕日影を遮りながら、巳代を伏目にうつむき見て、悠然として立つたる風采、見上げて佛をうかぶ身には、ひたすら神々しいばかりであつた。

言ふべからざる威に打たれて、巳代は思はず手をついたが、求むれば與へられ、取絶れば抱寄せられ、悲しめば慰さめられ、詫ぶれば許さる、思かしたので、

「何うぞ御免遊ばして下さいまし、取のぼせて居りましたものでございますから、其に切なくつてなりませんので、つい、お断り申しますのも、忘れまして済みません。」

麗人はこれを聞くと、片足をあとに引き、胸をや、反して、莞爾として、

「何をいふのだらう、こんな處にある清水を、神様のものだつて、鳥さへ、獸さへ、飲みたければ来て勝手にたべますよ。他愛のない、まあ、可愛らしい人だねえ。」といふ人の、却つて尊いば

かりのあどけなさ。

巳代は一層、

「恐入ります。」

「然うぢやあないの、今此の水でね、私が髪を洗つたから、それだから飲むのはお止しといったの、咎めたのではないのだよ。」

「え、お髪をお洗ひ遊ばして、それなら結構でございます、一口頂かして下さいまし。」

「お止しなさい、悪いから、ね、それにどろろ流れるんだと可いけれど、こぼれるほど湧きかはるのぢやあないのだから、」

「否、」

「あれ、それを飲むと、お前、お腹が大きくなりますよ。」と世にも氣高う微笑みながら、力なげな、ものあはれな、恥かしさうな、巳代の顔をとみかうみて、

「大層苦しさうでおいでだよ、そしてお前、よくこんな處へ來られたことね。」

「はい。」

「一人かい。」

「い、え、一人になりましたのでございます。劍村と申します處までは三人附絡つて参りまして、

それからは、一人だけつい此の四五町さきの、恐ろしい大きな岩が、門のやうになつて居ります處まで、放れないでついて來ました、私は何うせはじめから、死にましても可いつもりで参りましたけれども、それでさへ彼處に入りますのが恐ろしかったのでございます。」と巳代は語りかけて呼吸をつく。

九

巳代が俯向いて一呼吸つく、砂埃には塗れたけれども、媚めかしい帯の間に、蛇が占めて殺すやう、繩が絡んで、するり一條。

瞳を見据ゑて麗人は、其の美しい眉を擧めたが、衝と寄り、翳して居た手拭で、上下に軽く塵を拂ひながら、左右の手で結目を解いて、

「お前、縛られておいでかい。」

「あれ、お手が汚れますわ。」と吃驚して心付いて、膝ざり出でて取らうとする。

「大事なよ。」と麗人は手早く揉んで丸げ、一卷の塊にして、重のついたを、振り返りざまに丁と後へ、はらりと解けながら、此の邊また靜に流るゝ、谷川の空に翻つた。

見も返らず、其の手拭の片端を唇に銜へて掌を扱いて拭き、

「何故、何うしてこんなにされたの。」

巳代は伏拜まぬばかりにして、

「お嬉しう存じます、其の繩尻を取りまして、巡査が一人、彼處まで参りましたのでございます。」

「おやく、此處へ、流罪ものにもする氣が知ら、」

「然うではないのでございますが、」と稍人心地に復したれば、姫神こにおはしますと、心に念じてうら問ふやうに、

「此處は、あの、何と申します處でございませう。」

「湯の山といひますよ。」

「それでは、湯湧谷と申しますのは、」

「それは此の崖の上、」と麗人は立つたま、巳代は下に居て一所に空。

崖の上と口にこそ言へ、仰ぐとうつとりと心ゆくやう、世を放れて、天に聳えた、其根なる、こゝに清水の湧く上には、里の夕に立のぼる煙の如く、煙に似て然も寒さうな、本は薄く、末濃の白雲岩間々々に湧き立つて、ちらりと、低きは淀み、上を行くのは流るゝやうに、蒼空に入亂れて飛ぶ、飛ぶ、飛ぶ。

「もし、彼處へは上れませうか、道の酷いのは辛抱をいたしましても、参つて悪い處でございま

して、御罰でも受けましたら何うしませう。今も申しました、其の巡査は、あの石の門から、中へ入らうといたしますと、此の雲でございませう。それとも温泉がございませうなら、其の湯氣でございませう、急に霧がか、りましたやうに、四方の眞黒な岩山が残らず白くなつて、一杯に雲がか、つたかと思ひますと一ツ、恐しい鐵砲の音がしましたが、其時手を放してうしろへ倒れて了ひましたのでございませう。私は夢中で駈出して参りました、急な流がございまして、それからあとはこんなになりなりましたので、まあ、可かつたと存じましたが、何分切なくつてなりませので、丁ど此處に水がございましてから、飛つくやうに飲みたくなつたのでございませう。覺悟はして居りましたけれども、先刻の鐵砲の音は、山のお祟りかと存じます、でも何ういたしましても湯湧谷まで参りたいのでございませうが、峠とは存じません、谷といひますから、もうこれからは、坂がありましたら下りるのでせうと安心をいたしましたのに、」

麗人は聞いて、頷いて、

「此處は水の流れる谷、此の上の湯の湧く處が、矢張谷、峠はすつと上にあるが、劍村の社の方から本街道を廻つて行くとね、峠は路が遠いばかりで、行くのにはやさしいさうだよ。湯湧谷が一番、行くのに六かしい、何、祟りも何もありませんよ。此の水も同一で、鳥獸も住むものを、人が行つて悪いといふことはないのだけれど、此の通りの切立だから、」

と巳代の顔をじつと見て、
「そして何か用なのかい。」

十

「はい御主人様を尋ねて参りますのでございます。」

婦人の、

「はい、」

「私くらゐな脊恰好、」

「え、御存じで在らつしやいますか、」

「そして此間爺やから白い兔を貰つた方、」

「まあ！」

「そんなら七日の晩から行方が分らなくおなりだらう、と打明けた中にも恚うとは思はるゝまで、かくさぬもののいひやうであつた。」

此方は限なく力を得て、

「ちやうど朝六ツのお邸に、六百里とやら放れました、遠方の都からお出で遊ばした大切なお客

がございまして、宵闇に花火の上りました夜でございました。」

「お雪さんとおつしやつたね、令室は、座敷も庭も人いきれがして、煩いと、崖の樹の間から忍んで出て、裏手の、此の流の末だねえ、後朝川の岸が、幸ひ暗、人に見つからないから隠れて涼んでおいでだった。」

巳代は此の人の口から恚ることを聞くのさへ、早や訝しさに馴れたれば、然までには怪しみます、
「何うして御存じでございますえ。」

「山番の爺やが話したもの、こん度のことははじめから爺やがかり合だから皆知つてるよ。」

「お、其の雪賣のお爺さんは、此邊にお見えなさるのではございせんか。」

「今日は、また市へ行きましたよ。」

「然やうでございますか、それでは貴女がもしお聞き遊ばして、御存じでございますなら、何うぞ令室のことをお聞かせ遊ばして下さいまし。あの、其の日は朝も早くから、お邸中混雑いたしまして、人手の多い内ではございますけれど、殿様が又お客様へ御馳走に、奥、奥と、四阿屋からも、庭からも、お茶室からも、お呼立てなさいますものですから、極暑の折でございませう、びつしより汗におなり遊ばして、お召ものは絞るやう、三度お着換へなさいました位、日が暮れましてから湯にお入り遊ばして、さつと流しておゆかたかけ、其處までは手が届きませんで、灯

もつきませんお部屋の縁に立つて、やうく汗をお入れ遊ばすと、……とやら、……とやら、……とやら、……とやら、わあ〜といふ客の騒、あの聲には逆上ると、耳をお塞ぎ遊ばす處を、又續けざまに殿様がお呼立てぢやございませんか。

私もお客たちに申戯をされますから、令室のお世話を楯に、お袖にかくれて休んで居りました。

巳代私は最う厭だよ、とおつしやつて、おむづかり遊ばします。

御主人の蔭言を申すやうで濟みませんが、殿様は原お邸の御養子でございます所爲か、故とらしい。然うでなくつては、御容色も、御心立も、其はもう、奥様とは比べものになりません、お妾を一人ならず、二人も三人も御寵愛なさいます上、時々はお邸へお連込みで、御客様あつかひ床をうしろにお二方、奥様は下手へ下つて御挨拶をなさいます。私の方が口惜しがつて、蔭で泣きますものですから、そんな時は巳代とおつしやらす、御自分お茶を注いで、妾面のお給仕をなさいますのでございます。家附の女だつて、主人の權式は此通りと、奉公人にまで見得をなさる、そんな殿様をお持ち遊ばした、御兩親のない奥様は、お可哀相でなりません。

巳代は袂で目を拭ひ、

「それさへ、つひしか厭な顔もなさいません。其がなほお氣に入らず、雪は何故愔氣をせんと、中の悪い私におつしやつた事さへございます。然うしちや一人で怒つて、主人が妾とちぐるふ

のを見て、人間らしい顔もせぬのは、侮つて、馬鹿にし切つて、路傍の犬猫あつかひにしをるからだ。養子には何がある、早や密夫でもあるであらう、汝、今に見ろ、と恚うなんでございますのに、お取巻が大勢また、奥様には邪慳なものばかり。

何うするものでございます、御自分が悪さをして、愔氣をせんのは輕蔑ぢや、可愛いと思はぬからだ、他に男があるのだと、そんなのを何うしませう、」

麗人は黙つて聞いて居たが、冷やかなる笑を含んで、

「厄介な男だこと。」

十一

「否、それでも奥様は何とも思ひはなさいません、お人柄が立勝つて旦那様とは較べものになりませんのでございますから、苛め殺すやうなことをいつて暴れましても、まるで摩耶夫人様のおかけもの前で、酔ばらひがふんぞつて、あの髻だらけな口から、沫泡を吹いて居りますとしか、見えませんくらの、氣にもおかけ遊ばさぬ。

其様方でございますのに、身震を遊ばすほど、厭だとおつしやつたのでございます。

お見兼ね申しまして、私が、それではそつと裏門から出てお涼みなすつて在らつしやいまし。

あんな處でもお邸内でございますから、私どもはそんなにも思ひませんけれど、夫婦松の朱塗の古家あたりから、土塀の際は、晝間でも人が通りませんから、花火見物に、どんなに人だかりがして居ませうとも、其は橋の上まででございます。内の者も夜分では氣が付きませんでございます。せうと、お腰かけの床几を取りに行きたくも、見付かりませうと存じまして、芍薬の鉢植の並んで居りましたのを下しまして、其の臺を持つて、おともをして、やうく裏口へお出し申しました。

蚊が居りますから引返して、團扇と、お煙草を持つて参りますと、途中から飛つきましたか、それとも、お部屋のお籠の中に、其の日の取込ですから入れてお置き遊ばしたのを、連れておいでになりましたか、十日ばかり前から其はもう、ひとつ寝をなさいませんばかり、お子様はなし、猫はお嫌ひ、白や、白やおつしやつた、あの、お爺さんにおねだりなさいました、兎を丁と膝に抱いて在らつしやいますから、い、お相手でございます、客が静まりましてから、お迎ひに参ります。それまでは何でも申してと、私はお身體の入りますだけ、銅張の門を細くあけて、お手傳に引返しました。巳代頼んだよ、とおつしやつて、嬉しさうに、煙管をお取り遊ばした、其のお聲も、お姿も、納めになりましたのでございます。

さあ、十時過ぎます頃から、お邸中、引くりかへりますやうな大騒ぎ。

勿體ない、日頃姉妹のやうにして、可愛がつて下さいました、直ぐに私を縛りまして、何でも知つて居るに違ひないと、寄つて集つて、ぶつやら、蹴るやら、

「あゝ、皆知つて居る、可哀さうに何にも知らないものを何うだらう、おさへ人がないと思つて、酷いことをする、今聞いた其お客といふのは、未だ朝六ツのお邸に逗留して居ませうね、一ツはそれへの御馳走にお前を庭前へなんか引出したのだよ、おともの中に赭ら顔の肥つた軍曹が居るだらう、皆ね、磔のお仕置がなくなつたのを、残念だと思ふ人達さ。」

巳代に語るともなき狀にて、麗人は手拭を確乎と取つて、青眼はたと凄かりしが、再び、

「よく此處まで來られたねえ、私が聞いた其のお雪さんのことを、今話して聞かせませうが、」
此の時、空の色蒼く澄んで、湧き出づる山氣收まり、夕日の名残の紅を劃つて、白き一帯の雲となつた、夏の日もや、暮れかゝる、湯の山の岩の肌は、濡れたる牛の腹の如く、しつとりとして冷えるのであつた。

「池へ釣棹を置いて來た、丁ど釣れさかる時分になつたから、大儀だけれどもね、もう些とさきまで來ておくれ、あの、慙う切立てたやうな四角な大岩の角を向うへ曲ると、直なんだよ。お前歩行けようか、私は、よく話がお出來だと思ふ位だよ、身體は大抵ぢやあるまいのに、」

「はい、私も先刻此の水をのまうと存じました時分は、もうく目もくらむやうでございました

が、あなたのお姿を見ましてから、忘れたやうになりました、

「何ともないかい。」

「唯、自分の身體ではないやうに思ひます。それに節々と、此の胸の處が些と痛いやうでござい
ますが、心は確でございますよ。」

「何うしてお飯も咽喉へは通らないで、折檻に遇つた上、此處とは違つて大熱の路を歩行いて來
て、唯さへ弱い者が何でお前、もうね、身體は誰か預つて置いたものがあるのだから、今返さし
てあげませう。」

と鷹揚にいつて、袖を合せた。

「其の水の中へ両手をお入れ。」

十二

「あゝ、然うやつて、」

命ぜらるゝまゝに、巳代は背後向になつて手を浸した、石清水はひやりと氷よりも冷かに、血
が凍るやうなので、思はず肩をすくめて手を引きさうにした。

「じつと堪へておいでなさい。」

と制し留められたので、齒をくひしばると、程なく冷さに馴れて冷々と、心爽かになるのみな
らず、二重の衣を隔つるばかり、背に近々とイむ人の、美しく尊き氣勢、膚に通じ、骨に染みて、
巳代はうごかない水面を、恍惚として見詰めて居ると、蔽になつた人の姿は、肩越に澄み切つた
底に深く映つて、こゝで洗つたといふ黒髪は、濃かに其の薄い頬を籠めて、然も水中に、顔のや
や蒼く、夜の色も切に迫つて、藤紫の衣も褪せ、扱帯の色も消えがてに、影、淡く薄くなつたと
見ると、引合せた、袖を洩れる、眞白な手拭は、こはいかに見覺えた兎也矣。

「あれ、と身を起して衝と立つて振返ると、小造なものも、少いのも、活々したのも、舊の如く、
「もう可いから此方へ、」と、爪先に蔽のある浅い草鞋、春の雪のこぼるゝさまで、蓮歩を移す人
に肖ない、大きさが過ぎて見ゆ。

風そよぎ、棲さきの揺るゝが如く前に立つて、凡そ道のほど十町ばかり、開いた扇の親骨の其
一ツについて進むやう、湯湧谷の絶壁に袖摺り連る細道は、横に岩一ツ、岩二ツ、四ツを隔て、
五ツを隔てて、今擬へた親骨の、其一本の遠のく如く、末ひろがりに歩一歩、谷川の流と次第に
放れて、清風おもてを打つかとすれば、對岸早く一星輝き、弓形に夕の靄をかけて、縹渺として
周圍一里、白銀の池の汀に着いた。巳代は一目見て市を去ること、百里なるべく推したが。
「お前寒くはないかい。とはじめて振向いていつたのは、目のふちもほんのりと即ち活きたる人

き魚、其の形鮎に似て全身鱗滑かに、腹は丹の如く紅に、背は濃き緑に、其の紅を交へて、細き縞あり、頤また朱く、切り果てぬ雫は、點々緑に紅に、岩に滴るかと思ふばかり、艶なる状の醜つた時、巳代は翡翠が飛んだのだと思つた。

「まあ、何といふ美しい」と我を忘れて差覗く、籠に入れたのを齊しく見て、

「綺麗ね。」

「これは召食りますのでございますか。」

「應、否、爺やに遣るの、爺やが市に持つて行つて、兎でない、又これを欲しがる婦人に賣るの。」

「え、！」

「然うすると矢張此處へ来て、お友達になりますよ。澤山取れるから入るだけ取ると、あとで姉さんにもあげませうか。そしてね、お前の御主人の、あの、お雪さんはね、」

麗人は再び針を下したが、事もなげに片足を水の上に投げ出して、折敷いた片膝に、釣棹の端を壓へ、片手を背後につくと、右手を上げて形して、

「恚うやつて、煙草をのみながら、お前が据ゑたといふ芍薬の臺に、腰をかけてね、兎を抱いて居る内に、其處でさへ心持の可いほど邸が煩くなるにつけて、後朝川の水上の、此の湯の山の奥が、何となく可羨しくおなりなんだよ。」

其處へ行合せたのが、橋向うに家を借りて居る、つい去年の夏、此の近道を通つて、故郷へ歸つた一人の騎兵なんだつて、爺やが話したつて。

まあ、お聞き。

其の人は彼の六百里隔つた都の兵營で、射的の名人だつたさうだけれど、或時上官が部下のものを集めて、……尋ねたことがあつたさうな。唯戦のな
いのが残念でございます。口で申すよりは、と皆が答へたのに、其の騎兵は言つたことが悪かつた。」

少時口を結んで、やがて聲靜に、

「私は唯兇器の動かないことを望みます、其は私が大切に思ひます或女性が、……」

と膝の上にしかと十指を組んだ、細き指の尖は皆動いて、麗人は時に大空の星を仰いだが、面の色も蒼然と、

「然う言ひも切らない内に、あの其の騎兵の身體は大地に倒れて、三人の三ツの靴で踏まれたさうだよ。さあ、それからは、軍隊への見せしめと言つて、……
……酷いことの烈しい時は、倒にして打つたさうな。牢へ入れたことが、十幾度、」

物凄きまできら／＼と、瞳に星の映つたのは、天にあこがる、涙であつた。
「漏れ聞いた其の婦人は、三世に一度の果報を棄てて、何時までも／＼、行方の知れない身となつたんだつて。」

世には未練な人があつて、其の行方を捜さうと、心あたりを尋ねに歩行く風説がある、お前の邸の客といふのも、そんな人かも知れないよ。」と冷かに一笑す。巳代は思ひ當ることがあつた、客といふは、………都に名高き侯爵の姫を娶らうとして、志を得なかつた人物だといふから。

十四

「お前も知つておいでだらう、其の騎兵の内も舊立派な豪家であつたのが、然うやつて罪に罪をかさねたので、十年越、親はなし、留守を守るものもなし、親類縁者も悪いものばかり寄つたものだから、田畑も家も人手に渡つて、やう／＼去年。」

ある方の御覽の時、射的の手柄で許されたが、故郷に歸つても住む家もないものだから、あゝやつて人の二階に、腕車を曳いて暮して居ると、此間途中で逢つた、お前の邸の逗留客に大勢おとものある中に、軍曹が一人居るね。」

其が忘れもしないで顔を見ると、呀！ 此の卑怯者、未だ生きて居るかと言つて、足をひとつ蹴つたんださうだよ。」

かた唾を呑むのみ瞻つて、口も利けず謹んで居た巳代は漸々、
「え、其は私も存じて居ります、園遊會とやら御馳走のありました其の當日、お庭の池のふちの大きな藤棚の下に、椅子を置いて、旦那様とお客様と、おとも其の軍曹とが、卓子を取巻いて、麥酒を召上つて在らつしやる、奥様も椅子にかけてお客の傍へ引寄せられて、旦那様の申つけでございませうから、お酌をさせられて術なさうにしておいで遊ばした。私は軍曹の傍に立たせられて居りました時、手柄さうに、隊に居た、名は言はんでも卑怯者だといへば分る、車夫をして居るのに出つくはしたから、向脛を蹴折つてやつた。それは愉快ぢや、とお客と旦那とが申しますとね、戸長さんの、區役所のお役人、学校の教員さんの、皆折をさげながら、うろ／＼背後の方を取巻いて居りましたつけ、一時にどツと言つて、軍曹萬歳とやら申しました。あんな頓興な聲はお池の金魚だつて呆れます、岸の方に居た鴛鴦がさつさと遁げたのでございませうもの。
可哀さうに、と奥様が、滅多に口をお利きなさらないのに、餘りだと思し召したか、然うおつしやいますとね、お客様が罰の當つた、突然奥様のお手をつかんで、君の細君にも似合はんことをいふ、こりや不可ん、三年ばかり我に貸さんか、心を撓め直して遣らうと申しました、内々お

べつかに奥様をお貸しなさいますやうな思召でもあつたのでございませう、御自分の奥様の手を握られたのに、厭な顔もなさいませんで、構はん、とおつしやいましたではございませんか。

直ぐにお立ちになりますと、又しても奥、奥と、私はもう、」

「あ、然うだらう、お雪さんは唯でさへ心の動いて居る處へ、其の騎兵がね。

其時は足に繻帶をして居たさうだよ。

痛めては稼ぎにも出られず、醫者にかゝることも出来まいと、先に榮えて居た頃の、檀那寺の

お上人が貢いだお錢で、療治をしながら、唯居るでもあるまいと、古浴衣に帯なぞね、汗になつ

て汚れたのを、小桶に入れて、男だから、お前の内の火花が濟んで、橋の袂も、橋の上も、人が

皆引込んだ時分に、婦人たちのするやうに、後朝川の柳の下で洗はうと、痛い足を引摺つて、橋

手前の、あの、魚屋の前を通ると、フト賣残つた鮎があつたとさ。

値を聞くと、魚屋が、これは鮎といふものぢや、車夫の菜にはならぬ、安くしてこれをやらう、

何といふか名は知らぬが、美しくつて生きて居ると、擲出して其の人の目の前へ突出したのが、

姉さん、此の魚なの、と籠の中を指示した、縁に朱の入つた魚は、麗人の早業に、既に三尾まで

横たはつて居たのである。

「腹も立てないでね、大人しく、小桶の中に受け入れて、しよんぼりと橋へ来て、而して下りよ

うとすると、あのね、葉柳の枝が茂つて、ひた／＼と淺瀬に觸るのが、まるで人が居て、晝間とおなじ洗ものをして居るやうに聞えたの。

此の音は向う岸まで響いて、お雪さんも耳を澄して居た。

處へ桶を抱へてね、遠慮深い人だから、柳の下は邪魔にならうと、流へ下りる石段は、お前の

邸の裏にもあらう、其處でと思つて渡つて行つたんだよ。

(もし)

男は吃驚して見ると暗夜なのに、後朝川の川水が、縁のある目に映したのか、美しい奥様だもんだから、唯恐入つて不遠慮の詫をした。」

十五

「いゝえ、お通り遊ばしたのを、お咎め申したのではないのでございます。殿方の身でお氣の毒な、私が一寸すゝぎ出してあげませうと、人がことわるとは思はぬほど、眞心で然う言つて、直ぐに煙管を置いて、兎を膝からお下しだもんだから、男は思ひも寄らないことで、唯うろたへるのを。

何も御遠慮遊ばすには及びません、お腹をお立てなさいましては悪うございますけれど、水

の初一念も仇にはならず。

といつて、親よりも、兄弟よりも、意中の人よりも一層懐しく慕しい、令室に、唯一目の、其分にも意中の人のある身であつた。

私は恚う暢氣だけれど、お雪さんは未だ浮世のことが胸にあるから、歸るお前には逢はされな
い、居るつもりなら介抱をしてあげておくれ、何うするの、姉さん、と優しいながら屹として、
いふ言皆誑の如く、動かし難う取らるゝので、巳代は口籠つて、とつおいつ。
一途に思詰めては來たけれども、再び里に出ぬことは決しなかつた、先刻にはものに激したれ
ば、死を急いで顧みなかつたが、渠には親も兄弟もあつて、なほ且つ人の情を汲知るものの、自
分にも意中の人のある身であつた。

騎兵が一人と、其の鐵砲が一挺、お雪さんと一所に亡くなつたことを知つて居ては、迎も此の邊
へは寄りつかねぬ、千枚岩の入口で、お前其の音を聞いたのねえ。

二人は無事でおいでだから、些とも案じないが可い、是から里へ歸るのなら、可哀さうに、お
前の身體に迷惑のかゝらないやうにして上げませう。それとも、最う歸らないで、此處に私たち
と居る氣なら、お雪さんに逢はせた上、温泉に入つたり、釣をしたり、月夜には劍村まで岩の上
を歩行いたり、獸を撃つたり、鳥を獲つたり、皆で色々なことをして遊びませう。
何うするの。

あれ、何うしませう粗相をと、跣足のま、駆け上つて、川沿に下の方へ浴衣を追ひかけておい
でだから、わく／＼して立つて居た、男も跟いて飛出して、橋詰から五六町。流は早し、たより
は悪し、迎もとあきらめて、お雪さんも石のやうに立つてお了ひ。

わづかの間にお前の邸の、あの髯が、方々捜して歩行いたらう、酔つちやあ居るしよろ／＼と、
裏口から出て來たのがお雪さんの腰を懸けて居た、芍薬の臺と煙草盆、見覺のある煙管ばかり、
赫となつて、威さうとでも思つたか、煙草盆ぐるみ其の臺を、石垣下へ蹴落して、庭へ荒込むと
突然凄い音をさして、他に類のないほど嚴乘な銅張のあの扉を、唯、天に響けとドンと閉めた。
姉さん、分つたかい、其あとへ引返した二人の人は、何うするとお思ひだい、叢に密んで待つ
た、兎が袖に飛繼つて、もう死なうと覺悟をなすつたお雪さんに何んなことを教へたらう。
ひる頃休んだ劍村の茶店から此方へ、軍曹は來ることが出來なかつたことを覺えて居ませう、

いぢりがして見たう存じますから、宜しくばお貸しなすつてと、然うまで言はれるのに斷りかね
て、おづ／＼渡したのを取つて、段を下りて、まあ、お生れなすつてからはじめてのお洗濯。
桶の中からさつきのお魚が、ばつと水へ、鱗がきら／＼と光つたのに、お驚きの拍子、浴衣が
一枚手にも留まらないで流れたの、薄汚れたのを一枚なんぞ、紹や紗に代へても金ならばと、思
ふやうな人ではない。

心一ツに定めかねて、唯差うつむいてとむねをついて、氣をあせる恰も其時。

老鶯がほうほけきよーほうほけきよーと前後二聲、優しき音を此の仙境に入れたのを聞いた。

其の鶯の人里戀しく、身はたゞ家路を數千里の外に隔つやう覺ゆるにつけても、そゞろに涙さ

しぐまれて、嗚咽してものさへ得言はず。

其志既に傾けりと、星を宿す目に認めて、頷いて、

「あゝ、可し、可し、案じずにお歸り、」と言ふ聲怒を帯びて聞えたが、

「もう來ちやならないよ。」と氣色や、變りつゝ、幻の一際艶に、氣高く、尊く、星を頂いて衝と

立つた、裳を裏む夜の色、大池に背さしむけ、釣棹のさきをかへして、湯湧谷を切立ての、宇宙

を蔽うて仄かに黒き、巖の板をコトコトと叩いて、

「爺や、爺や、爺や、」と三聲。

「應、」と地の底に響く聲、巖横さまに颯と開けて、雪賣の親仁のつしりと出て、麗人の足許にう

つ向き伏したる、巳代の帯際を其まゝ抱へて、再びすばと巖に消えた。

巳代は抱かれたと思ふと同時に、地の上に差置かれたが、目を開いて、後朝川の岸、事へる邸

の土塀の際、彼の夫婦松の根なる處に、女仙に侍して我ながら骨は玉に、膚は氷に化せしと思つ

た一瞬時前の己に似ず、身の内ゆるみ、顔あつく、耳ほてり、手足はしと汗ばんで、衣は破れ、

袖は裂け、帯に泥つき、裳亂れて、引纏うたる紅の、取亂して淺ましく、倒れて居た膝を見て、身を恥ぢながら茫然となる。

背後から、しびれよとばかり、脊筋のあたりを丁と打つて、

「畜生め、何處へ、」といったのは、意地悪い年増の女中であつた。

これより前、自然の冷に呼吸を返して、千枚岩から、劍村に引返した巡查は、土間にのめる、

と蟲の呼吸。

やがて言ふことが夥しい、何程の人數籠りしやらむ、四邊を蔽ふ雲の中に、つるべ打つ鐵砲其の幾挺なるを計り難く、人質同然の巳代をさへ奪取られをはんぬと。

執事と軍曹これに聞怖をして、兩名、巡查を助けて引返し、朝六つの邸の廣庭に畏つて、復命

すると、驚破もりかへせ、繰出せと、八方へ分れた人數一絡にして、四五十人、路すがら人夫を

狩れやで、犇めいて、裏表の門から渦いて出る、丁ど日が暮れて間の無い頃。

此處へ件の年増の女中、土塀下に建腐の遊女屋の門から出て、夫婦松の根に倒れて居た、空蟬

の媚かしいばかりの巳代をすくくと引摺來て、燈臺下暗しと、いきまいたり。

然ればこそ、令室は其の古家に隠れて居るわ、と使命を辱めたる軍曹眞先に、巡查も恚と聞い

て立直り、執事がついて七八人、どやくと門の戸を、内へ倒して、釘を踏むな！床、縁、敷

居の朽ちたのを土足のまゝ、古疊に煙を立て、戸障子を亂離にして、間毎々々に二人三人づゝ立
分れながら込入つた、部屋の数凡そ荒らし抜いて、愈々暗い中を眞一文字に踏み込むと、不思議
や開戸が一枚、柱との合せ目に、新しい鐵砲が一挺。

多勢を力に、手に手に提灯をさゝげたが、左に四枚、右に四枚、此處ばかりは襖も揃つて、疊
の目一ツ摺剥げもせぬ、襖に描いた、墨繪の山水の、雨もりに染みながら、誰が筆ならむ、其の
墨のあとの認め得らるゝのを、巡査はとくと見て身顛をして退つたのである。
千枚岩の眞景であつた。

軍曹は然りとも知らず、遠くから及び腰に、ソツと鐵砲を取退けると、打つものがない飛道具
は因より音もせず煙も見えぬに、恐しく強くなり、當夜當手の一番乗と、ずらりと開くと押入の、
ものの上を、這つてするゝと解れて出たのは、一條媚かしい扱帶。

ト下に鴛鴦の羽を重ねたやう、美しく積まれた一重の絹の夜具、しやにむに紅の袖口から引摺
り出さうと突込んだ手に、人肌の暖かさ、ふつくりとしてこたへたので、言語道斷と、喚いて掴
み上げると何にもない、然も風にあたると、はらゝと切れて、裂々に裂けてばつと散つた。

一同は唾を呑んだが、押入の中は他に突當りの眞黒な壁ばかり。
すぼりと天窓から中へ入つて、軍曹は大の字形、地蜘蛛のやうに附着いて、天井を押上げ、羽

目を剥いで、顔を押あてて中を覗いた、トタンにキヤツと叫んで仰向けに倒れ、額を両手で押へ
たが、指の間からたらゝと鮮血が流れた。これで一同は引返すことになつたが、いづれも古釘
などの突出たので、暗まぎれの怪我といふのであつたが、軍曹は、中に得もいはれぬ美しい婦人
が居て、黒髪を前へ下げて、髻を握りながら解かして居たのを、透かして一目見るや、氣高い顔
で磔と睨め、手にして居た其の梳櫛のさきで、突かれたと、讒言を言ひゝゝ、長に失心したの
である、巡査も今は亡き人の數に入つた。

巳代は三年の後に籠の鳥、緑の襦、紅の袴を纏ふ身に成つた、慙くて朝な夕な、湯の山の
空を打視め、欄に凭り、簾を巻いて、果敢なく雪賣の爺の姿をのみ待つ。

土地の博士齡八十路に餘りたるが、これを聞いて評すらく、湯湧谷には女仙多し、但其の白き
兎を放ちたると、美しき魚を弄びたると、本地相同じきや否やを知らずと、若き男女は、縁に朱
のひだの入つた水上の山の状、大空の白い雲のたゝすまひも、あだには見過さぬ。

妖僧記

加賀の國黒壁は、金澤市の郊外一里程の處にあり、魔境を以て國中に鳴る。蓋し野田山の奥、深林幽暗の地たるに因れり。

茲に摩利支天を安置し、之に册く山伏の住へる寺院を中心とせる、一落の山廓あり。戸數は三十有餘にて、住民殆ど四五十年なるが、いづれも俗塵を厭ひて遯世したるが集りて、悠悠閑日月を送るなり。

然れば夜となく、晝となく、笛、太鼓、鼓などの、舞囃子の音に和して、謠の聲起り、深更時ならぬに琴、琵琶など響微に、金澤の寢耳に達する事あり。

一歳初夏の頃より、此のあたりを徘徊せる、世にも忌はしき乞食僧あり、其の何處より來りしやを知らず、忽然黒壁に住める人の眼界に顯れしが、殆ど濕地に蛆を生ずる如く、自然に湧き出でたるやの觀ありき。乞食僧は其の年紀三十四五なるべし。寸々に裂けたる鼠の法衣を結び合せ、繋ぎ懸けて、辛うじて之を絡へり。

容貌甚だ憔悴し、全身黒み瘦せて、爪長く髻短し、唯之のみならむには、一般乞食と變はらざれども、一度其鼻を見る時は、誰人といへども、造化の奇を弄するも、亦甚だしきに、驚かざるを得ざるなり。鼻は大にして高く、而も幅廣に膨れたり。其の尖は少しく曲み、赤く色着きて艶あり。鼻の筋通りたれば、額より口の邊まで、顔は一面の鼻にして、瘦せたる頬は無きが如く、若し掌を以て鼻を蔽へば、乞食僧の顔は隠れ去るなり。人ありて遠くより渠を望む時は、鼻が杖を突きて歩むが如し。

乞食僧は一條の杖を手にして、須臾も之を放つことなし。

杖は丁状の自然木なるが、其の曲りたる處に鼻を凭たせつ、手は後様に骨盤の邊に組み合せて、所作なき時は立ちながら憩ひぬ。要するに吾人が腰掛けて憩ふが如く、乞食僧にありては、杖が鼻の椅子なりけり。

奇絶なる鼻の持主は、乞丐の徒には相違なきも、強ち人の憐愍を乞はず、曾て米錢の惠與を強ひしことなし。喜捨する者あれば鷹揚に請取ること、恰も上人が檀越の布施を納むるが如き勿體振りなり。

人若し其の倨傲なるを憎みて、些の米錢を與へざらむか、乞食僧は敢て意となさず、決して又餓ゑむともせず。

此の黒壁には、夏候一疋の蚊もなしと誇るまでに、蝦蟇の多き處なるが、乞食僧は巧に之を漁りて引裂き啖ふに、約ね一夕十數疋を以て足れりとせり。
然れば乞食僧は、晝間何處にか潛伏して、絶えて人に見えず、黄昏蝦蟇の這出づる頃を期して、飄然と出現し、此處の軒下、彼處の塀際、垣根あたりの薄暗闇に隠見しつゝ、腹に充たして後は又何處へか消え去るなり。

二

爰に醜怪なる蝦蟇法師と正反對して、玲瓏玉を欺く妙齡の美人ありて、黒壁に住居せり。渠は清川お通とて、親も兄弟もあらぬ獨身なるが、家と同じくする者としては、僅に一人の老嫗あるのみ、是其の婢なり。

お通は清川何某とて、五百石を領せし舊藩士の娘なるが、幼にして父を失ひ、去々年また母を失ひ、全く孤獨の身とはなり果てつゝ、知れる人の嫁入れ、婿娶れと要らざる世話を憫惱く思ひて、母の一周忌の終るとともに金澤の家を引拂ひ、去年よりこゝに移りたるなり。固より巨額の公債を有し、衣食に事缺かざれば、花車風流に日を送りて、何の不足もあらざる身なるに、月の如く其顔は一片の雲に蔽はれて晴るゝことなし。これ母親の死を悲み別離に泣きし涙の今なほ雙頬

に懸れるを光陰の手も拭ひ去る能はざるなりけり。

讀書、彈琴、月雪花、其等のものは一つとして憂愁を癒すに足らず、轉た懷舊の媒となりぬ。

但野田山の墳墓を掃ひて、母上と呼びながら土に縋りて泣き伏すをば、此上無き娯樂として、お通は日課の如く參詣せり。

七月の十五日は殊に魂祭の當日なれば、夕涼より家を出でて獨り彼處に赴きけり。

野田山に墓は多けれど詣來る者最少なく墓守る法師もあらざれば、雜草生茂りて卒堵婆倒れ斷塚壞墳算を亂して、満目轉た荒涼たり。

何時變らぬことながら、お通は追懷の涙を灌ぎ、花を手向けて香を燻じ、在ますが如く齊眉きて一時餘も物語りて、歸宅の道は暗うなりぬ。

急足に黒壁さして立戻る、十間ばかり間を置きて、背後よりぬき足さし足、密に歩を運ぶはかの乞食僧なり。渠がお通のあとを追ふは殆ど旬日前よりにして、美人が外出をなすに逢うては、影の形に添ふ如く絶えず其處此處附絡ふを、お通は知らねど見たる者あり。此夕もまた美人を其家まで送り届けし後、杉の根の外に佇みて、例の如く鼻に杖をつきて休らひたり。

時に一縷の暗香ありて、垣の内より洩れけるにぞ法師は鼻を蠢めかして、密に裡を差覗けば、美人は行水を使ひしやらむ、浴衣涼しく引絡ひ、人目のあらぬ處なれば、卷帶委締はで端居した

る、胸のあたりの眞白きに腰の紅添ひて、眩きばかり美はしきを、蝦蟆法師は左瞻右視、或は手を掉り、足を爪立て、操人形の動くが如き奇異なる身振をしたりとせよ、何思ひけむ踵を返し、更に迂回して柴折戸のある方に行き、言葉より先に笑懸けて、「暖き飯一膳與へたまへ」と巨なる鼻を庭前へ差出しぬ。

未だ乞食僧を知らざる者の、斯る時不意に此鼻に出會ひなば少なくとも絶叫すべし、美人は已に渠を知れり。且つ其狂か、癡か、いづれ常識無き阿房なるを聞きたれば、驚ける氣色も無く、行水に亂鬢の毛を鏡に對して撫附けるたりけり。

蝦蟆法師はためつすがめつ、さも審かしげに鼻を傾けお通が爲せる業を視めたるが、をかしげなる聲を發し、「其は」と美人の手にしたる鏡を指して尋ねたり。妙なることを聞く者よとお通は纔に見返りて、「鏡」とばかり答へたり。阿房はなほも推返して、「何の用にするぞ」と問ひぬ。「姿を映して見るものなり、御僧も鼻を映して見給へかし。」といひさま鏡を差向けつ。蝦蟆法師は飛退りて、さも恐れたる風情にて鼻を飛ばして遁去りける。

これを語り次ぎ傳へ聞きて黒壁の人々は明かに蝦蟆法師の價値を解したり。なほ且つ、渠等は乞食僧のお通に對して馬鹿々々しき思ひを運ぶを知りたれば、いよく其阿房なることを確めぬ。さりながら鏡を示されし時乞食僧は逃げ去りつ、人知れず左記の數言を吐きたり。

「予は自ら誓へり、世を終るまで鏡を見じと、然り斷じて鏡を見まじ。否これを見ざるのみならず、今思出したる鏡といふ品の名さへ、務めて忘れねばならぬなり。」

三

蝦蟆法師がお通に意あるが如き素振を認めたる連中は、これをお通が召使の老嫗に語りて、且つ戯れ、且つ戒めぬ。

毎夕納涼臺に集る輩は、喋々しく蝦蟆法師の噂をなして、何者にまれ乞食僧の晝間の住家を探り出だして、其來歴を發出さむ者には、賭物として金一圓を抛たむと言ひあへりき、一夕お通は例の如く野田山に墓參して、家に歸れば日は暮れつ。火を點じて後、窓を展きて屋外の蓮池を背にし、涼を取りつ、机に向ひて、亡き母の供養のために法華經を寫したる。其傍に老嫗ありて、頻に針を運ばせつ。時に彼の蝦蟆法師は、何處を徘徊したりけむ、不圖今此處に来れるが、早くもお通の姿を見て、眼を細め舌なめすりし、恍惚たるもの久しかりし、乞食僧は美人莫しとでも思へるやらむ、むくく鼻を蠢かし漸次に顔を近附けたる、面が格子を覗くとともに、鼻は遠慮無く内に入りて、お通の頬を掠めむとせり。

珍容に驚きて、お通はあれと身を退きしが、事の餘りに滑稽なるにぞ、老婆も叱言いふ違なく、

同時に物々と吹き出しける。

蝦蟆法師は悞りて、歡心を購へりと思ひけむ、悦氣満面に満ち溢れて、うな、うな、と笑ひつゝ、頻りにものを言ひ懸けたり。

お通は豫て忌嫌へる鼻がものいふことなれば、冷然として見も返らず。老媪は更に取合ねど、鼻はなほもづうしく、役にも立たぬことばかり句切もなさで饒舌散らす。其の懊惱さに堪へざれば、手を以て去れと命すれど、いつかな鼻を引込まさぬより、老媪はじれてやつきとなり、手にしたる針の尖を鼻の天窓に突立てぬ。

あはれ乞食僧は留を刺されて、「痛し。」と身體を反返り、涎をなすりて逸物を撫廻し、はふはふの體にて遁出しつ。走り去ること一町ばかり、俄然留り振返り、蓮池を一つ隔てたる、燈火の影を吃と見し、眼の色はたゞならで、怨毒を以て満たされたり。其時乞食僧は杖を掉上げ、「手段の奈何をさへ問はざれば何の望か達せざらむ。」

恚は斷乎として言放ち、大地を轟と打敲きつ、首を縮め、杖をつき、徐ろに歩を回らしける。其背後より拔足差足、密に後をつけて行く一人の老媪あり。これ彼のお通の召使が、未だ何人も知り得ざる蝦蟆法師の居所を探りて、納涼臺が賭物したる、若干の金子を得むと、お通の制むるをも肯かずして、そこに追及したりしなり。呼吸を殺して従ひ行くに、阿房は然りとも知らざる

る状にて、殆ど足を曳摺る如く杖に縋りて歩行み行けり。

人里を出離れつ。北の方角に進むこと凡二町ばかりにて、山盡きて、谷となる。こゝ、嶮峻なる

絶壁にて、勾配の急なること恰も一帯の壁に似たり、松杉を以て點綴せる山間の谷なれば、緑樹長に陰をなして、草木が漆黒の色を呈するより、黒壁とは名附くるにて、此半腹の洞穴にこそ彼の摩利支天は祀られたれ。

遙かに瞰下す幽谷は、白日闇の別境にて、夜晝なしに霧を籠め、脚下に雨のそぼ降る如く、溪流暗に魔言を説きて、啾々たる鬼氣人を襲ふ、其物凄さ謂はむ方なし。

まさか此處とは想はざりし、老媪は恐怖の念に堪へず、魍魅魍魎隊をなして、前途に塞るとも覺しきに、愆にも一步を移し得ず、あはれ立竦になりける時、二點の螢光此方を見向き、一喝して、「何者ぞ。」掉冠れる蝦蟆法師の杖の下に老媪は呵呀と蹲踞りぬ。

蝦蟆法師は流眄に懸け、「へ、へ、へ、うむ正に此奴なり、予が顔を傷附けたる、大膽者、讐返といふことのあるを知らずして」傲然としてせ、ら笑ふ。

これを聞くより老媪はぞつと心臓まで寒くなりて、全體氷柱に化したる如く、いと哀れなる聲を發して、「命ばかりはお助けあれ。」とがたく震へて居たりける。

さるほどに蝦蟇法師は飽まで老嫗の膽を奪ひて、「コヤ老嫗、汝の主婦を媒妁して我執念を晴らさせよ。もし犠牲を捧げざれば、お通は固より汝もあまり好きことはなかるべきなり、忘れてもとりもつべし。其まで命を預け置かむ、命冥加な老耆めが。」と荒らかに言葉で、疾風土を捲いて起ると覺しく、恐るゝ首を擡げあぐれば、蝦蟇法師は身を以て隕すが如く下り行き、霧に隠れて失せたりけり。

やれゝ生命を拾ひたりと、眞蒼になりて遁歸れば、冷たくなれる納臺に未だ二三人居残りたるが、老嫗の姿を見るよりも、「探検し來りしよな、蝦蟇法師の住居は何處。」と右左より争ひ問はれて、答ふる聲も震へながら、「何がなしに一件ぢや、此なり此なり。」と、握拳を鼻の上にぞ重たる、乞食僧の人物や、これを癡と言むよりはた又狂と言むより、尤も魔たるに適するなり。もし然らずば少なくとも魔法使に適するなり。

斯りし後法師の鼻は甚だ威勢あるものとなりて、暗裡人をして恐れしめ、自然黒壁を支配せり。こは一般に老若が太く魔僧を忌憚り、敬して遠ざからむと勤めしよりなり、誰か妖星の天に歸して、眼界を去らむことを望まざるべき。

こ、に最も其然らむことを望む者は、蝦蟇と、清川お通となり。如何となればあまたの人の嫌惡に堪へざる乞食僧の、黒壁に出没するは、蝦蟇とお通のあるためなりと納涼臺にて語り合へるを美人はふと聞嚙りしことあればなり、思うてこ、に到る毎に、お通は執心の恐しさに、「母上、母上」と亡母を念じて、己が身邊に絡纏りつゝある淫魔を却けられむことを哀願しき。お通の心は世に亡き母の今も其身とともに在して、幼少のみぎりに於けるが如く其心願を母に請へば、必ず肯かるべしと信するなり。

さりながらいかにせむ、お通は遂に乞食僧の犠牲にならざるべからざる由老嫗の口より宣告されぬ。

前日、黒壁に賁臨せる蝦蟇法師への貢として、この美人を捧げざれば、到底好き事はあらざるべしと、恫愕的に乞食僧より、最も渠を信仰して其魔法使たるを疑はざる件の老嫗に媒妁すべく言込みしを、老嫗もお通に言出しかねて一日免れに猶豫しが、厳しく乞食僧に催促されて、謂はで果つべきことならねば、止むことを得で取次たるなり。然るにお通は豫め其趣を心得たれば、老嫗が推測りしほどには驚かさざりき。

美人は冷然として老嫗を諭しぬ、「母上の世に在さば何とこれを裁き給はむ、先づ其を思ひ見よ、必ず斯る乞食の妻となれとはいひ給はじ。」と謂はれて返さむ言も無けれど、老嫗は甚だしき迷信

者なれば乞食僧の恐喝を眞とするにぞ、生命に關はる大事と思ひて、「彼奴は神通廣大なる魔法使にて候へば、何を仕出ださむも料り難し。さりとして鼻に従ひ給へと私申上げはなさねども、よき御分別もおはさぬか。」と熱心に云へば冷かに、「いや、分別も何もなし、たとひいかなることありとも、母上の御心に合はぬ事は誓つてせまじ。」

と手強き謝絶に取附く島なく、老嫗は太く困じ果てしが、何思ひけむ小膝を拍ち、「すべて一心固りたるほど、強く恐しき者はなきが、鼻が難題を免れむには、此方よりも其相當の難題を吹込みて、これだけのことをしさへすれば、其だけの望に應ずべしと斯ういふ風に談ずるが第一手段に候なり、昔語に然ること侍りき、こゝに一條の蛇ありて、とある武士の妻に懸想なし、頑にいやうじ着きて離るべくもなかりしを、其夫何某智慧ある人にて、欺きて蛇に約し、汝巨鷲の頭三個を得て、其を我に渡しなば、妻をやらむとこたへしに、蛇は是を諾ひて鷲と戦ひ亡失せしといふことの候なり。されど今愍に鷲の首などと謂ふ時は、彼の恐しき魔法使の整へ來ぬとも料り難く困りて婆々が思案には、(其方の言分承知したれど、親の許のなくてはならず、母上だに引承たまはば何時にても妻とならむ、去つて先づ母上に請來れ)と、斯様に貴娘が仰せられし、と私より申さむか、何が扱母君は疾に世に亡き御方なれば、出來ぬ相談と申すもの、とても出來ない相談の出來よう筈のなきことゆゑ、いかなる鼻もこれには弱りて、しまひに泣寝入となるは必定、

ナニ御心配なされますな、と説く處の道理なるに、お通もうかと頷きぬ。斯くて老嫗がこのよしを蝦蟇法師に傳へて後、鼻は黒壁に見えずなれり。

さては旨いぞシテ操つたり、とお通には固より納涼臺にも老嫗は智慧を誇りけるが、奚んぞ知らむ黒壁に消えし蝦蟇法師の、野田山の墓地に顯れて、お通が母の墳墓の前に結跏趺坐してあらむとは。

其夕もまた其處に詣でし、お通は一目見て蒼くなりぬ。

祝

杯

「北溟に魚あり、其の名を鯤といふ、鯤の大なる其の幾千里なるを知らず」とモオニングゴオトの膝に手をつき、片手の手中で唇の邊を拭ひながら、突如として説き出した。新橋ブラットホオムの樓上なるビイヤホルの中央室、白の蔽の、清く且美しき一脚の卓子を、五脚の椅子、同一人數で領した中の、一名の人物、柏崎信一といつて火災保險會社の社員であるが、眈の切れ上つた瞳を据ゑ、此の時屹となつたので、一同ナイフの手を留め、硝子杯を差措いて、齊しく其の眞面目なる顔を瞻めた。最も近く椅子を並べたのが、新聞記者、松田正三郎、秋の末頃なれば未だ外套を着に及ばず、酒も足りないから薄着の寒さうなのが、些と鐵拐に見えたが、振向き、

「大分喧しいね。」

柏崎は益々沈着なる態度を以て、

「然り而して、東海に魚あり、其の名を蝦と謂ひます。」

「え」と一人驚いたものがある、是は大學の制服を着た青年で、藤岡主税といふ、柏崎と的面に

差向ひで居た。

其の時説く者は肩を聳かし、體を斜にして、手巾を左の衣囊に押込むと、靴をポカリと遣つて、反つてた胸をぐツと卓子に押着けて、五皿一様に並べた料理の、我が前なるに指をさし、

「此處にあるのが、其のフライさ、即ち蝦のフライさ。」

「何のこつた」と同一ことを新聞記者松田と、殆ど同時に同音にいつたのは、樓の入口を背に、卓子の横の方、左の一方を占めた、子爵橘家の貴公子である。

「で、僕は之を食べるのであります」と柏崎は大業に俯向様に口を差寄せて、豫め心懸けたものと見える、可い加減にこなして置いたのを、フォークの尖にかけて、手際よく一口にひよいとして遣り、

「旨いよ」とけろりとする、何事とも知らず唯見て居た一同、此の體に皆苦笑。

「些と酔つたさ。」

「むゝ」と頷いて、記者と學生は目配せをした。

「見給へ〜、ブランドイの猪口を二杯とも空にした、唯た十分の間だよ。」と子爵は金時計を一

「諸君。」

と此時、柏崎はすつくと立つて、椅子を離れ、
「諸君、然るに此處に、此の蝦なるものを食し能はぬといふ男があります。」
記者、

「あ、其の事か。」

「何だ、其の事か。」と子爵も莞爾する。

柏崎は其まゝ又腰をかけて、呵々と笑ひ、

「ね、何うです、私はオムレットにするツさ、私はオムレットを食べますとさ、卑怯未練だ。」

「こらく、鳶口。」と耐りかねて口を抉んだのは卓子の右の一方に控へた、西洋畫家紫派の一員
で、守山彌吉、即ちオムレットを食する人物。

「何だ、鳶口？」

「君のことだよ。」學生が註を入れる。

「は、あ、鳶口か、何か、俺が江戸ッ兒で喧嘩ッ疾いと云ふことか。」

「迂遠なものだね、鳶口と謂へば江戸ッ兒で喧嘩ッ疾い、道理こそ守山がフライを食はぬといふ
ことを饒舌るのに身振聲色を遣つた。」

「何が迂遠だい。」

「柏崎、然う深く考へないでも可い、火災保険だから直ぐに鳶口ぢやあないか、」子爵が記者の
言を引取る。
學生が傍より、

「皆、蔭で然ういふよ。」

「面と向つてさへ言はア。」と柏崎は呟いた。

畫家は大に其の意を得たるものの如く、

「然うさ、北溟に鳥あり、其の名は鳶口。」

二

柏崎は屹と睨めつけ、

「何をオムレッツ、口惜くば蝦を食へ、是を食はないものは天下の豪傑でない。ねえ、諸君、これ、
皆うむと言へ。俺の言葉を信じないか、誰だと思ふ。」

「鳶と思ふよ、北溟に鳥ありさ、其の名を鳶といふ、鳶の大袈裟、其の幾層倍なるを知らず。」

「黙れ、黙れ、蝦を食はずして何ぞ。」

「待ち給へ、守山君が蝦を食へないのは敢て其の味を美ならずと爲さず、其の形を蟲なりとせず、

其の肉を毒なりとせずだけれども、西洋畫を描く癖に恐ろしく國粹保存で、女子の服裝の如き、就中、當代の海老茶袴なるものを嫌ふから、其處で食べないんでせう。」と學生は温乎として其口髭を捻つて言つた。

守山は額に手をあて、

「敬服々々、藤岡は僕を知るものだ。」

「何を！此奴等。」とばかりで、柏崎はビールの大硝子杯を仰いで、ゴツ／＼と一呼吸つく。

と記者は頬杖しつゝ、あいた手の指の尖で硝子杯の縁を軽く叩きながら、

「よし、蝦はまあ其にもしませう。私は別に梯子を擔いで鳶口の肩を持つ譯ぢやありませんがね、

守山氏の卑怯は、敢て其に限りません。此間一處で、守山氏と子爵と私と三人で會しました、其

時ねえ、子爵。」

「素破抜きかい。」と莞爾する。

「時正に兵を出すに妙でさ。處で一品出たものがあります。鳶口さんの言種ぢやないが、こゝに

タンスチウと言ふものがあります。」

柏崎は咽を鳴して、

「北溟に魚あり、其の名をタンスチウさ、むゝ、ある、ある、あるとも！」と續けざま。

「御存じの牛舌、言ふまでもありません、牛の舌の旨煮さね。」

「解つたよ／＼、解りましたと云ふのに。」と守山は目を反した。

「然もトマトを調味して、榨色にとろりと出来てました。先生半分ばかり退治たがね、變な顔色

で、ナイフの平で件のところ／＼を搔き退けて、之は何だと尋ねます。牛の舌と言ふとね、ふゝ

ふゝ」

「露と答へて消なましものを。」と子爵はナイフを差置き、背ざまに椅子に身を凭らして、腰の衣

囊に兩手を突込み、其の秀麗なる顔を上上げて、守山を熟と見る。

「先生、些と驚いた色のある處へ、子爵が警句を吐きました。先生之を召食するのは、宛然牛と接

吻をするやうなものですツさ。」

柏崎は聞いて大得意、故と外方を向きながら、守山の背中をどんと一つ。

「其處で先生泣くにも泣かれずか、大奇談。」

「北溟に奇談あり、牛と接吻ぢやあないか。」

「本當に其の時の顔色ツたら、藤岡さん君にも見せたかつたよ。」

藤岡主税は先刻から、人々の顔を樂しげに見て、卷莖を燻せて居たが、火皿の上へ靜に置いて、

「否、ものには好嫌があるものです。猛獸毒蛇に驚かぬのが、芋蟲に恐れたり、蜥蜴を嫌つたり